

玩して、亦絶海に次いで當時に傑出せる作者と仰がれしも、猶ほ其の本領とする所は宋代清新の氣脈を承けて、極めて流麗暢達の筆路を追ふに在り。其の翰を振つて立るに成るの篇章、駿爽挺勁、些かの險澁滯蓄の跡の見らるべからざるは、以て吾が仲靈と比論の甚だ謬らざるを證すべき所なり。されば彼は必ずしも韓子といはず、柳子と言はず、將た蘇子と言はず。要するに一家を以て名のるものに非ず。題目に應じて各其の妙を盡し、山陽拙堂等が集中に混じて優に特色あるのみならず、老坡が明快の筆も甚だ此處に誇るに足らざるを覺ゆ。即ち其の日工集の如き、日乗たるが爲めに洗煉せる文字を出すに逸なきに拘はらず、隨筆揮灑、便ち章を成し、紀叙議論の秀峭なるあり、清麗なるあり、蒼勁なるあり、超妙なるあり、滿幅の異彩爛として人の眉目に逼る。試みに左の數節に於いて之を觀よ。

十一月八日、病臥爐邊、五更聞鳥啼、戲作句、與梵妙雜者曰、鳥啼催曉色、妙對曰、鷹叫覺天低、妙見余吐痰爲穢、余戲問曰、即今作穢相者是何物、妙曰我也、余語曰、爾自頂至踵、或皮或骨乃髮毛爪齒等也、於此中間何物是我、妙無以答、余曰、我既無、則淨不淨相果何在、妙笑而答曰、我不是佛、何得知無我、余曰、爾即是佛、妙曰、佛者放光、我是無光、何得謂之佛、余曰、若以放光爲佛、爾必被狐惑、狐亦解放光、慎勿認光爲佛、妙諾而退。

端を目前に借りて妙に理義を説き、而も逸趣横生を覺ゆ。其の襟期の寥曠を示すには、

十日昏鐘、獨步適淨妙、芳庭夜話、芳庭與余有二十年之素、嘗同栖洛之西山、相從久矣。故引舊事古尊宿、泊今代名衲行道之事、而商量之、不容世間事、余曰凡爲道人、先破我相、而後可稱佛子、視世間一切人、如吾一子、然不見自他彼此之異、又今時禪宗之弊、乃名位也、名位皆職也、百丈兩序之設爲安樂也、之本在于行道、而令人取以爲私名及位、僥倖乎官家、自生至死、此念不斷、可痛惜也、可大笑也、莊子曰、道隱於大成、余曰、禪隱於名位、然而古人以名位爲稱者何也、則借位明功也、芳庭頷之、夜深爐邊而同寢、猶語不已、遂及生死事大、又語曰、今時林兄弟家三百五百緊首、未嘗以生死二字、泊坐禪宗門事爲口實者、是乃邪師過謬也、不亦悲也。

又た、

十一日、昌侍者來遊、阻雨而宿、作詩見示、頗有旅況無聊之態、余告曰、凡述作願其所養何如耳、出家人以天地爲旅亭、何無聊之有、四更定起、呼中乾令煮茅茶一盞、點燭迅筆和昌之作、兼簡報國在中行公、時空階雨點、微々而響也。

の如き簡淨清警の音最も多し。

十八日禪起、庭下巡視、草木紅梅將萎、視之則外皮如故、但蟲蠶其內耳、因謂道友曰、凡物爲害於外者易治、爲內者人不得而知、故及其已壞乃見、無可奈何、故有形之惡易治、無形之病難醫、

二月一日大雪、午后掃雪、登一覽亭、與諸公同時、時雪晴、斜暉映遠岫、海水一帶碧色、遍界皆白、獨富士山、不與他山同、蓋它山無雪、則此山獨白、今則諸峯皆白、此山獨青、余感云、賢士之處世也、通斥不與俗同、此山類焉、乍見宮根山上、一點蒼烟如狗、須臾變白、杜陵之句不虛也。

五月十四日、圓覺天池瑞光二庵、因袈裟上條事、不好人分爲兩黨連署、周一侍者與焉、余誠令請暇、且云余自十七爲僧、至今四十六、未嘗毀人、亦未手兵器、或聞不好人事、則誓不與其人同居、吁嗟可惜、今時佛法破滅矣、奈何々々、乃教圓侍者、住圓覺告退、於石屏寮告諸老宿曰、今時叢林、不宜老病者之居、况屋宅之設、只得一宿之過年、豈可蜿蜒戀窟者哉、又余天生不與時儀合、如水炭不相容耳、理合抽身岩穴待死、豈與兒輩爭捷徑者哉、

摘み來れば片々皆氣味竊然の小品を得つべし。而して竟に一點塵垢の來着を許さざるなり。柳州老坡も首肯せざらんや。若し夫れ彼が集中に於いて雄健渾厚の述作を求むれば、銅雀研記を推さざるを得ず。是れ塙保己一氏の群書類從を集するに當り、其の文筆部に收め、大江匡房等王朝作者の間に置きし者なり。

昔者魏曹操、字孟德、初事後漢爲丞相、及受漢禪、建都於鄴、建安十五年、創作銅雀臺、蓋鑄銅

雀置臺上、因以爲名焉、或曰銅雀乃銅鳳凰也、而臺上有屋百二十間、勢凌蒼穹、其上置宮妓、遺令曰、吾妓皆着銅雀臺、月朔十五日、望吾西陵墓、及魏七臺廢爲墟、有里人耕其趾者、往々得其古瓦、盛水爲研、爲世所貴重、由是文人題詠登于史籍者多、今見研實其一也、初天龍長老春屋菴禪師、得之於海舶、獻關東幕府、大人府君源公、天資文雅、每乘軍務之際、從事翰墨、以文武兼資也、既得是研而甚喜、於是命工雕、匣以藏之、鏤管以揮之、磨以研之、金縷以滴之、呼爲文房至寶焉、適出以示小比丘周信、命俾作記、余觀其瓦背、有銘云、建安十五年、其面上下亦有銘、上銘後云、紹聖元年七月十六日東坡居士書、下銘後則云、黃庭堅書、左右又有銘、各二行、古篆不可讀者數字、余退歸山舍、考之倭漢歷書、其曰建安十五年、卽後漢末主獻帝、其年庚寅當本朝女主神功皇后十一年也、其曰紹聖元年、卽趙宋第七主哲宗、其年甲戌、當本朝堀河院嘉保元年也、今邇而推之、自建安十五年庚寅、至紹聖元年甲戌、八百八十四年、自甲戌至今本朝貞治三年甲辰、凡二百七十一年、通計一千一百五十五年矣、其曰東坡居士、卽蘇子瞻也、其曰黃庭堅、卽山谷也、考之二公年譜、蓋東坡紹聖元年、忤旨有南遷之責、赴于惠州、舟中與山谷邂逅於彭蠡之間、而爲山谷作是銘也、惟夫漢之建安、盡二十五年、而天下分爲三國、曰魏、曰吳、曰蜀、而其統爲魏、々亡而爲西晉、爲東晉、々亡天下分爲南北兩朝、曰北朝則元魏也、北齊也、後周也、南朝則爲劉

宋、爲南齊、爲蕭梁、爲陳氏、爲隋氏、隋氏也亡、而后唐興、有天下者二百八十八年、而降爲五代、曰後梁、曰後唐、曰後漢、曰後周、五代共五十六年、而天下歸於趙宋、宋治歷三百一十七年、而天下屬于蒙元矣、於戲自漢以降興亡治亂、山爲谷、谷爲陵、人物之更換、都邑之變遷、不啻千萬、而是研也、孑然獨存、不亦壽乎、或曰、吾國遠彼鄴都幾乎數萬里、而山復海阻、是研也、無翼而飛、無足而至何也、曰人君修德、則遠人歸方物至、理必然也、惟我府君、果能修其德、以待物、則四夷八蠻之國、珠翠象犀之貢、威弗加而自服、譯弗重而自獻、豈止是研而已矣、但玩物喪志、則君子不取、余既爲先君玉岩听公作銅雀研記、後四年以丁未四月廿六日、君薨于府第、年廿八、人咸惜其賢而不壽、既而遺命薙髮著僧伽梨、輿歸於瑞泉蘭若、依佛氏葬法而茶毗之、仍用唐魚軍容陪祀南陽忠國師故事、附于開山正覺國師之右、則研遂藏于此矣、而不肖皆預其事、及永祐首歲夏、方今古天誓禪師來自雒都主是席、時適以唐人李氏作銅雀臺圖一幅、獻于今令嗣府君左典厩公、公喜而寶藏之、余一日入府、求觀其圖、乃見鳳鳥翬然、跨屋背如前記云者矣、而上有江南當代儒釋名勝題詩者五人、其釋仲銘新公詩最可觀也、曰銅雀煌々鄴水湄、生靈塗炭國分離、五塔三尺菲茨下、鑿井耕田總不知、蓋以戒奢侈也、余退靜而思之、凡物之隱顯離合、皆有數而存焉、今是研之與畫並銅雀、而相次爲吾府君賢父子之所有、若冥符焉、豈非有數者乎、余遂併志以附于

銅雀研記之末云、是歲乙卯冬十月釋義堂某於在城西門保壽精舍、(空華集には余既に以下を分ちて別に一篇とせり)

記は則ち順筆直走せしものに過ぎざれど、而も通林響亮、必らずしも其の着語の間多少の疎率あるを咎むるに暇あらず。林羅山にも同じく銅雀研記あるも、其の平凡なる、義堂が作とは自から前後牀を別つて見ざるべからず。羅山曾て惺窩の見を承けて、祭文之法有四焉、一曰德、二曰死、三曰哀、四曰奠、此邦之禪僧、周信義堂、中津絶海、二人集載祭文、四美具也と言へり。義堂の美を具する獨り祭文に於いて之を見ざるなり。此の篇の如き其の風調を論ずれば自からはれ鐘津北湖集中の者たりとす。以て彼の六朝屏弱の餘習を一洗し、剛健清新の體格を開きし祖と爲す可し。此篇一たび出づるや、忽ち世に傳唱せられ、明使瓦官講師釋無逸等、義堂が詩文藝を見て極口之を稱揚し、携へて國に歸る。當時彼土に客たりし者往々にして人の彼が作を稱道するを見しと言ふ。四明の詩僧楚石は之を以つて入唐者の作となし、人の之を解くあるも容易く信ぜず。遂に不謂日本國有此郎耶と歎賞するに至りぬ。又た文學の碩僧空室は義堂が爲めに特に空華歌を作る。歌に曰く、

空華無帶從何生、目前裸殞森從衡、得非目青華乃成、幻起幻滅無實形、道人空華榜其室、應知此室終非實、幻成幻住幻壞空、與彼空華體元一、豈獨此室如空華、是身世界曾不差、涅槃生死亦復爾、聖名凡號寧堪誇、道人燕坐此室內、一心廓耐空三際、手握寶劔金剛王、擊著須彌成粉碎、空

本空兮華本無、趙州壁上懸胡盧、篆烟半銷月在牖、寥々永夜栖團蒲、

楚石、全室共に當時三竺文字禪僧の魁たり。而も其の所長は詩及び四六に在り。文章に於ては元明の緇流に於て未だ義堂が匹儔を見出し難し。蓋し義堂が筆端は獨り禪文の中に窘束する者にあらざればなり。昔者我に僧空海あり。緇流の達文家を以て稱せられしと雖ども、亦唯に緇流の達文家に止まる。一部の性靈集は主として讚佛喩法の語を出せず。未だ以て江湖の文士と同論す可らず。近代に至りては僧大典の筆趣稍や純文の色相の認むべきあるのみ。而して更に之を五山の作家に見るに、虎關は之を再説せず、中巖が中正子、夢巖が早霖集、瑞溪が日伴錄、國寶記、入明記、碧山・蔭涼が日記、惟肖が瓊華集、岐陽が不二集、慧風が竹居清事、宜竹が翻林胡盧集の如き、何れも清健なる宋文の氣格體制を具備し、多々頗る賞玩すべきものを見ること後人意料の外に在る有るも、其の間多少の消長の存せざる能はず。亦義堂に向つては自ら皆二流以下に立たざるを得ず。之が細倫の如きは將に他日を期せんとす。

要之我邦に於ける漢文の低昂を觀るに當りては、義堂は固より脱忘せらるべからず。若し我邦に於ける漢詩を論ずるに當りては、之が標準を先づ絶海に取らざるを得ず。而して若し更に五山に於ける詩を論ずるに及んでは、則ち其の最も注視すべき所義堂に在りと言はざるべからず。蓋し絶海は全く荀蕤の氣を絶ち義堂は猶ほ然らざるものあり。以て五山の氣風を代表せしむるに便なればなり。中巖曾て空華集中に序して彼が詩を品定して曰く、

友人信義堂、禪文借熟、餘力學詩、風騷以後作者、商參而究之、最於老杜老坡二集、讀之稔焉、面醞釀於曾中既久矣、時或感物興發而作、則雄壯健峻、幽遠古淡、衆體具矣、若夫高之如山嶽、深之如河海、明之如日月、冥之如鬼神、其變化如風雲雷電、其珍奇如珠貝金璧、以至其縱逸橫放、則如獵虎豹熊羆之猛然角之拮之、其力不得暫假焉、紫燕之喧、黃鸝之嫩、其聲於是無耻乎、既然不以己所能之功爲自伐也、非惟不自伐爾、視之空華翳於病目、故目乃集曰空華、吾先師爲淵才雅思文中王祇夜伽陀、梵音妙唱、令人樂聞、然亦謂諸佛世界猶如空華亂起亂滅、不即不離、義堂設心在焉、自非禪文借熟、安能如斯之爲耶、

五山の禪徒動もすれば義堂が詩を以て絶海が上に置く者有るに至りては、既にその所好の癖たるを免れざるも、亦以て義堂が詩の五山の面目發揮に關して如何に重き所ありしやを推知すべきなり。彼の詩を見るや、普通詩家本色の見地に依るに非ず、其の古標唱和集叙言の如きを以て之を知るに足るべし。曰く、

夫知堯舜志者二典之言也、知文王之志者周易之言也、知仲尼之志者春秋也、知周人之志者詩三百

也、若夫雖吾佛心宗之徒見性自悟者、至於授受心法之際、亦不得_不寓其言以示其志、然則往古之聖賢賢去世雖曠萬世之遠、及誦其書、得其意則心照目睹、猶如兩鏡相臨、間不容髮、故曰死者形也、存者志也、

既に志を以て不死となす。志ある詩は則ち不死なり。以て傳ふべきなり。傳ふること何如。形は死なり。之が用に充つる能はず。故に彼れ悟を説く。儒釋皆以悟爲宗、不獨儒釋二氏、凡一能一藝、皆有悟門、造其妙者、如輪扁庖丁是也。曰く、述作之妙、在自在、刻意巧妙則不可也、曰く、心不可説、惟自悟、則不待人説。彼の詩に於ける佛祖の心法を傳へんが爲めのみ。彼が詩は即ち禪のみ。嚴羽が詩辯に、禪家者流、乘有_小大、宗有_南北、道有_邪正、學者須從最乘、具正法眼、悟第一義、若小乘禪聲聞辟支果、皆非正也、論詩如論禪云云、大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟云云、と言ひしもの、以て之が注解と爲す可し。故に秀嵩侍者の杜詩を講せんことを求めしを拒み、反つて勸むるに佛學を以てして曰く、今時學詩者、專以俗樣而爲習、是可戒也、俗文之體、爲吾眞乘之偈、是則名爲善用者也。彼れ詩を以て偈に代へ又疏に代ふるのみ。其の徒弟の爲めに三體詩法を講ずるに因り、凡吾徒學詩則不爲俗子及弟等、蓋七佛以來、皆以一偈見意、一偈之格、假俗子詩、以作耳、諸子勉之、又詩有補於吾宗、不翅吟詠矣、と云ひしが如き皆之が爲めなり。又曾て曰く、今時僧詩皆俗樣也、學高僧詩最好、

今僧例學士大夫之體、尤可笑也、官樣富貴金玉文章衣冠高名崇位等弊尤多、弊則必跡生、跡生則必改、復古高僧之風可也。是れ古來弊習の臺閣的氣習を降して江湖的たらしめんとせし第一先驅なり。此の如くにして彼は詩を崇び、其の徒を導くの手段とせり。謂へらく、方今時禪宗、度越餘宗之謂、只在作文與乘拂耳、此二絕則禪宗亦絕矣。故に著述の業は常に孳々之を廢せず。遂に病を醸すに至る。惠金上人、其の著述應訓思慮を費すの最患なるを説きて、暫く筆を絶たんことを勸む。彼謝して、抓著吾癢處、雖然但古今人之死多矣、不必皆以述作之患、惟以生死爲幻、以四大爲假、則病也不妨、健也不妨、思慮也不妨と。

彼の初めて鎌倉に入るや、福鹿の間に在りて大喜、默菴・石室・東陵・夢岩・中岩等諸老と所謂關東詩戰の中に追逐して、雄健豪放の筆を以て一方の雄陣を張り、頻りに文壇の鼓舞に盡せり。詩戰とは險韻を疊んで唱和するに在りて、彼曾て蟲字を以て四十律を作れり。時に夢窓門下の群秀は、絶海等を始め、多く出でて海外に遊べる際なりしかば、彼が清新の詩風は獨り叢林を靡せんとし、其の勢頗る盛なる者ありき。然るに其の徒の漸く外學に馳せ、末技に耽り坐禪を厭ひ、看經を怠るに至りては、却つて彼が興文の本旨に反る。是に於て彼は翻然反悟し、詞章を排して曰く、今之禪徒、例以瑣屑之詞爲能、是可陋也、楊子尙云、壯夫不爲也。又曰く、今時禪子作偈、變爲俗人秀才花鳥之詞、是最

可痛惜也、假令作詩、當學禪祖之體と。是より其の酷嗜せる老杜詩史の講義をも卻け、自今以去、誓不復目外道典籍、公其勿乞、と言ふに至れり。蓋し激する所あればなり。常に法を護し道を守るを以て自から任ずる彼にして、其の言の警醒に入る亦怪しむに足らず。駿臺雜話に徳川時代詩家の作を擧げて五山禪林の詩を取りしは、其の能く俗流を抜きて有益の語あるを以てなり。而して是れ義堂が執鞭の功を多とせずんばあるべからず。然れども所長に隨ふの所短は亦此處に排除し難く、強ひて佛理を通ぜんと試みし結果は五山の篇什をして遂に偈句理語を以て満たさしむるに至りぬ。山陽の謂つて瘦硬とせしもの正に是なり。則ち以て詩家の本色となすべからざるも、繙門の標語たらんには寧ろ庶幾しとせん歟。

斯かる傾向を導くに於て義堂の猶別に盡せしを貞和集の編著と爲す。是れ初めその二十三歳の時に成りし者にて、宋眞淨覺範以下群納の偈語を取りしのみにて、純詩として見るべきは一首だも之を收めず。詩集といはんよりは偈集と稱すべし。此の偈集は五山禪徒に枕中本として愛玩せられ、謄寫刊行、一時流通の盛を極めたり。後その死に瀕し疾を力めて之を校定せし際の自序は、以て此の書の始末を見、併せて其の當時の聲價をも了得しつべし。

五宗無語句、亦無法與人、此集從何而來哉、余貞和年間在龜山、爲童蒙求、選取宋元二代著宿五

七言絶句者、幾乎數千首、其棄燬于延久戊戌、近見妄庸傳寫別本、烏焉爲馬者十八九矣、余不忍視此、遂重編焉(日工集曰、俗士羸利者、妄寫且刊、其錯誤不可勝言、余恐它日與妄利者併案)、舊彙止於五七絶句、不及八句、學者恨之、余讀

傳燈德敷僧潤等、皆有詩焉、今代禪八句、莫妙於眞淨文、余故取眞淨以下尊宿五七言八句、補入作三千首、名曰重編貞和類聚、祖花聯芳集云云、

向陽林子の一人一首を輯するや、羅山よりの家法を更に嚴にし、禪林の詩は全く之を取らず。官家に至りては稗説小冊の中に及ぶも採拾之を洩さず。而して言ふ、淳茂文時不辱所生、傳至是綱在良、延及爲長在高、降逮秀長和長、各當其時有令望、秀長詩雖不傳、然義滿公遺大明書、使秀長作之、則猶非金銀誤金根、指蝦蟆爲良馬之類、秀長之後、武將以詩文屬禪徒、從茲以降、舉世皆謂文筆唯在叢林、而無間官家者、登時信義堂津絶海有拔群之才云云。昔秀長と義堂とは異時の人に非ざるのみならず、秀長は毎に義堂に就きて詩篇の正を受けし者なり。其の義堂が再び京に入るに寄するの詩に曰く、先禪昂氣自籠霄、甚喜來遊應我招、雅韻驚人歌白雪、霏談洗耳起清飈、關河曾隔幾千里、雲月今隣第五橋、何日得過方丈室、重聽新句憂琅瑤、と。義堂が禪林の内外に仰望せられしを知るべし。且つ永徳三年等持寺に於ける和漢聯句會の如き、之に列するもの官家には攝相萬里小路・日野兄弟・日輪成阿彌・菅秀長等あり。禪徒には性海・大清・相山・獨芳・月舟・雲溪・雲畊等あり。將軍管領等も之

に加はり皆義堂が麾下に在りき。蓋し此際絶海及びその徒古劔・觀中の輩は寧ろ時事に不平を抱き、諸州に流浪して多く五山の内に留まらざりしかば、月舟・大清等の外に文筆を能くする春屋、龍秋ありしも、猶ほ義堂をして獨壇を擅にせしめぬ。況んや絶海の如きも元と義堂が衣鉢の侍者たりしに外ならず。随つて絶海が門に入るものも大概一たびは義堂に學ぶ所なきはなかりき。義堂が當時に於ける位置勢力も亦知るべからずや。

今彼が詩に就きて約して之を言はば、其の立脚地は宋元に在りと言ふべく、再詮すれば宋に置かざるべからず。而も亦其の杜詩に熟し三體詩を講ずるより見るも、唐代を閉却せざるに於ては人に後る者に非ず。特に浩然・靈一を重んぜしを見る。されば彼の宗とせる所既に一ならずして、随つて其の作も亦一概に之を論ずべからざるものあり。其の雅麗なる純詩には多く中晩の音を存するを認むべく、其の理路に彌り議論に入る者に於ては、主として宋風を帯び、絶句の如き全く覺範が石門文字禪中に之を求むべし。要するに腕力の適健氣象の俊豪なる、其の最も見るべき所なりとす。試みに集中各體を通じて若干首を録しその一般を推すの便に供せんと欲す。

古體には、

洞水逝兮屹砥柱、大明晨兮奮天才、嗟今兮已矣、吾宗奈何、夕露零兮木蘭萎、秋風起兮江水波、

師兮師兮盍歸乎來、白雲幽石山之阿、祭不開和尚

の如き柳々州の賦に似たる者あり。近體にて幽遠雅淡なるものを擧ぐれば、

一別空山月照庭、相思三見菊花馨、天荒地老那堪嘆、雪苦霜辛亦飽經、東海暮雲空縹緲、北山秋樹正凋零、殷勤寄謝王孫草、換却春風幾度青、青字唱和

相國遊山野趣長、故招我輩共林塘、清齋不作陶潛醉、幽賞偏尋惠遠房、雲外桂香飄夜月、岸邊風葉落秋霜、晚來更愛扁舟興、吹斷參差送夕陽、

空林寂々想春林、歲晚憑誰寄此心、地暖遙知花信早、天寒不奈雪威侵、白雲千疊人何在、黃鳥一聲山更深、待我明年扶病起、青襪布鞋共幽尋、寄春林上人

喜聞足疾報平安、飛步如仙不可舉、萬里遠遊應入夢、一菴高臥豈容閑、玄沙踢倒飛猿嶺、韶石推開老米山、前輩典型今尙在、不妨行化出人間、

但覺相思增快々、幾回吟到夕陽紅、溪邊柳暗分携後、嶺山梅殘幽夢中、烏鵲樹寒驚夜月、鶉鴿原遠隔雪空、更深隱几仰天坐、四境沈々絕百蟲、蟲字唱和

道人來自海西頭、千仞匡廬半幅收、樓觀已隨兵火盡、山林猶見畫圖留、九江秀色清於水、五老蒼顏瘦似秋、指點遠公高隱處、白雲丹壑興悠々、題廬山圖

其の駿爽なるものには、

通玄峰頂絶人縁、面壁従它坐九年、滿目青山非外物、當門白水是良田、雙林樹色勻春雨、長樂鐘聲答夜泉、但爲此心無住着、一庵中有四禪天、題通玄菴

筆端文字燦文章、千里飛來字々香、壯志知君身未老、衰容愧我鬢先蒼、鶯花世界春三月、蠶垤人間夢幾場、記得同舟江上渡、篷窗雨濕暮鐘長、和韵寄觀中書記

疾病關門絶往來、何曾笑口向人開、擬埋白骨墳三尺、先卜青山土一堆、睡美不知連夜雨、耳聾那覺破山雷、仰慚新句問羈旅、家在超々天一涯、

の如きあり。其の口を衝いて出づるの語、流轉圓達、やがてこれ彼が得意の境。更に一步を進むれば議論偶語と爲る。今采らず。絶句一千首の多きに上る。誦すべきもの少からず。

夢入羅浮小洞天、幽人引步月嬋娟、曉來一覺知何處、雪後梅花淺水邊、夢梅
彷彿江南水竹村、落帆何處認柴門、夕陽斷岸楓林上、數點栖鴉醉墨痕、扇面山水
雲際娟々月一痕、小舟歸去正黃昏、想當不怕家難認、的々梅花水北村、題扇面
紛々世事亂如麻、舊恨新愁只自嗟、春夢醒來人不見、暮檐雨洒紫荊花、對花懷舊
暮景桑榆可奈何、磨回無復魯陽戈、寺樓鐘與漁村笛、一々催人白髮多、夕陽

擊開玉峽千尋水、收得驪龍一顆珠、袖裏携歸東海上、靈光映奪萬珊瑚、題友竹堂行卷
海上仙山卽九州、平生有意蹈鯨游、秋窓一夜雨欹枕、望看靈槎犯斗牛、送齋上人飯九州
行到磨針最上峰、一湖春水浸天容、擡眸稍覺王居近、五色雲浮煮氣濃、過磨針山
一夜春風自海涯、滿城桃李醉如霞、北山想見仍殘雪、中有高僧課法華、早春懷法華元章
輦下招提西又東、因君歸去思重々、孤雲海角三年夢、落月長安幾夜鐘、次韵送僧歸京
漢家諸將各論功、誰問半裘獨釣翁、剛被劉郎尋舊約、一絲吹斷暮江風、子陵釣台
若し其の偶句に至りては這老の面目更に活躍するを覺ゆ。
雨。後。來。尋。鷺。嶺。春。不。勞。拈。起。一。枝。新。飲。光。尊。者。呵。々。笑。人。看。花。兮。花。看。人。古。寺。看。花
靈。骨。珊。玉。尙。溫。欲。埋。无。地。故。煩。君。如。來。藏。裡。收。將。去。和。箇。摩。尼。葬。白。雲。贈。昌。季。有。序
空。華。的。々。元。無。像。貌。得。成。時。想。不。眞。放。下。筆。頭。須。著。眼。虛。空。背。上。現。同。身。自。贊

絶海が義堂と其の爲人を異にせること前既に一たび之を辯じぬ。彼は叢林の中に入りて坐禪に參すと雖も苟蔬の氣を帯びたる衲僧に非ざるなり。彼は幕府の下に在りて謀議に與ると雖も、術數に達したる政治家に非ざるなり。既に方内の豊裕なる者に非ず。而も亦方外の枯淡なる者に非ず。恰も五山

山頭朝暉夕嵐の間に乍ち來り乍ち去りて捕捉す可らざる一片の雲影の如き者なり。唯だ不離不即の間に於て漸くその真相を窺ひ得べきのみ。蓋し是れ其の象外の空靈に落々嬌々の逸氣を寓したる脱落超忽の一詩人たるに由らずんばならず。然り彼は由來天地の一詩人たるのみ。總角家を辭して海南を去り、孤錫雲を追うて函嶺を攀ぢ、更に身を翻して一個の奚囊飄然として吳越の山河に吟遊せり。而して西湖の烟霞四明の風月は、彼が自適に供し得て餘ありき。

彼の支那に渡れるは我が應安元年にして、彼に在りては恰も朱元璋が天下を一統して明と稱せる洪武元年なり。元の詩人揭傒斯、趙孟頫、虞集等は既に相次いで世を去りたるも、楊鐵屋、高青邱、宋景濂の如き諸大家の元來より明初に互りて更に大に文運を開きたる際なり。而して方外に於ても元末の遺僧にして詩を以て鳴れる全室、楚石の如きあり。其他、夢觀の如き竹庵の如き作家は、天界及び徑山・育王・天童・靈隱・淨慈五山の間に出沒して一時の盛觀を呈したりき。絶海は則ち此等諸家の間に周旋し、遂に天界に全室に依りて求法講學の傍ら詩文を作爲して頗る全室が體裁を得たりと稱せらる。全室はもと是れ元詩僧の白眉蒲室の門より出で、亦た等類に傑絶せるもの、特り其の詞章を以てのみに非ず。學殖人品共に傳ふ可きあり。太祖皇帝曾て天界に幸して彼を見、其の爲人を推崇し、命じて髭髮を蓄へ授くるに官を以てせんと欲せしも固辭して就かず。太祖彌之を重んじ、乃ち親しく免官の説

を作れり。

世人災害有三、往々皆自知、故其災害周流方寸間、日夜無息、今古未嘗有能盡去者、所以釋迦成道教化衆生指迷破昏、乃云災害之三者、曰貪嗔痴、斯三者、孰能不備、孰備而不殃、所以古今不備者聖人是也、雖備而不殃者賢人是也、洪武九年春暇遊天界、見住持僧宗泐、博通今古儒術深明詢問僧之苦行本面家風果何幽靜、傍曰、是僧動止異常、因識儒書大知禮義、又非林泉之士、於是朕命育鬚髮以官之、當時本僧姑且奉命而不辭、待至髮長數寸、將召而官之、其僧再辭而求免願終世於釋門、吁難哉世人之於世誰不欲富貴妻子名彰於世者歟、今是僧却富貴弗美妻妾、可謂三害之中善却一者歟、人將謂是僧生性淡薄有是歟、抑玄悟之有知而若是歟、不然其僧生性淡薄玄悟不可以言貌而見、蓋丈夫之氣、初志不奪、斯僧是其人也、特聽而免官、放老山林、其世之三害、僧不爲一害所迷、妙哉、

亦以て彼が超脫塵表の資を知るべし。時に宋景濂佛を好むを以て帝目して宋和尚となし、全室儒に通ずるを以て帝呼んで泐秀才と爲せり。彼れ後鳳陽の槎峯に隱るゝや帝書を降して曰く、寂寞觀明月、逍遙對白雲、汝其往哉、と。後僧智聰の胡惟庸が反に坐し、詞全室に連なり、謂へらく、全室の曾て西域に經を永めたるは、惟庸之をして土蕃に説きて兵を擧げ外應せしめんが爲めたりしなりと。時に

事に坐し刑に服する者六十四人、而も全室獨り詔して死を宥せらるゝを得たり。初め全室の召されて

京都に行き天界に歸るや絶海之を紀して曰く、
一代文章同器之、道尊還喜至尊知、九重天上須三詔、千百年中際一時、楓陛祥風生玉塵、金欄曉

日映丹墀、從茲寶掌巖前路、松桂漫山雨露滋、
全室既に天界を出でて徑山に退き、更に京に入る事あるや、絶海之を聞き詩又成る。

全室既に天界を出でて徑山に退き、更に京に入る事あるや、絶海之を聞き詩又成る。
金縷伽梨白雪頭、詔書催入帝王州、老安德望高今古、婁約玄音動冕旒、天下車書混同日、叢林禮

樂中興秋、遠傳盛事空回首、汎々江湖不擊舟、
全室に向つて此の如きの推服は如何に彼を感化したる者ありしやを知るべきなり。全室曾て絶海に間

ふに圓覺經中那の文章を以て警策と爲すやを以てす。絶海便ち文珠章中の知是空華即無輪轉、亦无身
心、受彼生死、非作故無、本性无故、彼知覺者、猶如虛空、知虛空者、即空華相、亦不可說、无知覺
性の語を誦して之に答ふ。全室之を然りとせり。其の師承相傳へし者翅に詞章の末藝に止まらざりし
なり。

彼れ三竺の中四明の間に住まること數年、追うて渡海し到るもの忠恕、伯英等あり。彼は則ち忠恕
と相伴うて吳楚の勝地に放浪し、或は孤篷に投じて七里灘を下り、或は詩を題して北固の山外に多景

樓に登り、遂に金陵に至りて龍盤虎踞の古都を見る。斯く他郷は好しと雖も猶ほ歸るに如かざるは詩
人の常情。忠恕が望海水思故園の詩、風濤望不極、飯路遯難究、但看扶桑日、朝日出海東。湛然靜者

惠鑑が絶海が爲めに畫して題せる、思郷求畫海、白晝看雲眠、五字照秋水、三衣護夜禪、壁空唯掛錫、
榻破獨存氈、千歲巖頭桂、旁枝向日邊の如きを見れば彼等が歸思勃興を知る可し。況んや忠恕は病に

臥して絶海と共に東する能はず、離索の感は發して送絶海津藏主歸日本の送君歸故國、臥病楚山幽、
只可相隨去、如何獨自留、天遙孤雁遠、海闊百川收、離思與春恨、人生欲白頭。又た奉寄絶海和尚の

倦遊海上髮幡々、舊業池臺奈汝何、夢裡故人千里近、愁中啼鳥一聲多、龜山帶曉花如霧、鴨水涵春柳
似波、有約莫忘須有待、樵風吹雨送漁歌の諸作となりぬ。

初め絶海の行を起すや、一詩を眞寂の竹庵に寄せて曰く、
不堪長仰止、洛上寄高踪、流水寒山路、深雲古寺鐘、香花嚴法會、氷雪老禪容、重獲滯眞藥、多

生慶此生、
豫章の懷渭、蒲庵各之に和す。懷渭が詩、

三韓辭海國、五竺訪靈踪、洗盥龍河水、燒香鷲嶺鐘、安居全道力、段食長齋容、特枉留詩別、何
時定再逢、

蒲庵が作、

東遊吳越寺、雲水寄行蹤、晴曬花間納、寒吟月下鐘、鴻飛誇健翮、鶴瘦識清容、別去滄洲隔、搏

桑幾日逢、

延陵の夷簡も亦和あり、

問道金陵去、因求勝地踪、光飛舍利塔、聲動景陽鐘、燕壘懷王樹、鷹巢謁鏡容、龍河禪席盛、聖

代喜遭逢、

絶海又た惠鑑の書を謝し五律三首を贈る。

掩關千嶂裏、雲鳥共依々、終日看山處、清風滿竹扉、松花供午盞、栗色染畦衣、應世今無夢、何

因下翠微、

遠客獨何幸、先宗此討論、愛雲眠石上、看竹到泉源、真理融玄境、微言滋道根、不愁山路遠、月

出聽清猿、

披圖一悵然、風物舊林泉、佛寺雲端出、僊家嵐際連、青山晴散靄、白石淨無煙、千古詩中畫、朝

川休獨專、

此の如く彼は雲水に行蹤を寄せて飄颻として漸く南京に達するや、時は洪武九年の春にして、全室

が太祖帝の知遇を得たる際、絶海が一時の聲名は忽ち風聞に達し、太祖之を英武樓に召見し、板房に至り日本の圖を指し、顧みて徐福が遺跡熊野の古祠を問ふ。仙島は既に雲海の間に隱約し、冷然たる天風は浩として彼が雙袂を吹いて來る。

熊野峰前除福祠、滿山藥草雨餘肥、只今海上波濤穩、萬里好風須早歸、
四句忽然として成るや太祖直に筆を援きて之に和す。

熊野峰高血食祠、松根琥珀也應肥、當年徐福求僊藥、直到如今更不歸、

是に至り彼が無邪氣天真の詩人たる愈々見つ可く、彼が前には榮達もなく理窟もなく裝飾も無きなり。唯に東に向へる遙々の一歸心あるのみ。則ち僧伽梨、鉢多羅茶褐褙、榔栗杖并に寶鈔若干を賜はり、更に飄然として海に浮びぬ。船中の同伴は初航にも共にせし佐汝霖なり。霖も海と同じく太祖に謁し作詩を命ぜられしも、心、海を制せんと欲し苦思の間に海に先んぜられたるを憾み、太祖が宸筆を海より奪ひて海中に擲け棄てたりと傳ふ。一笑話に過ぎずと雖も、亦以て其の間人天の分を別つあるを見るに足る。師蠻の汝霖を難じて、汝霖與絶海謁明太祖、賦熊野徐福事、而絶海四句立成焉、汝霖欲作律詩、經意の間、不覺覆茶杯、夫文章之緒餘、非禪人之所務也、霖何吟佔筆偏至于茲耶、と言ひしもの中れり。然るに後赤松氏の寶幢寺を洛西に建て絶海が住持たらんことを請ふや、彼れ之を汝霖に譲り、

法社の作興善類の登庸と賀して爲めに疏を作りぬ。世俗恩讎の事は竟に彼に於て見らるべからざるなり。

耽源之承南陽、克類乃德、慈明之接積翠、益昌厥家、惟父子並化於當時、而授受足徵於前史、某方外司馬、僧中此郎、雙峨一代文章、造詣非謬、六朝萬古風物、收拾無遺、赴楓陛而賦三山詩、瀉茶盃以對萬乘主、尙方給履、中使賜衣、一舸東歸、飄然碧海之渡、尺書西聘樂哉赤松之遊、矧茲瑤幢名藍新闢疊雄勝槩、黃金側地、湧出玉殿瓊樓、靈龜鎮山、左右青龍白虎、盟如葵丘之會、願卜王翰之鄰、

蓋し彼は世態人情を外にし、榮辱窮達を知らず。人をも忘れ自からも忘る。故に權貴の門を過ぐと雖も阿儉媚を呈するを能くせず。法社の中に在りと雖も、檢束規に拘するに懶く、眞骨峭簡にして冲襟孤冷なり。唯意の適くに信ず。故に霞表に縱恣飄逸なりと雖も、世路に蹉蹶遭逢せざるを得ず。即ち直言義滿が意に忤うて却けらるゝを免れざる也。乃ち却けらるゝと雖も、長揖し去つて顧みるを知らざる也。既に錢原に隠るゝや吟じて曰く、

世事從來多變態、當初早悟有如今、青山高臥茅簷下、不許白雲知此心、

其の自悟せりとなすは世事に變態あるを知れりしのみ。變態に身を處する所以は知らざりし也。若し

知れりしと雖も之を爲すことは竟に能くせざりし也。臥雲瑞溪が日件錄此間の消息を傳へて云ふ、

自大原野登十八町有西岩藏、蓋教寺有五十坊、就中峰坊冠于諸坊、當院先師(絶)會寓於峰坊、坊主爲師構禪坐室、南邊有床、師名臥雲、又教僧受師衣孟者多矣、某俗祖亦爾、師名以道清、今年百五六而終、予曰始聞此事、予亦以臥雲名室、不意已爲先師被用去、按永德初、先師自景德遷鹿苑院、歷兩年、又居本寺、開山塔同宿有達鹿苑相公命者、師無令畏避之心、由是與相公不相合、去遷多寶院、又寓西山不藏院、從此寓攝州花并寺、又遷和州立野云云。

其の蹉跎踳躓の狀以て見るべき也。此際彼は書を法友椿庭に復して謂ふ。

某進不避危機、退亦失於高尚之節、冥頑無識、玷汗宗門、是以遁逃已還一周歲月、六移茅舍、雖然時々逢山水幽勝之處、披衣散策、而陶冶於狷鳥雲樹之趣、悠然如遊乎物化之元、人生未盡、只得爲太平之逸民、其亦足矣、勿煩念云云。

其の時々山水幽勝之處に逢へば衣を披き策を散じて狷鳥雲樹の趣に陶冶し、悠然として物化の元に遊ぶが如しと云ふ者は、眞に是れ彼が自から知れる所なり。又椿庭に與ふる書中に、

旬日前嘗訪府中老居士、時有金座頭、袖出教帖、便折封對老居士、琅々一讀、此老素欽道風、慨然增恨值遇之晚耳、城金天資妙於演史、招來林下、涼月清宵、聽歌數闋、清雅之音、令人一洗耳

根云。

彼が清懷俗者と相混じ難きも亦宜ならずや。且つ彼れ再び義滿に強ひられて到り、義滿の人をして彼が相貌を畫かしめたるに自賛して曰へるに見ずや、

征夷大將軍從一品大相公、繪予陋質、以徵著語、謹應鈞命、露醜拙爾、

鈍勝狀元、戲場參軍、崇飾街談巷說、排斥魯誥竺墳、機境在前、見如不見、毀謗隨後、聞如不聞、大明立極主本朝賢相君、容得箇樣閑淡、畢竟直甚分文啖、萬年山頂演宗旨、玉帳清香四海薰、

他を措きて自から嘲けり、而も諷刺の意滿面に露る。傲骨依然磨せども磷せざるなり。

絶海の京に入り再び義滿を見るに至りしは、内には義堂外には細川頼之の勸むるありて也。頼之が高操は世人の知る所、其の義滿が驕奢を諫めたるが爲め儕輩に譖せられ遂に忌を蒙るや、權職を弊履の如くに擲ち、滿室蒼蠅掃難盡、起尋禪榻臥清風と高吟し、一帙の杜詩集を携へ悠然として海南に勇退しぬ。乃ち禮を厚くして絶海を邀へ新に阿州に寶冠寺を開きたり。義滿漸く悔悟するあり、義堂をして專使周東を遣して之を徵さしめしも絶海固辭して往かず。義滿遂に親書を製して頼之に寄せ、命じて絶海を致さしめずば已まざらんと欲す。頼之は憂國の士なり。且つ尙ほ四州の管領として在り。徒らに義滿をして事を起さしむるを好まず。乃ち絶海に切請して之を聽かしむ。彼已むを得ずして適

ち起つ。頼之も亦後召還され再び美治を布くに至りぬ。二人の如きは洵に室町時代に於いて文武兩途に於ける清輝ある雙璧と稱するも不可なからんか。絶海が頼之(道鏡)の像讚は知己相互の情を推するに足るべし。

德容春温、從之遊者、未嘗覺其機密、正色冬凜、望之畏者、未嘗覩其室虛、動而恒靜、親而若疏、樹旗幟以臨邊、威震夷狄、坐廟堂以論道、信及豚魚、遂能擁幼主於危疑之際、全神器於分崩之餘、彼方烏合而蠅聚、吾乃霆掃而風除、人徒見成績於今日、而不知予手拮据、迄乎大緣夙契投機雲居、弄西河獅子躍濟北瞎驢、殺活自在、縱橫卷舒、宿師老衲、有所不知、然則致君與利民、豈非道真之士直也耶、

爾後義滿の彼を崇尊すること甚だしく、明徳二年山名氏清の反せる時の如き、彼が法衣を乞ひて身に着け戦に臨みて勝を獲るや、之を擧げ、人に語つて敵を亡ぼせしは此衣の靈驗なりとなすに至り、遂に引きて鹿苑院に入らしめ、その顧問たらしめぬ。初め絶海の明に渡るや、實は求法研學の爲めに過ぎざりしと雖も、其の表面上に於ては將軍の使命を帯びて久しく廢したりし遣唐使の後を襲がんと試みし者にして、其の目的とする所は彼我の交通を開始せんとするに在りき。即ち既に外交政治的の意義を含有したりき。而も絶海の親しく政事に干與するは其の幕府に顧問たるより始まりしなり。而して

其の政事家の資質に乏しき彼にして此に至りしは亦その達方の致す所たるなり。且つ彼は義堂の曾て東山今代罵天翁、口不停談疾似風と評せしが如く、極めて辯舌に長じたりき。故に大内義弘の反せんとするに及びては相國寺の建設者としても（絶海之を建つるに掌理し義弘は此に力役を賦せられたるを拒みて反心を起せり）之を説明するの任を辭し難し。彼れ乃ち緇衣を振つて之を堺城に訪ひ、滔々として論難抗辯す。事は應永記に詳かなり。亦彼が意氣の欢快なるを見る可し。今少しく抄出すれば、

大内は上意及再三如何御返事可申乎と内談する處に、新介申けるは云々。今度は上意殊に有子細と覺て僧中の尊宿以絶海和尚被仰下、如何翻先非云々。杉豊後入道進出て申けるは云々。天下の大事を思食立上へ、以一往之御宥輒可隨仰之條可有如何と申せば、運の究めに此儀可然とて、絶海に對面す。絶海宜ひけるは、先たて被仰所に、聊被殘心緒之由被聞食之間重て上意の趣を令申とて、愚僧下向す。所詮世間の浮言を以て上意を奉計事不可然。千萬雖有廣説、急き遂上洛懸御目、此間の意趣を被申開、又上意をも可被承分。百聞不如一見とこそ申候へ、以一朝之念上方の御意を被掠申事、似無遠慮云云。絶海又度々忠節之事天下無隱、去れば重賞勝于世者也。但小貳退治の事は深く違御意て被加退治上は、何ぞ彼を最負せられん一事兩様の御沙汰可有乎。只宗間が謀として云云。於京都可被討と云事は内外無其沙汰。若し左様の趣有之は、縱雖爲上意、爲僧家

身、等か可致失人籌策、條々御恨雖似有共謂、其忠却可爲不忠、范蠡仕越王云云。功成名遂身退天之道也とて越を去る。是をこそ賢臣とは申せ。其の祿を乍持奉輕上事可違天命、神明佛陀も不可有御加護、能々可慎乎云々。

李白が仙才にして而も猶ほ一種の霸氣を帯びたるが如く、彼も亦稍然りし者あり、光祿相公に與ふる書に、某丘壑楚情、無求於世、未嘗赴謁達官貴遊之門、と云ひ、又嬾雲の説に此意を洩して、雲本無心而謂之嬾者何也、蓋古之君子抱經世之才而其跡或與雲舒卷、未施澤物之功也、則人謂之嬾固可也、是則以雲表嬾、而非以嬾表雲耳、倘其結而爲瑞氣注而作甘露、則吾恐嬾之不能嬾矣、と述べ、大相國の威にも畏避せず、更に大内氏と樽俎の間に折衝を試みんとするに至る。蓋し氣先づ人を呑むの概あれば也。其山を望んで高唱して稜層高出白雲間、萬仞屏顔天斧削、安得方外神仙侶、秋風一策試躡攀と曰へりしもの然らずや。

彼が幕議に參するに至りしは稍其の志を得たるの時なり。是に於て彼は得意の筆翰を拈して外國の國書贈答の事に與りぬ。抑も當時國書の式に就いては今日に至るまで世上議論の存する所にして、彼の義滿が臣と稱して明帝に拜服したりしとて、爲めに當時文權を握れる五山僧徒を以て無學無識の群盲と做す者あるに至る。何ぞ冤なるの太だしき。試みに瑞溪が善隣國寶記を披見しなば彼書は僧堅中が

一時の權宜に出でしものに過ぎざるを知らん。且や當時東西混亂の世、明帝にして猶ほ列祖の遺法を破り縦に義滿の爲めに阿蘇山を封じて壽安鎮國山と爲せるが如き際に於ては、百事の次序茲に錯亂し、其間に向つて強ちに國體論などを擔ぎ出すの却つて迂なるものあるを見ずんばあらず。然か云ふと雖も五山の徒此に意を用ゐざりしには非ず。惟肖の秋水長夫、極目雖迷上下、春風和氣同仁、豈阻東西と曰へるは海上渺茫の境を狀し、暗に兩國上下定む可からざるの意を寓す。又た瑞溪の白日西照の語を混へて國光を示せるが如き以て見る可し。但和親の交を害せざらんが爲めに極めて婉曲の筆路に依りしは則ち之れあるのみ。今要なきの辨妄たるに似たれど書式を創めし者の絶海たるが故に一言を挿入し置くなり。絶海が撰一通を取りて左に載せ具眼者の鑑識に供す。是れ明德二年朝鮮に答へしものとす。

日本國相國承天禪寺住持沙門某端肅奉復高麗國門下府諸相國閣下、仲冬初貴國僧覺鐘來將諸相國命、達書于我征夷大將軍府、諭以海寇未息、兩國生釁、此事如來言、海隅民敗壞教化、實我君臣之所恥也、今將申命鎮西守臣、禁遏賊船、放還浮虜、必當備兩國之隣好、永結二天之歡心、實所願也、然而我國將臣自古無疆外通問之事、以是不克直答來教、仍命釋氏某代書致敬、非漫禮也、今遣臣曾壽允、細陳情實、乞食察焉、不宣、明德三年壬申十二月廿七、

彼が人品彼が出處略ぼ此の如し。今更に予をして少しく深く彼が意境を觀ひ得しめよ。

彼が族津野氏が幾多奇抜の士を續出し、州中の名族吉良氏と共に他日勃興せし南學の淵源を爲すに至りしもの洵に其の故なくんばあらず。特に絶海が天賦の英發なる、夙に族中の麒麟兒を以て目せられたりき。其の八歳にして郷曲の圓通寺に入るや、其の祖先が淨財を施して之を創建せしに感激し、自から荷法の器たらずんば已まずと誓言して既に俚耳を驚かしぬ。その十三歳に至るや烏頭にして早く天龍の籍に列し、夢窓老禪の西芳精舍に退居せるに侍せり。一夜適月明の下彼れ聲を勵まして唔呶す。老禪定より起ち燈下に呼び來りて之を試む。彼れ卷を掩うて背誦琅々、壑水の奔注するが如し。老禪嘆じて曰く、此兒他日必ず禦侮の器たらん者、宜しく叢林文字の場に在らしむべし、徒に茲に使役すべけんやと。彼れ言下に喝破して曰く、見性豈文字に在らんや、左右に執侍すれば素願足れりと。嗚呼彼れ既に禪の文字に在らざるを知れるか。故に又言はずや我嘗て首楞嚴を閱して失咲の分ありと。彼は禪に承けて禪に傳へんと欲する者か。然も禪既に文字に無し、何が爲めにか文字に言はんとする。曰く、靈龜山中錯傳鎖口之訣、護龍河上謾賦落韵之詩、舉措一味盆結不些子威儀、倒拈一枝無孔笛、順風吹了逆風吹。又曰く、爾也勤、我也怠、師資道果何在、我是眞絶海無是絶海、若有是者則二絶海、點綴空中墨彩、寫出雪裏芭蕉、仁義道中禮拜燒香也不消、(記請)と。而して彼自ら蕉堅と號し

維摩經に曰く、文珠師問維摩詰言、菩薩云、何觀於衆生、維摩詰言、譬如幻師見所幻人、如智者見水中月、如熱時燄、如呼聲響、如空中霧如水聚沫、如水上泡、如芭蕉堅、如電久住云々。蕉堅の二字蓋し此に原づく。彼が意亦知り難しとせず。其の自から所謂る吟老禪林風月、眼空佛國乾坤、なる者、以て彼が自家自評の言として見るを妨げざる也。要するに彼は遂に文字を以て第一義を掲げ成しぬ。若し能く脱落の見地に據りて彼を稱して詩人とすれば則ち詩人たり。何ぞ獨り其の禪納たるに局せん。明淨慈の道聯が彼が四會の語録に序して、

其吐詞也義路全超、玄門頓廓、其應機也電掣雷鉤、聞者不及掩耳、睹者不及瞬目、綽有抽釘拔楔、解粘去縛之作、其不能穿過臨濟德山雲門趙州鼻孔能如是乎、是知無準以前破砂盆、金聲玉振於此士、無準以後驚天動地於彼方面能東拋西擲和聲械碎者其在吾絕海矣、

と稱せしもの、猶ほ絶海が半面を露はすに過ぎずと雖も、其の意境の遠を發するに於ては餘蘊なしと言ふべし。たゞ予は更に彼が法語に至るも如何に其の詩的たるやを見ざるを得ざるなり。

當晚小參垂語云、德山小參不要言語、盡法無民、趙州小參要答話、倚勢欺人、若是真獅子子不妨、出衆頓呻、問答罷過云、道無向背、理絕言詮、週出三乘、高超十地、一機一境、不拘方隅、一色一香、解知見縛、有時孤峰頂上坐斷關市紅塵、有時十字街頭眼掛斷崖碧嶂、塵々解脱、法々圓融、

是故昨日北山山下一向放倒、松窓雲白竹篔水清、今宵萬年峰前十分觀光、金殿燭明玉樓鐘動、地靈人傑士映泉香、人人握滄海珠、歩々踏雪山草、初無靜關之想、初無去來之心、幕拈主丈云、傍有主丈子出來云、休々纔恁麼便不恁麼、以言遣言何時得了、以心用心、豈不大錯、且道主丈子有甚技術、便恁麼道、卓一下云、龍得水時添意氣、虎逢山色長威聲、

絶海が人物、その詩人としての資質は略ぼ之を觀じ了れり。是より初めて其の詩壇に於ける位置技術を檢視するを得んか。

日本に漢詩なし。日本の漢詩なる者は日本の所謂漢詩にして、支那の所謂漢詩にあらざるなり。蓋し漢詩は支那に出づ。苟くも支那の音聲韻律に諧調せざる者は形貌の肖似を以て直に視て以て純粹の漢詩と稱するを得ず。而して彼此語脈の自然的の相違ある、日本の所謂漢詩なる者が、竟に支那語の聲調韻律に協ふ能はざるは固より其の處たり。故に日本に漢詩なしと云ふ者は誣言には非ず。否寧ろ千古萬古之れ有るべからざるは理の當に然るべき所となす。然るに今獨り之あり。奇なる哉絶海。江海の日本詩史を編するや上は懷風藻、凌雲集より下は蛻岩、徂徠、南郭に論及し、而して曰く、絶海が詩は但に古昔中世に敵手なきのみに非ず。近時の諸名家と雖も恐くは甲を棄てて宵遁れむ。何となれば古昔朝紳の詠言、佳句警聯なきに非ざるも、疵病雜陳し、全篇佳なる者は甚だ稀也、偶々佳作ある

も亦唯に我邦の詩のみ。之を華人の詩に較ぶれば殊に逕庭を隔つ。近時の諸名家と雖も余を以て之を觀れば亦唯に我邦の詩のみ。往々にして俗習を免れ難し。絶海の如きは然らざる也と。北海が言にして謬らば、日本上下二千年間眞の漢詩あるは獨り我が一絶海のみ。明、富春の天竺寺の如蘭亦彼が詩を品定して謂へらく、

絶海遊於中州也、觀山川之壯麗、人物之繁盛、登高俯深、感今懷古、一寓於詩、雖吾中州之士老於文學者不是過也、且無日東語言氣習、誠爲海東之魁想無出其右者

と。其の支那音律の諧調を得たること以て知るべし。近時予彼が詩を以て某清人に示す。其一唱して三歎しぬ。如此は皆以て彼が詩の日本の所謂漢詩に非ずして眞の漢詩たるを證するに足らん。然るに或は人ありて曰ふ、絶海が詩は東瀛詩選の中に見えざる所に非ずやと。是れ東瀛詩選なる者を崇尊する者の謬なり。抑も俞氏の此選あるや、四千五百餘篇の原本に憑據して四十四卷を撰成すと稱し、大友皇子より初めて跡見花蔭女史に迄及ぼし、東國之詩亦略備於此矣と高言せしが如く博は則ち稍や博を致したり。然れども其の材料の供給疎にして佳ならざりしが爲め、竟に杜撰の誦を免れざる也。絶海の蕉堅彙の如き、久しく世上に亡び、近時に至りて予天龍寺の壁中に其の腐蝕せる板木を發し、纒かに之を副行し得たるに過ぎず。其の俞氏が選中に無きも亦宜なり。以つて絶海が傑出の作家たるに累

を爲すに足る者たらざるを知るべきのみ。

絶海が雄才は竟に日本群作家と比較の外に在り。其の詩壇も亦た日本に在らずして正しく支那に在り。然れば則ち其の支那詩壇に於ける位置は何如。天界寺の碩納道衍が蕉堅稿に序せるの言祖之を盡せり。曰く、

吾浮圖氏之於詩、尙之者猶衆、晋之湯休、唐之靈徹、皎然道標齊已、宋之惠懃、道潛、皆尙之而善鳴者也。云云。日本絶海禪師之於詩、亦善鳴者也、禪詩得詩之體裁、清婉峭雅、出於性情之正、雖晋唐休徹之輩、亦弗能過之也云云。

彼が才力聲調は全然響を唐に振ふ者たり。特に中晩の交を以て論ずるを當れりとす。蓋し絶海は最も雄麗雋雅の律詩に精を得たり。而して唐の律詩は中晩を以て最も齊備の境にありと云はざるべからず。彼が詩の重きを爲す故なきに非ざる也。山陽が論詩絶句の中に、衣中廿八顆明珠、風雅終然墮筍蔬、出類故當推絶海、指揮如意掣鯨魚と評して、單に絶海が廿八字詩に就いて立論せしが如きは、未だ悉せる者とすべからず。彼が詩品は大概如此處に在りと雖も、之を細見せんと欲すれば、暫く先づ彼に牽聯せる元末明初詩風の大勢を概観するの要あるべし。

抑も元道山が剛健沈鬱の風調を遺して去りしよりは、元の作家として數ふべきもの薩・揭・楊・范・

趙・虞等あり。皆能く一家を爲して各其時に鳴り、特に趙孟頫、虞集の如きは間々雄瞻奇逸の見る可きありしも、概して之を論ずれば竟に纖弱の風習を免れざりき。然るに元末より明初に亘る頃に至りては氣運頓に一變し、楊鐵崖の瑰奇雄麗なる、更に高青邱の飄逸渾厚なる、元の盛時よりは却つて神駿奇拔の趣を添へ來りしのみならず、已に宋代沈隱の氣を遠絶し、猶ほ萬曆腐靡の弊を微生せず。開國の時運と共に詩壇の天地も益々爽朗雄渾の觀を加へぬ。而して其の方外に於ける詩運の消長も亦頗る張目するに足る者あり。彼の石門の文字禪を傳へし宋の覺範が後を承け、趙孟頫等も心を委して交を納めしと稱せらるゝ天隱晦機は已に前に鳴りて逝き、晦機を承けて蒲室を出て、茲に元代の面目を一變し、雄傑の才力を以て激厲の辭を驅る。獨り方外に於ける耳ならず、元一代に於ても優に一方に雄視するを得たりき。而して彼等は皆東南四明三竺の間に鳴れる者にして、當時南方より出でし明の諸文豪、東海に往來せし我五山の徒に影響せし者尠なからざりしを知るべし。全室は更に蒲室の風格體裁を傳へて鐵崖青邱の間に鳴れり。全室が人品及び絶海に於ける關係の如きは既に前述しぬ。全室と青邱との交友は甚だ淺からず、且つ青邱と絶海との間に一の注意すべき關係あり。青邱絶海兩者が年譜を按ずるに、絶海の天界に抵りて全室に依りしは明洪武元年よりの事にして、時に青邱は薦を以て元史を修し、宋濂王錡等の諸學士と同じく天界に寓したり。青邱が寓天界寺、登天界寺鐘樓、夜坐天

界、天界玩月等の詩は其時の作なり。特に泐禪師室中晚坐の一首あるに至りては、其の全室との深親證し得て餘あり。(全室名宗說)。絶海時に歳三十三、正に青邱と同齡にして頗る全室が器重を受け、直ちに命じて燒香侍者と作され、次いで藏主に轉ぜり。東西傑絶の兩雄纔かに一條の香烟を隔てて相逢ふ。其の間消息の幽眇たる唯後人の揣摩に一任するのみ。語るべからず傳ふべからざる也。但だ予は認む、絶海が詩の風格が全室より傳はりしに拘らず、寧ろ頗る青邱に酷似する所あるを。例せば青邱の次韵靈隱復見心長老見寄、兼簡泐禪師の一首、高堂鐘鼓毒龍驚、曾布袈裟海上城、應嶽禪師傳法印、道園學士許詩名、幾趨北闕瞻天近、獨坐南屏對月明、書到喜聞雙徑老、兩華新散滿瑤京は、何ぞ前出せし絶海が同時の作全室の還山に寄せし詩と構句造語の末まで相近きものあるや。要するに全室青邱と絶海は、元明の關頭に在りて説詩家の最も意を留むべき者となす。而して若し更に精細に之を討ぬれば全室の他に二人に異なる所は、矯逸の氣乏しきにあらんか。除文章謂ふ、季潭(金室字季潭)學博才瓊、詩不淪枯寂、在江湖則其言蕭散悠遠、適行住坐臥之情、在山林則其言幽復簡澹、得風泉雲月之趣、在殊方異域、則其言慨而不激、直而不肆、其詩衆體具矣、と。此言以て或は全室の面目を蔽ふべし。されど未だ以て彼が逸足絶海及び青邱を品し盡さず。朱伯賢請ふ、泐公識地高邁、調趣清古、風度悠揚、昂然若霜晨老鶴聲聞九阜、澹乎若清廟朱絃曲終三款と。如此處を見來れば絶海の全室に於ける、全室の蒲室に

於ける、師承の相傳は縣として斷つべからざる者あるを認めずんばならず。今姑く青邱を措き、他三者が相傳の迹に就きて聊か檢尋する所あらんとす。

蒲室集を一閱して先づ驚くはその四六文の多きに比して詩律の寡きに在り。その寡少なる詩律中に就いて、謝楊執中五律の頷聯、扣舷山月近、欬枕夜濤深、の如きは、全室が集中の偶作七律の頷聯、好花都向雨中盡、幽鳥忽來林外鳴、絶海が送良上人歸雲間五律の頸聯、青山回首處、白鳥去帆前、の如き類と其の詩境を捉ふるに於て妙を同じうすと云ふべし。三者が神を相傳へし者實に斯の如き中に在り。若し體格を以て之を見れば、蒲室集中の黃河沮風の作、

九城重尋禹蹟荒、喜聽縣水夜浪々、中原迤邐河流壯、元氣汪洋地脉長、萬里風雲來黯澹、五更星斗下光芒、我行不有神靈助、天送天香自帝傍、

全室の錢塘懷古の作、

欲識錢塘王氣徂、紫宸宮殿入青蕪、朔方鐵騎飛天塹、師相樓船宿裏湖、白鴈不知南國破、青山還傍海門孤、百年又見城地改、多少英雄屈霸圖、

絶海の比に次韻したる、

天目山崩炎運徂、東南王氣委平蕪、鼓鼙聲震三州地、歌舞香消十里湖、古殿重尋芳草合、諸陵何

在斷雲孤、百年江左風流盡、小海空環舊版圖、

興亡一夢歲云徂、葵麥春風久就蕪、父老何心悲往事、英雄有恨滿平湖、朱崖未洗三軍血、瀛國空歸六尺孤、天地百年同戲劇、燕人又獻督亢圖、

の如き、意趣氣味の稍や相異にせるあるも、共に是れ雄渾蒼茫の氣相通ずる者と云ふ可く、而して語に分寸ある絶海の却つて兩室を凌ぐ者あるは何ぞや。然れども全室は寧ろ五言に長ずる者に似たり。

其の送王叔潤の、

平涼來又去、官滿復之官、寒晚黃雲合、邊秋白草寒、有儲諸將喜、無訟遠人安、萬里關山月、吟詩獨自看、

は絶海が出塞圖の、

馳馬腰弓箭、軍行無少留、祇須身許國、不敢計封侯、寒雨黃沙暮、西風白草秋、何人畫圖裏、一々寫邊愁、

を脱胎せしめし者と知るべし。兩々對比し來れば如此の類鮮しとせず。否猶ほ甚しきものあり。然れども全室集中未だ絶海が東營秋月の二首、

秋夜關山月、高懸細柳營、中軍嚴下令、萬馬肅無聲、寒影旌旗濕、斜光睥睨明、何人橫槊賦、愁

殺老書生、

南。國。秋。新。霽、東。營。月。正。中、光。寒。凝。列。戟、弦。上。學。彎。弓、連。海。風。雲。慘、振。山。金。鼓。雄、安。能。永。良。夜、一。照。萬。方。同、

の如き、旗鼓堂々老杜の壘を摩する者を得難きを奈何せん。且蒲室が最も深沈の氣に富めるに異りて、絶海は多く高逸の致に優なり。是れ予の謂つて寧ろ青邱に近き者ありとなす所以なり。錢塘懐古の如きにても略之を認むるを得べし。但其の清雋の趣に於ては兩家共に具はりて、而も絶海の風韻更に麗然殊絶なるを覺ゆ。蓋し絶海は元詩の弊習に陥らずして、能くその純然たる唐音を保持するを得たればなり。試みに左の二詩に就いて觀よ。

微。茫。翠。浪。瀉。青。瑤、木。末。斜。分。鳥。道。遙、雲。歛。江。亭。初。過。雨、月。明。津。樹。欲。生。潮、峴。根。橘。柚。知。誰。種、碕。曲。茅。茨。許。共。樵、不。羨。東。山。携。妓。看、堆。盤。膾。玉。映。紅。綃、蒲。室。東。窓。看。山

金。鰲。背。上。岌。神。山、滿。地。瑤。華。照。紫。烟、島。樹。深。遮。僊。洞。路、海。潮。直。到。寺。門。前、微。雲。僧。磬。清。寒。殿、隔。岸。漁。篝。明。夜。船、此。日。送。君。歸。絕。境、青。鞋。布。襪。興。飄。然、絕。海。送。古。心。藏。主

而して此種の者は絶海が集中に於て少しも珍とするに足るものならず。姑く唐詩僧禪月が韵に次したる山居十五首の中より摘句するも、聽。經。龍。去。雲。歸。洞、看。瀑。僧。回。雪。滿。瓶、和。烟。藤。蔓。侵。門。牡、經。雨。苔。花。上

架。頭。濛。々。空。翠。沾。經。案、漠。々。寒。雲。滿。石。樓、洞。口。雲。來。藏。怪。石、溪。頭。水。漲。沒。危。樑、溪。獺。祭。魚。青。藕。裡、杉。鷄。引。子。白。雲。中、林。罅。穿。雲。凌。虎。穴、潭。頭。洗。盃。瞰。龍。宮、の如き佳語層出拾ふに遑あらず。今禪月が原作を検するに間々、石。窓。歌。枕。疎。々。雨、水。碓。無。人。浩。々。氣、童。子。念。經。深。竹。裡、彌。猴。拾。虱。夕。陽。中、焚。香。開。卷。霞。生。砌、卷。箔。冥。心。月。在。池、斷。藥。童。穿。溪。罅。去、採。花。蜂。冒。燒。煙。歸、好。鳥。似。花。窺。玉。磬、嫩。苔。如。水。沒。金。瓶、の如き愛すべき無きに非ざるも、要するに餘り類唐纖細に入りて、絶海が能く氣韵を存すると相別たざるを得ず。且つ右に抄出せし絶海が雅麗稍や晚唐に近き者のみを見て、彼が本色と爲すあらば、甚だしき謬誤に落つるを免れざるべし。更に彼が多景樓の作の如きに徴せよ。

北。固。高。樓。擁。梵。宮、樓。前。風。物。古。今。同、千。年。城。漸。孫。劉。後、萬。里。鹽。麻。吳。蜀。通、京。口。雲。開。春。樹。綠、海。門。潮。落。夕。陽。空、英。雄。一。去。江。山。在、白。髮。殘。僧。立。晚。風、

驅。駕。氣。勢。是。に。至。り。て。竟。に。聯。鐘。を。兩。室。の。外。に。求。め。ざる。を。得。ざる。なり。趙。松。雪。が。同。じ。く。多。景。樓。の。作、會。顯。宮。閣。幾。時。修、遠。檻。長。江。萬。古。流、白。露。已。零。秋。草。綠、斜。陽。雖。好。暮。雲。稠、平。南。籌。策。張。華。得、治。内。人。才。葛。亮。優、景。物。未。窮。登。覽。興、角。聲。孤。起。甕。城。秋、

猶ほ元朝の風氣に支配せらるゝを免れず。楊鐵崖に至りては、

極。目。心。情。獨。倚。樓、荻。花。楓。葉。滿。江。秋、地。雄。吳。楚。東。南。會、水。接。荆。揚。上。下。流、鐵。甕。百。年。春。雨。夢、銅。駝。萬。

里夕陽悲、西風歷々來征雁、又帶邊聲過城頭、

其の標新領異は則ち得たり。而も尙ほ絶海をして別に逸調を縦にせしむ。松雪・鐵崖共に錢塘懷古の作あり。付載して前出の絶海が作と對覽に供す。

東南都會帝王州、三月煙花非舊遊、故國金人泣辭漢、當年玉馬去朝周、湖山靡々今猶在、江水悠悠只自流、千古興亡盡如此、春風麥秋使人愁、松雪

天山乳鳳飛來小、南渡衣冠又六朝、劫火自焚揚旆塔、箭鋒猶低伍胥潮、燐光夜附山精出、龍氣秋隨海霧消、獨有宮人斜畔月、多情猶自照吹簫、

松雪が岳鄂王墓の作は、陶南邦の云つて岳王墓詩、不下數十百篇、其膾炙人口者、莫如趙魏公作と爲せる者なり。即ち、

鄂王墳上草離々、秋日荒涼石獸危、南渡君臣輕社稷、中原父老望旌旗、英雄已死嗟何及、天下中分遂不支、莫向西湖歌此曲、水光山色不勝悲、

又予輩常に愛誦せる青邱が、

大樹無枝向北風、千年遺恨泣英雄、班師詔已來三殿、射虜書猶設兩宮、每憶上方誰請劍、空嗟高廟自藏弓、棲霞嶺上今回首、不是諸陵白露中、

共に懷古の絶唱と稱して可なり。而して絶海が作も此等と相先後して軌を追ふも決して愧づる所あるを見ず。曰く、

深入朱僊臨北虜、不知碧血瘞南州、瓏雲空映吳員廟、湖水無期范蠡舟、四將元勳俄寂々、兩宮歸夢謾悠悠、他年天塹人飛渡、添得英雄萬古愁、

更に彼が姑蘇臺の作の如きも、右諸篇と相率ひて優に中晩唐の間を馳突し去り、遙かに盛唐諸豪の間に軒翥翔するも亦得て難しとせず。

姑蘇臺上北風吹、過客登臨日暮時、麋鹿群遊華麗盡、江山千里版圖移、忠臣甘受屬鏃劍、諸將愁看姑茂旗、回首長洲古苑外、斷煙疎樹共凄其、

青邱に姑蘇雜詠百二十三篇あり。好古の者は絶海が此詩を側に就いて見るべし。或は青邱が詩を評して云ふ、命意騁辭、如健鶴橫空、如快馬歷塊、如春園桃李、如秋汀蘋蓼、超逸不羣、而俊麗可喜、深得詩人之妙と。移して以て又絶海を品すべきなり。

彼が詩品略約上述の如し。最早饒言贅辯の要なからん。然るに今更に一蛇足を添へんと欲するは、當時三竺吳越の間に星羅せし方外の徒に於て之を概観せんことは是也。是れ直接に日本五山の詩壇に關係を有せし者にして、亦度外視し去るべからざる所あり。先づ天寧の楚石は全室と並稱せられ、全室化

滅の後は、我五山の徒其下に群集せし事あり。絶海も曾て之を訪へり。集中往々にして佳句あり。されど全體よりして見れば、猶元朝、織麗の遺物たるを脱せず。例せば其の賜王使君の如き、

君持使節過繩橋、已遣蠻方感聖朝、良將來誇班定遠、大臣猶數蓋寬饒、川香野馬衝青艸、雪晴天鵝避早鳴、西出陽關九千里、歸來莫惜鬢蕭々、

時に又全室の敵手たるべき者に止庵(名德輝字麟州)あり。才調頗る見るに足る。左の一首の如き以て一般を推すべし。

栗葉。都。前。石。子。溪、青山一掩路渾迷、也知谷裏多羽鳥、未信雲中有大雞、滿耳只聞諸湖響、四頭方覺衆峰低、平生僣怙今朝到、願結茅茨在寺西、

此邊の格を蕉堅藁中に求むれば、左の如き者を以つて近しとすべし。

一曲寥寥太古琴、百年未見有知音、行過北嶺襟期合、爲說中腸感慨深、萬壘晴巒清客眼、一泓新水照人心、偶同携手須行樂、桃李明朝綠作陰、春日尋北山故人

永安率堵知何處、小朵峰西落日懸、一徑松花山雨後、數聲溪鳥石堂前、上書道契聖明主、輔教言同天地傳、東海後生來吊古、春風漠々薛蘿烟、拜永安塔

其他の作家には蒲庵(復來)・夷簡(易道)・竹庵(懷渭)・夢觀(名仁字一初)・至仁(字行中)・夢觀(大立)・恕中(無懼字空室)等あり。

彼等の集中を検すれば、我が五山の徒と贈答の篇多し。されど概して我が海也と馳騁せしむるに足る者なし。

支那詩壇に於ける海也が位置略定まれり。更に翻つて之を五山に觀るに、固より同日の論に非ずと雖も、我邦に散逸して彼士曹學佗が明詩選、朱竹垞が明詩綜等に殘れる天祥・機先・中心・伯英等が作に至りては、間々絶唱の音を存するあり。蓋し皆渡海して能く支那音に通ぜしより得たるなり。故に語句靜穩にして意趣圓暢なり。徳川の初世となりて此の風一頓し、近代に至りては梁川星巖頗る韻律の精細を致し、明治に入りて春濤翁此に意を用ゐる事深く、遂に槐南氏の稍や天才に近きと、岐山氏の殆んど人力を極むるとを得て、補天の功を終へんと擬せり。亦以て詩風の變遷を見るべきなり。今蕉堅藁中より更に數首を抄録して前數篇の後勁に充てんとす。但集中古體の存せざるは散佚せしものか。姑く偶頌中の一篇を採れば、

勝地初相招、清遊心自悅、矧茲秋節新、天朗風露潔、金色老頭陀、意根久消歇、一彈獅子筋、調與衆音別、斯道無疵瑕、萬古長空月、片々白衣雲、須臾即變滅、次韵元章和尚

之を以て五山一般の作者に見れば、同じく説理の語たりと雖、獨り海也が箝蔬の氣に遠ざからんとせるは他の及ぶ所に非ず。五律にては、

凄凉天竺寺、片石寄巖岫、千劫空磨盡、三生舊夢殘、雲根山氣潤、野火蘚紋乾、二子今安在、臨風一感歎、三生石

長憶相尋處、招提北郭旁、岩雲依樹々、湖月到房々、鳥下金繩雪、童燒石室香、二年夢不到、一望斷人腸、寄寶石寺簡上人

古寺門何向、藤蘿四面深、簷花經雨落、野鳥向人吟、草沒世尊座、基消長者金、斷碑無歲月、唐宋竟難尋、古寺

冬行苦短日、蓐食戒長塗、雪暗關河遠、風吹髮髮枯、荒山雖可度、積水若爲途、岸轉橋何在、沙危杖屢扶、漁籌殘近渚、僧磬徹寒蕪、野興潛中動、衰容頗外蘇、破衣江上步、圓笠月中孤、天迥長河沒、曙分群象殊、寒煙人未爨、野樹鳥相呼、回首搏桑日、還如萍實朱、早發

七律にして聲調の雄健なる者には、

天照版圖雄氣象、九畿無處不皇華、雲連比叡三千院、夜靜將軍十萬家、驪屢春嘶沙苑草、綿蠻朝轉上林花、法旛若到龜山下、應有神龍護木叉、送元草歸日本

風物眼前朝暮愁、寒潮頻拍赤城頭、恠岩奇石雲中寺、新月斜陽海上舟、十萬義軍空寂々、三千劍客去悠悠、英雄骨朽干戈地、相憶倚欄看白鷗、赤間關

韻致の雋麗なる者には、

天寒歲暮雪如簾、日夜嚴城鼓角鳴、百萬已收燕北馬、頻繁休督海南兵、長江水冷魚龍伏、曲渚風生鴻雁驚、遙想東門飯牛者、悲歌聲絕泪縱橫、歲暮感懷寄寧成市

丹丘東望白雲橫、獨抱囊衣發帝京、寸草誰憐遊子意、編蒲應慕古人情、維舟海岸疎燈雨、倚杖秋山落木聲、遙思故園行樂處、含霜橘柚照林明、送迎侍者歸天台

白髮慈親夕倚門、客遊無奈百憂翻、回頭虛戀青雲路、勞夢遙投碧海村、王母桃花春未老、孟宗竹塢蔭還繁、深期道術繼先志、世上險夷何足論、贈無文侍者

白髮老翁堂上坐、瘴雲海外一僧還、瑤孟午食龍宮飯、鍊錫朝尋鼉背山、涼月滿時珠有孕、明星貫處石成斑、諸昆若問南遊事、八月飛槎兩浙間、贈笑山侍司還土州省親

絶句にては、

華亭無鶴唳、懷古意空存、一犬隔江吠、却疑黃耳孫、雲間口號

綠樹林中淨似秋、更憐翠鎖水邊樓、乘涼蹈破蒼苔色、撩亂袈裟上小舟、綠陰
河沈一帶冷涵天、遠近峰巒秋霧連、似把碧羅遮望眼、水妃不肯露嬋娟、河上霧
楚妃醉困倚西風、曾侍君王宴渚宮、鳴佩歸來秋淡々、殘粧影落玉屏中、折枝芙蓉

乘。輿。南。狩。不。時。回。遺。廟。西。山。雲。一。陣。昔。日。何。人。調。鼎。手。老。禪。掃。雪。獨。看。梅。後。醍。醐。廟。看。梅
 故。國。歸。來。少。故。人。一。庵。高。臥。淨。無。塵。天。寒。夕。鳥。還。山。盡。何。處。隱。君。吟。更。新。和。祭。侍。者。詞
 積。雪。山。中。畫。掩。扉。鬻。茶。烟。起。濕。林。霏。爲。憐。雲。外。松。巢。鶴。清。暎。時。々。刷。縞。衣。文。明。絕。侍。者。雪。中。詞
 絶海が四六文は全く蒲室より出で、然も別に其の巧妙を盡せり。今は之が細論に及ばず、只左の
 一篇を挙げ置かんのみ。

寧一庵住姑蘇崇福江湖疏

豐。城。劍。氣。射。斗。牛。之。光。芒。陶。壁。梭。精。乘。風。雷。之。鼓。動。蓋。神。物。難。測。變。化。而。利。器。肯。久。沈。埋。用。舍。有。時。
 顯。晦。合。道。某。千。金。駿。骨。五。色。鳳。毛。還。國。師。犀。牛。兒。全。機。獨。脫。得。如。來。摩。尼。瑤。衆。義。絶。詮。游。華。亭
 慕。船。子。高。風。思。天。台。哦。寒。山。妙。句。矧。練。川。之。勝。境。有。崇。福。之。佳。招。伐。鼓。考。鐘。克。舉。三。代。之。盛。典。推
 堅。拂。懶。四。衆。之。具。瞻。母。爽。滙。盟。從。茲。鵬。翥。

絶海が門下より出でし才俊には、古劍・觀中・太白・鄂隱・西胤の輩ありて、絶海が詩文の體裁を
 傳へて室町の中葉以後に鳴れり。且つ絶海等が吟哦の間に開きたる明朝との交通漸く盛なるに従ひ、
 彼等も皆一たびは海上に浮び、閩越の間に往來し、支那文學を輸入し來りしもの少なからざりき。紙
 幅限りあり、此には悉くし難きのみ。

以上層々叙述せる所を以て、粗ぼ五山文學に於ける學僧義堂と詩僧絶海とを世に紹介し得たりと信
 ず。彼等が名だに忘却せられんとせる今日に於て、若し幸にして此に由つて彼等が事迹をして徒に五
 山殘院の破壁中に泯滅に歸せしむるなきを得、所謂暗黒時代の層下より當世の學術界に一道の異彩を
 放ち來らしむるものあらんには、豈獨り一二衲僧が千古の憾を慰せしむるのみにして已まんや。

虚空落地、火星亂飛、倒打筋斗、抹過鉢圍、絶海辭世

第三章 汝霖

第一節 傳記

室町の初期絶海と並鑣馳騁して文名高く、海の内外を騷がせしものを汝霖となす。

汝霖名は良佐(良一作周)、姓は藤、遠州高園の人、少より出家し宗說該通兼ねて屬文に長じ、聲叢社に喧
 し。應安元年絶海と俱に明に入り、蘇州承天寺に於て箋翰を掌る。繼いで五山諸大老と鐘山に入りて
 大藏經を點校す。同袍皆之を畏敬す。又文章の鉅公に遇ひて翰墨を研精す。翰林學士宋景濂霖の文藁
 を見て大いに賞して其尾に跋す。

跋日本僧汝霖文藁後

右日本沙門汝霖所爲文一卷。予讀之至再。見其出史入經。旁及諸子百家。固已嘉其博瞻。至於遺辭。又能舒徐而弗迫。豐腴而近雅。益歎其賢。頗詢其所以致是者。蓋來游中夏者久。凡遇文章鉅公。悉趨事之。故得其指教。深知規矩準繩。而能使文字從職無難也。汝霖今汎鯨波東還。以文鳴其國中。蓋無疑矣。嗚呼汝霖禪家之流也。蕩空諸相。視五蘊四大。猶爲土苴。況身外之文乎。苟執此而不遷。或將與道相違矣。雖然。汝霖徧參名山。精於禪觀。其於此義。未嘗不知之。特以如幻三昧。游戲於翰墨間爾。游戲翰墨非難。而空其心爲難。所謂心空。則一切皆空。視諸世諦文字。雖有粗迹。而本無粗迹。雖有假名。而實無假名。惟一惟二。惟二惟一。初何礙於道哉。觀汝霖之文者。又當於此求之。汝霖名良佐。遠州高岡人。姓藤氏。嘗掌書記於蘇之承天寺。繼同五山諸大老入鐘山。點校毗盧大藏經。其同袍皆畏而愛之云。(見金華叢書胡月樵校梓宋學士全集補遺卷三)

明太祖汝霖と絶海とを禁殿に召して熊野山の事を問ひ、賚賜甚だ渥かりき。洪武九年の春、絶海と同じく歸朝す。丞相義滿其才徳を聞き、使を泉州堺邑に遣して邀へ、要して法を春屋に嗣がしむ。康曆二年赤松義則の聘を受けて播の法雲に開堂す。是歲義滿覺雄山寶幢寺を城西に建て、春屋を請して開山始祖となし、霖をして補處住持せしむ。絶海之が爲めに疏を作る。

佐汝霖住寶幢諸山疏有序

准三宮左相府征夷大將軍。相攸城西。新建梵宇。山曰覺雄。寺曰寶幢。制度宏壯。安衆甚廣。雖大方叢林。無得而埒焉。乃陞厥位齒于十刹。於是拜請知覺普明國師大和尚。以爲開山始祖。仍命高第弟子前席法雲汝霖禪師。補處住持。凡我諸山在洛東西者。無不喜法社之作興。慶善類之登庸。謹呼蹈舞賀以詞云。

耽源之承南陽。克類乃德。慈明之接積翠。益昌厥家。惟父子並化於當時。而授受足徵於前史。某方外司馬。僧中此郎。雙峨一代文章。造詣非謬。六朝萬古風物。收拾無遺。趨楓陛而賦三山詩。蕩茶盃以對萬乘主。尙方給履。中使賜衣。一舸東歸。飄然碧海之渡。尺書西聘。樂哉赤松之遊。矧茲瑤旛名藍。新闢覺雄勝槩。黃金側地。湧出玉殿瓊樓。靈龜鎮山。左右青龍白虎。盟如葵丘之會。願卜王翰之鄰。

義堂の日工集永徳二年十月十三日の記に云ふ、承府君命。赴西芳精舍江葉之會。會者。官伴二條攝政殿。侍從中納言。萬里小路中納言。日野兄弟。管領兄弟。僧伴太清。物先。汝霖。本寺長老善明白等也。云々。又同四年十二月十日の記に云ふ、佐汝霖至。問忠宣公之事。余答之。仍引摘藁祭文等而辨之。云々。其生卒の年月を詳にする能はず。空谷の寶庵汝霖佐禪師贊に曰く、文如遠水波瀾卷地。氣似高岡花本向陽。侍明岩狀於巨福名利。掌仲銘記於承天道場。既倦南遊錫。使問東歸檣。大明國王。

特贈僧服納。本朝相府。喜獲法門梁。瑞龍靈龜。連分半座乘塵拂。法雲寶旛。共翫瓣香供鹿王。耳順
嚴化難堪惜。怡雲塔下龍鳳翔。(見常光國師語錄佛祖贊) 依りて見れば齡七十に及べるが如し。

師鬢高僧傳に系して論じて曰く、汝霖明朝の諸儒と筆墨に従事す。翰林學士宋文憲知辯を振つて其文に跋す。然るに但だ宋氏の意にして汝霖の行實となすべきに非ず。昔張無盡按部して分寧に過ぎりて兜率の悅禪師に逢ひて曰く「聞く公文章を善くす」と。悅大いに笑つて曰く「運使一隻眼を失却し了れり。從悦は臨濟九世の孫、運使に對して文章を論ぜば、政に運使の從悦に對して禪を論ずるが如きなり」と。此れ本色衲僧の儒者に對するの言、凜然として犯觸すべからざるもの斯の如し。汝霖の撰と自ら涇渭を分つ。復た汝霖絶海と明太祖に謁して、熊野徐福が事を賦して絶海は四句立に成る。汝霖は律詩を作らんと欲して意を経るの間、覺えず茶杯を覆ちぬ。夫の文章は道の緒餘禪人の務むる所に非ざるなり。霖何を估筆に吟ふこと偏に茲に至れるやと。師鬢が此言、禪徒を規戒するに於て至當の議たり。然るに當時朝野一般文運否塞し、苟も文學の才器を抱く者は専ら叢林を以て唯一の登龍門と做す。乃ち禪關は必ずしも全く本色衲僧のみの栖處たるを得ず。其稍や雜駁なるもの反つて其の一時の異彩を放ち、世道人心と親切の關係ある所以たらずんばならず。汝霖人格の高下絶海傳中に議せしが如きありと雖も、唯之を視て一代の文士と做し、姑く其他を略して問はずんば、其才の優亦頗る珍

重すべきものなくんばあらざるなり。」惟忠曾て汝霖の歸郷を送るの詩あり。

承天外史汝霖翁。白髮生還鄉井中。織屢聊堪供老病。上書何復謁王公。一江秋冷魚龍水。萬里天高

鴻雁風。可憶相逢傾蓋處。踈籬雨倒菊華東。送汝霖佐外史看觀和桐山西堂韻

是れ寧ろ用つて汝霖を贊するの辭となすべきか。

第二節 著述及び詞藻

高僧傳に、汝霖著はす所の併儷の遺稿を高閣集と曰ふとあり。今史料編纂掛にあるものは建仁寺兩足院本を謄寫せしものにして、汝霖佐禪師疏と題し本題高閣集と傍註せり。其詩偈は多く傳はらず。高僧傳には左の二篇を收拾せり。

北風撼々拂林園。水在瓶兮月在天。烈焰堆中清淨土。本來面目正昭然。慈恩寺殿海寶居士乘炬

佛事

石城之寺跨江濱。上有層樓最不羣。風捲浪花晴似雪。天凝海氣曉如雲。龍公窟宅凭欄見。鮫女機梭

欵枕聞。萬里鄉關未歸客。登臨猶自對斜曛。題筑之吞碧樓

横川の百人一首には左の一篇を載す。

雲影輕々塵不縈。梅花帳淨暖回時。定餘夢落知何處。月掛羅浮雪後枝。梅花帳

辭句瑰麗頗る見るべきも、惜むらくば唯だ其鱗甲を留めて全體を認むる能はざるを。但其疏稿は完璧にして存し、十分に其技巧を窺ふことを得べし。其詞華剪裁幹旋の精巧なる殆んど推して五山作家の巨擘とするに足る。絶海太白以下の追蹤を許さず。今他諸人傳記中に引く所を除くの外別に數篇を録し、特に舊本に依りて字行を正寫し、以て其併偶の法度を明にすること下の如し。

壽椿庭住淨智江湖

大椿在古。

八千歳爲春八千歳爲秋。

神冥生庭。

十五日以開十五日以落。

適事與雅稱而合。

宜德逢明時而高。

心醉六經

詞傾三峽

凌雲蓋世之氣。

聳壑昂霄之姿。

南湖鴛鴦兮西湖船。

寧非龍宮觀史。

北山猿鶴兮東山屐。

想見鹿花祇陀。

黜其異以蹈道中。

取其言以爲心術。

克存至理也。

其唯達人乎。

誦佛語傳佛心。

專以明佛性義。

去金陵留金峯。

故能立金剛幢。

位益高志益恭。

操彌約事彌大。

周之士也貴秦之士也賤。

勿以弃交。

夏之文也質殷之文也華。

尙欲承誨。

獨芳和尙住京萬壽山林友社

雲峰之交積翠。

取友必端。

演老之遇浮山。

承誨惟厚。

蓋宗師之所務者。
其道誼之所存乎。

某
厥德孔明。
其行甚峻。

目空諸子。 有臻伯祥之風。
書成萬言。 得嵩仲靈之格。

學越吟於浙下。
指吳會於雲間。

子以高遷。
元協衆望。

琴臺夜靜。 陽春之曲彈以歌。
石田秋登。 甘蔗之苗秀而實。

雖曰梵王之宮得主。
奈何處士之廬無人。

朝取一人暮取一人。 爲有力而奪。
去以萬壽就以萬壽。 皆無心而然。

戴笠相隨。
彈冠以族。

玉振岩住京安國江湖

神光久居三川。 談玄伊洛。
圓照不赴萬壽。 弘道蘇杭。

固知皇天之仁。 胸次千卷。
弗匿明哲之德。 某
舌端九江。

近而清談。 瑩然青天披雲霧。
遙而仰望。 皎如太陽升朝霞。

猗歟丞相至公。
使此宗師出世。

豐城寶劍。 氣射斗牛之墟。

智海神珠。 光現南北之色。

行藏有數。

動止無恒。

愚於虞而智於秦。

是土何害。

顯於今而蔽於古。

蓋天所爲。

非惟以愜素心。

抑亦有補叢社。

小者居內壯者居外。

龍象駿奔。

上位不驕下位不憂。

鸞渥群集。

庶垂煖語。

以尉寒盟。

說南源住賀州安國諸山(應于東瀛和尙之求)

惠日昇時。

爭觀高明先兆。

臥雲深處。

允惟至化難逃。

蓋士之時調時信。

厥行簡雅。

而天之可速可久。

某

厥姿瑰偉。

一代風流。

斯文將凌北澗。

千衆圍繞。

其位直奪南泉。

墮地俊駒。

冲天快鶴。

龍川亭畔。

慣報大王之來。

鹿苑院中。

親承上相之帖。

明珠易獲。

華袞非榮。

非惟安國利民。

抑亦扶宗輔教。

萬松鬱々。

氣發双峯之春。

二桂昌々。

識飯三葉之裔。

幸作大綱小紀。
相望北斗南箕。

容巨川住真如諸山

鵬之變化。 必欲從於天地。

龍之屈伸。 安能離於佛海。

蓋乃天生大德。 某 大林奇材。

罔俾堊有遺賢。 某 瑞岩靈草。

真如實際。 鑒三世於寸心。

大象无形。 空萬年於一念。

抑此公舉。

允協衆情。

瞻彼北山。 卿家父子繼美。

邈矣東海。 誰人爵祿爲辭。

自後者人以先之。

能謙則天有益也。

求非所得。

理使其然。

智者樂水仁者樂山。 速回法旃。

上交不諂下交不瀆。 將固宗盟。

盛大宗住禪興江湖

當世人物。 天下咸稱西京。

絕倫奇才。 古來多出東里。

故以類而度類。 某 言簡而溫。

斯求仁而得仁。 某 辨雄而博。

寶珠在掌。 十方同時現形。

明鏡當臺。 大士无路遞跡。

因義以制事。

積善而成名。

當臥梅谷竹園之雲。 如梅清如竹直。
丕承松源蘭溪之派。 似松盛似蘭馨。

爰喜承天而行。

且惜奔我而去。

第五橋東流恨水。

漚泛輕々。

三千里外獨飯人。

車驅薄々。

願存此道。

勿負平生。

應无方住神山江湖

海上神仙。

于今壯金闕之觀。

閩中瑞世。

自昔以錦衣之榮。

兩美誠其合哉。

某

五色獅子。

一時僉曰俞也。

九霄鳳皇。

丕承月堂一宗。

不謬南浦三世。

早倍瑤池之宴。

而吟小艷詩。

晚升瑞阜之堂。

以說摩訶衍。

學極諸氏。

聲馳九州。

乘赤豹兮從文狸。

盤白石兮坐素月。

油雲興而沛雨降。

物霑法恩。

潦水盡而寒潭清。

人取心鑒。

君子以貴豹變。

吾儕茲修鷗盟。

嵩岳中住承天山門(岳中時在豐之萬壽宮住法雲)

豐城寶劍。

出必定不平之時。

徂徠喬松。

用必成大厦之棟。

蓋神物有所待。

某 口吐珠璣。

而天理合自然。

腸堆錦繡。

金雞啼上扶桑樹。

龜山高哉。

白日夢升兜率天。

鹿門遯爾。

允惟德高厥位。

奚翅智過於師。

惠日麗天。

以揭開于光明藏。

法雲降雨。

以蕃育于蒼葡林。

領袖緇徒。

權衡法社。

猗歟皇祖。

孫生子々生孫。

瞻彼故丘。

水連天々連水。

莫辭音必在汶上。

式微胡爲乎泥中。

傾誠法音。

願聽慈誨。

第四章 如心

絶海に從ひて明に遊び、吟哦亦能く其高調を追ひ、以て純雅の唐音を傳ふる者を如心と爲す。

第一節 傳記

如心名は中恕、筑紫の人、古劍快に從ひて業を受け、早く才聲を馳す。名を天龍に隸して侍香の職に任ず。天性俊發にして博學詞章を善くす。應安の初め絶海・汝霖に隨ひて明に入り、竹庵・全室・了堂等の諸師に謁して參尋殆んど遍し。竹庵嘗て心の望海水思故園の詩後に書して云ふ、近作皆可觀。所謂句法意度。可改者改之。其不改者。已得之矣。又將何說。但多作自好。多讀自知。云々。足下政在妙年奮發之秋。又得津藏主猷侍者諸勝友爲侶。宜切琢磨。以成事業。必刻意祖道。以文字黼黻清事。扶護宗教。是望。癸丑(當應安六年)九月八日。竹庵道書。中恕侍者收と。永和二年絶海等の歸程に上るや、心獨り病んで留まる。詩あり證すべし。

送絶海津藏主歸日本

送君歸故國。臥病楚山幽。只可相隨去。如何獨自留。天遙孤雁遠。海濶百川收。離思與春恨。人生欲白頭。

心年を隔て、還り舊職に復す。諸山に出世せず。廬山亭に居りて當時諸彦と唱酬吟咏自ら楽しむ。其觀音讚に曰く、小白花前不見春。海潮聲裏追紅塵。善財觸折文殊臂。金井蝦蟆吞月輪と。また源大相國天山居士終七之忌の偈に曰く、百億莊嚴無相身。頭々物々露全眞。新秋雨過蓮華幕。一陣香雲壓塞塵と。生卒の年時詳ならず。但續群書類從文筆部收むる所の碧雲稿の奥書に云ふ。玄同私考。忠恕侍者。夢窓國師弟子。與絶海義堂同時人也。詩中有丙戌年題詩。恕侍者蓋丙戌年生人也。考編年合運圖。生歲丙戌。貞和二年。虎關寂年也。題丙戌而作詩。歲六十一年終。而應永十又三年。日本王百一代後小松院年號也。自應永丙戌。至寬永元年甲子歲。總計二百十九年也と。其の所謂丙戌年の詩下の如し。曰く、道力多生知不全。詩名一國愧虛傳。深山未蓄龍蛇窟。太歲重逢丙戌年。止水平池春雨後。殘花護樹晚風前。回眸九野有無色。青是齊州一點烟。

第二節 著述及び詞藻

碧雲稿は即ち如心の詩集にして、七言八句凡四十首、絶句凡二百首、五言八句凡三十首、絶句凡十五首、其中明に在りて作りし者は在唐作の三字を注せり。徳川初期に崇傳以の翰林葫蘆集を編する

や、碧雲稿中の詩を以て悉く仲芳の所作として載録せるは、恐くは如心傳記の不詳に因りて誤を致せるならん。今東京帝國大學所藏の寫本文字の訛誤頗る多し。乃ち私に之を校正し、集中の佳作を選録する事下の如し。

先づ七言八句にては、

醉拍欄干起白鷗。登臨不盡古今愁。六朝人物隨流水。三國江山獨倚樓。禿髮涼風吹水葉。孤舟落日

上簾鉤。海門不管興亡事。猶送寒潮打石頭。 登北固樓

野人一過竹林寺。無數竹林生白烟。江近玉龍堆碧草。月明白鶴下青田。柳啣宿雨啼鷓鴣。花落春風

老杜鵑。何日來分雲半榻。故人不用買山錢。 遊鶴林寺

愛子精廬梧竹深。虎林城外鏡湖陰。一溪夜雨蒼龍起。五色春雲彩鳳吟。密葉應堪書梵字。幽花更似

說禪心。佳人相贈琅玕碧。何以酬之綠綺琴。 梧竹深處爲錢塘安上人賦

楚水悠悠流向東。吳山長在夢思中。竹枝歌裡客衣濕。桃葉渡頭歸楫通。旅館草生三日雨。故園花發

五更風。西湖自古繁華地。況復交遊談笑同。 送人還杭州二首(一錄)

倦遊海上鬢皤々。舊業池臺奈汝何。夢裡故人千里遠。愁中啼鳥一聲多。龜山帶曉花如霧。鴨水涵春

柳似波。有約莫忘須有待。樵風吹雨送漁歌。 奉寄絶海和尚

何處遊人告別來。好懷能得幾時開。怨清夜月琴中鶴。花落春風笛裡梅。關樹弄晴山雪盡。津亭帶暝海潮回。寒城爛柳不堪折。爲報行裝且暮催。 送行

三月京城吹柳花。燕姬白馬小紅車。旌旗日暖將軍府。絃管春深宰相家。小海銀魚吹白浪。層樓綠酒出紅霞。蹇驢破帽杜陵客。獻賦歸來日未斜。 京城春日

七言絕句にては、

掩泪遲々出帝城。胡山積雪與天平。琵琶不似君恩淺。(花上集 淺作海)馬上慇懃慰妾情。 贊王昭君

鄉夢勞々天一涯。西風孤泪落清笳。如何楊柳聲中月。偏照芙蓉露下花。 秋色歸思圖

廬山何處不勝情。蓮社無人芳草生。君去能听虎溪水。潺湲定有晋時聲。 送僧遊廬山

白鷺洲前望去舟。雲濤千里入江州。風帆影滅青天外。日暮蒼々楚岫幽。 送人之九江

神女峰深巴水長。清猿摘月弄秋光。舊遊如夢畫圖裡。不待三聲又斷腸。 畫猿

雨過澗邊芳山幽。故人今在帝王州。舊遊七里灘頭月。今夜偏多心上愁。 春夜看月寄蕉堅老人

灑錦江頭生綠波。芙蓉小苑得秋多。錦衣不狹朝飛翼。奈爾悲歌牧犢何。 題明皇芙蓉野雉圖

白馬長嘶潮上風。青山影落碧波中。(缺一)流未洗屬鏤血。染得汀花種々紅。 吳山廟覽物。

青松入霧如龍轉。綠竹含風作鳳鳴。金鴨香消銅漏水。道人間坐說無生。 題便面二首

夜半花開水滿堤。隔簾時見水雞栖。象床珍簟微風轉。臥听吳歌思欲迷。 同右

松雲秋淡曙光涼。童子開窓月在床。金磬冷々翻鷓夢。木蘭枝上露花香。 宿長松嶺

病骨怯寒蒙紙衣。不知深雪擁疎扉。折竹一聲清夢斷。白雲明月淡飯歸。 雪中

金英榮々曉霜前。芳意不隨時節遷。空谷天寒凋景急。美人獨立惜嬋娟。 寒月菊(二首 錄一)

鈞天聲斷楚雲陰。(花上集 陰作健)帝子泪痕湘雨深。懽殺東風無限恨。幽花色似說春心。 蘭竹圖

水漾鷗波柳散陰。依々脉々故人心。將心比抑々應短。將水比心々更深。 便面

菊水西流無盡期。赤松山色動遐思。藤花帶露春含笑。不待佳人欲待誰。 題便面贈藤藏人

王室中微天下分。山河一半(半原作等、今從高僧詩選、百人一首則作半字)屬源君。猶餘平氏提封地。草暗僧都四尺墳。

俊寬僧都墓

香烟着樹白依々。竹露風前作雨飛。定起不知殘月曙。松花影落薜蘿衣。 偶作

夢入梅花最有情。紅粧半照御溝清。不知性愛不相妬。江氏宮妃玉篴聲。 清夢軒

秋深南國稻梁多。群雁情如避網羅。一曲松風絃上怨。美人北海隔滄波。 便面

十二(作年 者非)峰頭巫女神。裏王夢裡托前身。東風吹散楚天雨。數點江雲留得春。 紅梅

秋花不欲插鴉髻。先搗清砧守夜圍。玉臂不勝双杵力。託身倦寐向遼西。 搗練圖二首

上下高低千萬聲。萬聲只是別離情。藁砧似語不相語。月度霜閣落寒城。

同右

早潮已落晚潮回。一曲離歌且暮哀。從此繫舟江上柳。幽期隨意去還何。

晚潮(三首)
錄一

桃花錦浪漲虹橋。一片春帆掃柳條。欲贈離愁千萬緒。畫圖如夢玉人遙。

春水飯帆圖
奉贈梅上人

畫角霜清夢裡聞。梅梢月淡半窓雲。芳枝不為相思折。且夕看花即是君。

蒲荀

秋風吹雨晚疎々。渠玉玄珠落玉除。醉得佳人萬里意。月華涵夢滿清虛。

待佳人不到
次韻(十二首)
錄四

松雲窓寒月浸綃。三秋一夕玉人遙。清風吹度五更枕。似比潯陽江上潮。

同右

欲把相思寄玉人。風前幾度亂精神。請看江上雪晴處。楊柳條々滿池春。

同右

我愛金山々裡人。禪心詩思共澄神。半窓松影雪迎曙。一院梅花風送春。

同右

但見青山不見人。白雲深處自怡神。雲山有意人無意。梅柳空催蕩底春。

同右

夜寒無夢見情人。觸物那能不動神。何處鹿鳴深雪裡。呦々似待野蒿香。

題趙魏公群馬詩(應水十三年作)

東望吳門光景平。玉堂揮翰慰鄉情。長嘶悽斷北風急。夢破南枝越鳥聲。

同右

春入沙丘望欲迷。雨餘烟草亂黃驪。翻々何處佳公子。綠地新裁錦障泥。

同右

綠耳遲回路不通。歌哀黃竹雪飄空。最悲瀛國移封后。畫裏徒存造父功。

同右

渡江一匹化龍飛。巴鎮猶能扈聖旆。欲酌彭城黃菊酒。項王臺畔夕陽微。

同右

玉勒幽聞花底聲。銀鞍深弁雪中行。常乘想見張光祿。復諫英姿動聖情。

同右

離愁如夢度遙岑。兩外殘陽紅樹深。無賴呦々秋苑鹿。徧將春意動人心。

過日山听鹿鳴寄春意軒

和靖舊宅と題せる一首は(雪舞孤山鶴未回。荒涼舊宅數枝梅。)絶海の蕉堅藁中にも見ゆ。就れか是ならん。

五言八句にては、

朝々空有待。夜々多無依。幾樹花猶在。餘春人未歸。山中芳草積。海上白雲飛。只道暫時別。如何

音信稀。次勻于武陵友人南遊不同詩

鑑湖秋水澗。秦望暮雲多。湖外聞樵唱。烟中識棹歌。楓林連石磴。茅屋帶松蘿。采藥常逢虎。書經

或換鵝。舊遊畫圖裡。寂寞意嗟跎。題青山白雲圖

掛席九江水。尋僧五老峰。月清秋浦晚。霜重曉樓鐘。未散烟霞旭。長馴鷗鷺蹤。開圖攬秀色。歸夢

在雲松。永青山廢寺

幽花鬢荆棘。寂寞楚臺平。欲訴靈均恨。惡聽靳尚名。壽宮春色淡。遺佩晚香清。肴藉無由奠。臨流

一撫情。感幽蘭

相送出松寺。獨歸閑竹局。匡廬如在眼。瀑布宛生聽。日照三峽水。雲飛九疊庭。含情看去鳥。不盡

楚天青。送人遊廬山

曾上太行望。天蓬片影浮。誰人無母恃。獨我有鄉愁。雨暖青蒲夜。霜寒黃橘秋。班衣如懶舞。道術

負歸休。孤雲留處

綠水浮村澗。青山抱郭斜。危橋通野店。小艇倚灘沙。烟濕柔桑葉。風含細麥花。客行愁日暮。江路

少人家。江行

有約空相待。松蘿暗古房。時々風動竹。夜々月侵牀。病葉驚秋雨。幽花帶夕陽。天寒岩谷裡。吟望

獨彷徨。期故人不(四首)

客遊多所思。豈但爲秋悲。明月正相照。故人來幾時。風清楊柳岸。露冷芰荷池。草木皆零落。含情

將待誰。同右

一日又一日。長吟復短吟。可憐多病客。遙望故人心。山寺暮雲合。野湖秋水深。空令猿鶴侶。夜々

怨孤琴。同右

離亭柳似絲。遊子引征衣。夢逐啼鶻斷。心追歸雁飛。孤雲含暮色。芳草媚春暉。繫我獨無恃。送君

方寸遠。送人省母

五言絕句にては、

風濤望不極。歸路遯難窮。但看扶桑日。朝々出海東。

望海水思故園

過橋又過橋。暮々與朝々。只恐閑行影。隨流入市朝。

扇面二首(臥雲日件錄寶德元年六月七日記云。瑞岩和尚來。歎々語吟。瑞岩曰。忽侍者過橋

詩曰云々。(如已)豈不妙哉。本集關市朝之朝字。今據日件錄補之如此

昔涉楚江水。青楓一半紅。秋風吹不散。春夢彩雲中。

同右

清影瑤池月。嚴粧玉砌霜。相思不相贈。風外惜餘香。

圓梅擬齊梁體

班々斑竹林。盡是別離心。所以瀟湘水。于今深更深。

題竹

窗外芭蕉樹。無情更有情。思人不成夢。春雨又秋聲。

春雨

流水復流水。水流流向東。故國海東際。流水客心同。

流水引

作亭脩竹裡。萬玉映簾青。常恁翔鸞影。參差月滿庭。

竹亭

第五章 椿庭

傳記

竺仙の神足にして室町初期諸公の間に馳名する者を椿庭と爲す。椿庭名は海壽、別に木杯道人と稱す。姓は藤、遠州の人(郵交徵書以爲足利尊氏季子未知所據)弱齡にして相州の淨智に往

き、竺仙を拜して鉢繫得度し、穎悟儕に異なり。曆應四年仙旨を奉じて南禪に住し。庭をして衣盃に侍せしむ。仙嘗て庭に告げて左の語あり。

示小師海壽

既爲丈夫兒。須作丈夫事。欲作丈夫事。須發丈夫志。譬如欲到家。豈肯半途廢。既獲到家已。尤須極玄秘。上可極高天。下可窮厚地。大可包虛空。細可入一切。到家事如此。未及這箇意。除是佛與祖。千聖亦不會。(見竺仙錄第
三冊法語)

貞和六年同志者と洋を截りて元に入り、天寧の空海念に依りて藏鑰を主る。秉拂示衆一會推獎す。職畢りて南堂欲・月江印・了堂照の三尊宿に見えて優賞を受く。陳氏が宅に僦居して大藏經を勘閲す。其室纔に膝を容る。掲るに木杯の二字を以てす。默堂辨・楚石琦・穆庵康及び儒雅蘇大年等歌を作りて之に贈る。聲叢林に聞ふ。穆庵招きて淨慈の第二位に居らしむ。職滿ち徧遊して浙東の名區登踐せざる莫く、錫を應天府の天界に掛く。時に明の太祖、住持白庵全に命じて一時の名緇を選びて大藏經に點せしむ。庭も亦預る。一日帝白庵に詢ひて曰く「和僧の方言に通ずる者有りや」と。庵奏するに庭を以てす。乃ち召されて奉天殿に見ゆ。日本四方の遐邇皇運の治亂を問はる。庭對へて帝心大いに喜び慰勞隆に至る。洪武五年白庵旨を奉じて鄞縣の福昌寺に出世せしむ。乳香拈出して竺仙に供す。

本を忘れざるを示すなり。道風鼎盛にして緇白仰瞻す。住持する事一期にして印を解きて維桑の典を催す。諸師偈を作りて以て其行を饒す。仲銘(克新)の送壽上人還日本序に云ふ、日本壽上人。將返其國。乞言於嘗所遊者。而屬予序。上人首參南堂禪師。復登諸大老之門。其聞見之博。造詣之深。蓋不言可知矣。況其所得之妙。有非文字所能形容者。雖言之而奚益也。夫上人由中國而還也。宜知中國之事。論其國人。而中國之事。浩以繁。非上人所能悉。然則吾所宜言者。莫大於是歟。共惟我皇元。奮起朔方。撫有諸夏。四夷八蠻。罔不臣服。幅員之廣。疆宇之大。雖三代無有也。云々。今上人之還也。有問焉。則以斯言告之。使而國之人。知越裳氏之言。爲不誣也。上人自號椿庭。嘗典藏秀之天寧。端恪勤敏。有志。異日其將鳴南堂之道於日本也歟。と。(見歸安徵書二
篇、卷之一)恕中(愼無)の次南堂韻送壽首座歸扶桑の偈に曰く、屋頭鐵馬聲丁東。明々歷々揚眞風。老夫夢熟蓬萊宮。鈞天廣樂滿耳中。覺來軒知與神通。逸響遺音競奔注。夢覺會無起滅心。帖然一似霑泥絮。道人推門露未乾。相見一笑非顛頂。十世古今融當念。大千沙界歸毫端。愛爾年來手脚老。出沒神機電光掃。南堂室內早騰揚。鉢袋千鈞已傳了。翻憶當時侍禪榻。開口便受欄曾踏。罔象明珠離水泥。軒轅寶鏡開塵匣。明朝送君鄞水邊。博多遠泛東歸船。老夫閉門乃打眠。更無心力論單傳。(見同上書
卷之二)楚石長偈の略に曰く、有佛無佛俱是誑。卽心非心盡同謗。教網高張未入微。宗門直指還流浪。所以道正法眼破沙盆。古今此道喧乾坤。黃金滿國難酬價。付與休

居的骨孫。椿庭提(一)百襟碎。不要被渠相負累。擲過那邊更那邊。尋常只守閑々地。便與麼實奇哉。諸方大可笑。嚼飯餒嬰孩。但恐空中釋梵來。曇華又爲無心開。庭元明に留まる事二十三年、本朝の應安五年を以て權中巽と明使僧祖闍無逸を伴ひて東歸し、明年復た闍に從ひて入明す(與明使來往事見本朝通鑑卷五十九)。還りて相國義滿の請を受けて洛の真如に住す。天境に椿庭壽西堂住真如諸山疏あり。曰く、休居叟養德於建鄴。珠照海玉照山。中原翁唱道於扶桑。雲從龍風從虎。枝派蕃衍。瓜瓞聯綿。某蚤遊南方。晚歸東域。應大明國主之命。董鄴縣福昌。起樞府相公之招。坐真如函丈。求人傳付心印。隨處建立法幢。瞻彼鳳凰高翔。覽德輝而下。譬如知識間出。乘願力而來。揚眉瞬目共慈悲。拈槌豎拂皆方便。今當後五百年之末運。再興前二千載之遺規。近隣相依。寧論南阮北阮。同盟不變。迴超齊侯晉侯。(見無規)義堂に與真如椿庭の書あり。曰く、某拜復。真如堂上椿翁大和尚侍者。春間客至。出示手削。并賜楞伽老人語錄新印者二冊。焚香拜讀。如在猊牀下。親聽師子之吼。何賜如之。但以屢厄奇疾。不即裁謝。因循至今。稽緩之罪。在不赦也。惟和尚大度。必不罪焉。承示。嘗在江南。於大中處。得僕惡詩而讀之。吁。大中不好心。訐露吾醜者也。而和尚不賜蓋覆。而反稱美過當。豈非大人君子樂道人之善。成人之美而然耶。感々。又承示。以未識荆爲恨。愚何人也。當此大惠。夫人以道合者。而雖未識。其心則知之矣。以跡交者。語雖終日。其心則昧之矣。惟君子之合。固在乎心。不在乎迹也。何未識之有。

惟和尚頃在南國。榮領天嚴之命。今歸本朝。首膺當山之選。可謂兩朝盛事也。第恨病懶相仍。不克參侍左右。聽誨藥耳。或曰。先楞伽老人。初自真如。赴建長之招。今椿庭接乎其武。則徑來董子巨福之席也未晚。小子聞之喜曰。果爾則跛者不移寸步。坐獲侍乎丈拂之側也。行有日矣。至祝々々。乍寒。惟爲法門自珍。不備。と。書後更に追記して曰ふ、無以表意。襪子參編奉納。匪報也。津絶海・端雲表二子。皆與僕相從熟甚者。實如來喻也。別後杳不相知死生者。殆八九年矣。今得和尚書尾之詳。乃審近況。爲尉々々。惟二子孤露玲瓏。皆藉尊庇。得無難也。荷惠愛者益深矣。感愧々々。(見空華集)又た寄賀真如椿庭の詩あり、(見空華集)日工集應安六年正月九日の記に云ふ、如龍如進二侍者來。示子建書。々書說出壽椿庭回白唐。志大道在天界寺。津要關(絶海)杭之中竺。端介然臥病明州翠峰。(舊堅稿有送端介然上京詩及懷端介侍者)蓋し絶海等在明遊學諸徒の消息は、椿庭の歸朝に由りて始めて明にするを得たるなり。尋いで相の淨智に移る。此時絶海汝霖等既に歸朝せり。汝霖に諸山及江湖の疏あり。其諸山疏に曰く、真如實際。既無惟自惟他之殊。淨智妙圖。奚有以西以東之隔。蓋乃至人處世。譬之孤月行空。某胸吞雲夢。舌鞠露蘆。神機難測。潛池而地潛天而天。應用無方。居楚而楚居越而越。萬里木盃渡海。一朝柳汁染衣。竺士大仙之心。師承有自。古德叢林之禮。典刑猶存。不圖西丘之宗。復盛東關之境。日月出矣時雨降矣。光澤俱施。江漢灑之秋陽晒之。清高孰擬。庶嗣書疏。永固宗盟。又圓覺に住す。絶海に與圓

覺椿庭書あり。曰く、夏間以光侍者職事。私于慮中。不計輒微尊聽。卒能俾香職。甚感甚荷。然而居處僻遠。不克以時裁謝。怠慢之罪。宜在譴絕。而慈量宏淵。想不以爲怪也。旬日前。嘗訪府中老居士。時有金座頭。袖出教帖。便拆封對老居士。琅々一讀。此老素欽道風。慨然增恨值遇之晚耳。城金天資妙於演史。招來林下。涼月清宵。聽閣清雅之音。令人一洗耳根。蒙喻。瓮言細語。歸第一義者。良有旨哉。何其受賜之多耶。感媿々々。茲因光侍者歸參。草々脩布。卽晨秋深。惟若時保重。以光末運。又た倉椿庭和尚書あり。年月此篇と先後を分つべからざるも併せて此處に録す。曰く、堅中藏主至。拜領教墨。就審法施入京。喜動薦紳。某以竄伏巖穴。不克趨謁致拜於床下。千山萬水外。使人鼓舞瞻望而無已。茲承問。及古劍兄住所。今在備州荒山中。坐夏衲子相繼來者。皆曰。單丁住庵。折脚鎗。無人提挈。是則風穴法昌之風。可想見也。某進不避危機。退亦失於高尚之節。冥頑無識。玷汗宗門。是以遁逃已還。一周歲月。六移茅舍。雖然。時々逢山水幽勝之處。披衣散策。而陶冶於猿鳥雲樹之趣。悠然如遊於物化之元。人生未盡。只得爲太平之逸民。其亦足矣。勿煩念。及淨著正酷。惟觀若時保膏。無倦鎚拂。重臨萬衆。黑豆法強久強新。金剛旗最尊最勝者也。至禱々々。(二篇共見、) 既に(蕉庵稿) 既にして庭復洛の天龍に遷る。汝霖復山門疏を作る。曰く、安公會居瑞鹿、大振韶國師之宗。明真初住天龍。爰承武肅王之命。蓋惟吾師出處。誠與古德低昂。某學涉九流。胸涵千古。大明北闕。特蒙紫泥之

書。會稽東山。親施黑豆之法。王侯向道。遐邇崇風。高聳於稜伽山。卽千尋金寶。輕浮於圓覺海。惟一箇木盃。猗歟丞相詮衡。當與吾山禮樂。覺皇殿上。將觀風風孫之文。法雷堂前。願聞師子吼之說。尋いで南禪に昇る仲芳諸山疏あり、曰く、登泰山小天下。爰知師表之爲尊。導衆流到滄溟。允爲學者之所賴。丕承鼎命。簡在宸衷。某人識量洞明。氣涵剛大。百城踐南方之勝。四明董東山之徒。拈生苜蓿掃菹堆。眇乾坤於一粟。鼓破砂盆奏宮商調。和蕭韶之九成。方追正覺道場。而登先皇寶地。法門得是翁髮鏢。禪林增佳氣鬱蒸。五鳳翔雲。仰觀層樓之輪奐。六龍御日。爭迎法馭之崢嶸。聞道爲師。善隣是寶。(見備室) 解行兼備を以て雲納景附す。晩に語心院を創めて逸居す。應永八年閏正月十二日病に嬰り燒香端坐諸徒に垂誡して泊然として寂に就く。春秋八十有四。

椿庭文翰を善くし、一時の尊宿其師の爲めに行狀碑銘を求むる者多し。然るに其遺稿傳はらず。深く惜むべし。義堂日工集に云ふ、椿庭話云。嘗在江南。視子空華藻六冊者于歸融侍者處。時有官員見之。乞抄書。融欲不許。官員大怒。云々。(永德四年十二月廿五日記) 又云ふ、往上生。禮椿庭於楞伽院。庭時讀楞伽經。指其疑處。與余商量者數段。余略解之。(至德二年正月九日記) 上生設供。請龍湫・椿庭・振岩等若干人。椿庭舉余二十三歲在天龍所撰貞和集中頌兩三首而見問(同月卅日記) 上生院請諸老兄弟百餘人作供。供罷赴謝慈聖院。院主出揚華作席文二幅者爲惠。過椿庭。庭間以稜伽注中謀伐二字。(同年二月二日記) 又云ふ、佛光忘

半齋諷經。經及齋罷。赴慈聖院。院主茶話。久之去矣。因便過椿庭於梭伽院。問云。今時日本祖忘行特爲茶次獻菓子。恐是日本俗習。止之何如。庭曰。唐裏無此獻茶之儀。(同年八月廿九日記)又云ふ、已時禪罷。出堂。梭殿椿庭來訪。且謂爲入浴。仍袖中自出百錢。曰貼齋。余笑手受之。即喚侍僧。送之於厨。是真入唐風流也。(嘉慶元年十二月四日記)又云ふ、此類、以て椿庭義堂兩人の學行を相磨せし狀を見るべし。義堂の臨終に至りては又云ふ、次椿庭和尚。先燒香一炷。自擧楞嚴咒。繞龕三匝。大展三拜。亦自回向。就龕陰。而讀銘。右繞立龕前。高聲慟哭三次。出。是唐樣也、諸子聽之。愈泣咽云々。(同二年四月四日補記)所謂唐様の輸入庭の如く久しく彼土に在りし者にして始めて之を能くすべし。此外空華集に謝椿庭惠紙の詩あり。就きて之を見るべし。又た、古劔の了幻集に左の一詩あり。

一夜平分六尺床。蘆花被短脚伸長。覺來江北江南夢。鴨水天低月挾霜。

次韻酌椿庭西堂

第六章 伯英

傳記

伯英名は德俊、別に青丘遺老と號す。武州の人なり。久しく了堂安禪師に隨ひて宗說俱に傳ふ。時

人言つて一切智人と爲す。應安中登大年と同船入元し徧く巨刹に遊びで名師に參見す。天童山に上りて了道一に謁す。命じて藏函を司らしむ。之を久しくして辭を告ぐ。道偈を作りて之を送る歸國に及んで相の圓覺に住して建長に遷り、詔を奉じて洛の南禪に升る。暮年大寧に退居す。應永十年八月十二日寂す。遺偈に曰く、生死涅槃全不相于、須彌躡跳虛空展顏。と。行卷を萬松藁と曰ふ。今傳はらざるを惜む。

第七章 天祥

第一節 傳記

天祥名は一麟、晚に一庵と號し、又也足子と號す。京兆の華産、藤氏の右族、攝録九家に生る。幼にして穎發、東海源に東山の大中庵に依りて童役に執侍す。貞和元年歳十七にして得度進具し南禪建仁の間に遊びて諸名宿に參す。旁ら文墨を嗜み才名を以て中立鶚と連璧の稱あり。(立は東海の子法燈の孫南禪を董して當世に聞ゆ)天龍真如に在りて職に任じて秉拂す。後龍山見に建仁、南禪、天龍に隨ひて叩問詳切機鋒捷出す。山常に難得子と呼ぶ。永和三年四十九歳、薩の大願に出世して居ること三載にして筑の聖福に移る。汝霖に諸山疏あり。康徳元年洛の萬壽に住し、繼いで建仁、天龍に主

たり。應永八年瑞龍山に升る。丞相義滿山に入りて其提唱を聞く。晩に東山の護國の塔を守る。一時の名衲義堂、龍湫、太清、默庵、絶海、空谷、古劍、雲溪等の如き莫逆倡和す。一日病に遷りて侍者を顧て曰く、吾れ行かんと。侍者紙を出して偈を求む。祥書して曰く、有々々々々、無々々々々、裂破鐵絲網擊碎驪頰珠、と。筆を擱きて化に就く。實に應永十四年臘月初二日なり。壽七十九。其の法を嗣ぐ者雲岳孫、子龍雲、江西派、瑞巖惺、九淵暎、慕哲攀等各大利に據る。塔院の東山に在るを靈泉と曰ふ。絶海の將軍に請ひて付する所の地なり。古劍の了幻集に湯山會合の詩あり、その天祥首座贊偈に曰く、背將五彩畫虚空、其奈黃龍欲墜風、天上夢回春過半、莫勞頻辟蠹書蟲、と。又義堂の空華集に悼天祥頌軸序あり曰く、永和初元、歲次乙卯、四月廿六日、前淨妙堂上天祥禪師、示般涅槃於遠之安源蘭若、有辭世偈曰、頓伽餅裏、滿盛虚空、一踢々倒、八達七通、計聞釐下、有大猷玄首座、倡伽陀而悼之、和而挽者若干、編成清溪一峰二老、著一轉語而證焉、厥後九年癸亥春、師之徒奇才書記、出以示予、且請序於首簡、蓋以余嘗預淨妙法筵也、既不獲讓、有議于旁者曰、夫一死生齊得喪者、死弗之哀、生弗之榮、喪而弗之憂、得而弗之喜、此聖賢之道、所以拔乎愚俗者也、而今爲之徒者、猶有賀弔哀榮之禮者何、空華子曰、不然、夫以真俗一其致者、榮斯生哀斯死、道豈外乎是哉、故吾祖百丈氏之創禪規也、有住持章曰、出世也、同盟友社、賀而疏之、遷化也、兩序諸徒、祭而文之、謂之

憤厥始成其終、悼焉不亦宜矣乎、於是議者拜謝而退矣、禪師法諱源慶、三川人、嗣東福雙峰源公、源公嗣聖一國師爾公、爾公適凌霄文武鑑中百鍊者云。

正宗統其的行狀を作る。

第二節 著述

天祥著す所語錄二卷、佛祖歷年圖二卷、藏叟箋十卷、龍涎集一卷あり(高僧傳)。今未だ之を見るを得ず。行狀に云ふ、詩文四六皆不留藁、所謂本色宗匠也。

第八章 觀中

第一節 傳記

義堂絶海の間に出入して一種の光彩を添へ成すもの、古劍の外、觀中あり。

釋中誦字は觀中、日奉氏阿州の人、生れて英敏拔萃塵壙を樂まず。觀應元年甫めて九歳にして人に借はれて洛に入り、夢窓を拜して童役を執る。翌年祝業進戒す。此秋夢窓遷化す。因つて諸兄に就いて習學怠らず。又南北の教肆に遊ぶ。延文五年相州に往きて諸老を咨叩し、老兄義堂に隨從す。義堂諄諄垂誨して速に南詢の策を揚げしめ、仍つて送行の七律あり。

相逢今十載。此別欲何之。入海須窮底。登山莫憚危。龍宮雲宿宵。虎穴霧垂垂。去矣休回首。青春髮易絲。贈詠觀中南游

觀中亦告別の詩あり。

曠劫恩波攪不乾。白頭再會說它年。激翻萬派西江水。將好歸來報舊緣。眷眷之餘賦一絕。爲佗時再會張本。

九州博多の津より商船に附して發す詩あり。之を紀す。

海東聞說拔船頭。不是明州定越州。衣上無端今夜露。故園松菊入新秋。

已にして臺州に達す。時に元の至正二十四年(我貞治三年)なり。此より又福州に到り、洛陽橋を經超凡閣に登る。會々黃巾の亂ありて道路通ぜず。械を卷いて東歸し、春屋に天龍に依り記室を掌る何もなくして分座説法す。嘗て相陽に至り再び義堂を訪ふ。義堂作あり。

方外乾坤足勝遊。人間無處不通幽。鐘鳴水寺黃昏月。覓劍重來又刻舟。癸丑冬。同詠觀中。宿

六浦楞伽山。有懷方外法兄次韻。

日工集應安六年(即癸丑)十一月五日の記に云ふ、小雪。觀中有詩。曰。海國陰風不斷吹。薄雲無態雪飛遲。天公識我京行近。剪下銀河水一卮。余乃有和。と。義堂の和詩今其何れなるやを定め難きも、

空華集中に又送行の五律一篇あり。

憶昨南遊日。離歌贈以之。相逢今老大。客路說艱危。盡水丹心破。炎風白髮垂。勉哉宜努力。吾道正

懸絲。次韻贈觀中詠藏主歸東

又別に次韻贈詠觀中歸京と題せる七律三首あり。註して一は等持の古劍に和し、一は金澤藏書を觀て作るとし、一は則ち觀中に和するものなり。

我欲留君長作伴。君應笑我老無徒。玉麟不受芒繩縛。鳴鳳寧容握粟呼。雪落爐邊煨榾柮。風吟壁上掛胡蘆。空華幻影元非實。莫把丹青寫作圖。和觀中寫予真

日工集同前廿五日の記に云ふ、

送觀中藏主。同諸友送觀中出門。不覺相携過七里濱。表惜別之禮。是日同來六人。途中聯句。或曰子稱疾禁足。雖隣寺跬步。而不出行。今送觀中。出于七里濱。無乃破禁乎。吾也今惑矣。余曰。善哉問。余嘗荷觀中道義。自少年至今。非一二。或病或旅。東西南北。漂泊之際。余孤立無依。人所不齒。而觀中獨不憚役使之勞。爲伴爲奴。千辛萬苦。不可勝計。余今稱爲長老。寧可忘舊恩乎。古人爲報一飯恩有亡軀。況若觀中於余有如上功勞乎。昔廬山遠公。送陸陶過溪。不亦然乎。於是或者惑乃解矣。

歸京の後古劔等と臨川復古の事を計り、將軍の怒に觸れ、京を出でて浪遊す。時に絶海も江州の杣に往く。發するに臨み觀中に寄するに詩を以てす。曰く、

將往近縣留別觀中外史(時因臨川復位之訴、自字治如江州。)

客路無多冬日暖。出郊徐步散幽襟。偶當辭府似禪月。未即買山同道林。勁草有誰憐晚節。甘棠空自戀春陰。白漚江上舊盟冷。老鶴何妨萬里心。

康曆二年義堂の相州より入洛するや、觀中來謁して復南に回る。義堂龍湫と共に詩を寄せ、義堂之が序を作る。其文に曰く、

寄觀中書記詩序

士不以出處二其心。不以顯晦易其介。以樂道也。苟道在躬。則雖楚處。而莫陋焉。道不在躬。則雖當塗。而莫榮焉。是以君子患道不充乎己。不患身不容於時。是達者之論也。郷丈觀中記史。言奇而行介。其才不羈。以庚申歲夏。自南國來輦下。訪予東山。話舊感慨。居無何。屬時艱。拂衣而歸。予遷等持之明年秋。得觀中書。有以禪偈贊蜆子者。其詞甚奇。先是。見南客說觀中。雖里處行己益介出語益奇。至是南客之說果不妄矣。豈非不二其心。不易其介者耶。東山湫龍潭。乃知於觀中者。一夕會友。各賦一絕。假筆於相山師。楷書成一編。以贈。示不忘故也。以予與觀中情義厚。而責序。

惟觀中樂乎其道。龍潭不忘乎舊。是皆可尙焉。故序。

觀中又た義堂に寄するに南陽艸廬圖詩を以てす。

南陽草廬圖詩

隴畝夕陽梁甫吟。中原消息亂雲深。輟耕初起髮如雪。不愧劉郎鼎時心。義堂之に和して曰ふ、

觀中寄示南陽艸廬圖詩。予讀之。忽憶昔觀中訪予南陽舊業過冬。煨芋戲老坡餅筍、作芋筍詩。

今觀中在里。予廢官寺。屢乞退未許。有感次韻二首。謝觀中。曰。

披圖想聽臥龍吟。艸舍天寒雨雪深。一出聊酬三顧重。英雄割據本無心。新詩讀了一長吟。舊隱南陽落葉深。尙記三冬風雪夜。蹲鴟撥出地爐心。嘉慶元年に至り、故郷の補陀を主どる。惟忠之に寄するの詩あり。

寄觀中外史次韻(在海南)

觀中元是社中賢。海上聲名四十年。抗疏來朝黃閣下。掛綏歸臥白雲邊。天荒地老三關話。水遠山長一指禪。行李秋來無恙否。南州瘴氣與烟連。

翌年義堂寂するや觀中哀悒あり。

金欄已屬利竿頭。夜雪鰲山恨未休。翻喜痛腸今日淚。更無蕭索爲人流。 悼義堂法兄和尚
 此歲洛の等持に遷り明德二年相國を董す。英衲擁奉蜂の王を得るが如し。後院事を謝し乾德庵を翹めて休憩す。京兆細川頼之永泰院を建て、之を延く。應永十三年四月三日寂す。年六十五勅して性眞圓知禪師と諡す。

義堂嘗て觀中の爲めに讀して曰く、

罵我者觀中。讚我者亦觀中。不罵不讚亦罵亦讚者亦復觀中。罵不罵兮讚不讚。空中花兮鏡中空。去去不須來撥火。蹲鴟未熟且烘烘。 爲觀中藏主請 (見義堂語錄) (自讚篇)

是れ以て觀中の面目を髣髴すべきなり。

西胤は觀中より稍や後輩たり。其眞愚稿に左の一篇あり。

此日迎春山閣虛。詩狂無復似當初。舊遊如夢洛西寺。千里相思成故居。 次觀中座元立春韻

是れ亦以て觀中行狀の一端を露示するものなり。空谷嘗て觀中を贊するの言あり。

相國觀中和尙

碧甃詣雲居。朋輩推精銳。遠作江南遊。欲救濟北弊。兵革梗七閩。瓶孟厄三歲。大唐無禪師。扶桑決歸計。果熟薰道香。文彩拂塵鬚。江湖名勝。叢社等儔。王侯碩儒。同門昆弟。瑞世補陀。知土地

綠。遷席等持。受檀越禮。萬年山頂。注鼓揚震天聲。永泰院後。窰塔鎮未來際。芝蘭玉樹蔚塔除。

家風又有英靈繼。(見常光國師語錄佛祖贊)

是れ殆んど以て觀中の行道記に充つべきなり。

第二節 著述及詞藻

觀中著はす所、高僧傳に語錄及青嶂集若干卷ありとせるも、今傳ふる觀中錄は語錄偈頌の後に詩集を附し合して一冊とせり。末に尙附して應永二十五年夏日觀中十三忌に於ける法孫梵鼎の乾德院拈香の語あり。(東大附屬圖書館寫本) 是れ略ぼ觀中の行狀を盡せり。書中篇章甚だ多からざるも、觀中述作の大部分蓋し此中に在るならんか。

義堂の觀中を評して郷丈觀中記史言奇而行介其才不濶と言へるもの最も當れり。蓋し大家の數に入り難きも、常に義堂・絶海等の間に周旋したるを以て、亦文學の鼓吹に與りて力ありしや疑なし。臥雲日件錄寶徳元年七月十一日の記に云ふ、昔日常光國師居鹿苑時。招闍寺兄弟點心。與絶海太岳等相謀。出數十題。續句成篇。云々。就中有咏鴉詩。其句云。莫貪臭肉窺城市。絶海謂某曰。此觀中句歟。醜於其面也。某曰。太年句也。太年有慚色。絶海以爲失言。蓋絶海於觀中。每戲言。爾汝相忘。絶海命觀中對此句。觀中曰。好入垂楊送夕暉。絶海以爲美云々。又觀中に和絶海和尙重陽韻(時法鼓)の偈

あり。曰く、

關河秋色送鴻雁。卽是三玄分拆辰。九日菊迎青眼友。萬年松待白眉人。巨鐘遠載鯨鳴海。法鼓輓來雷起春。提唱問辭親目擊。後生何幸沐恩新。

今觀中錄に就きて略ぼ其誦すべき者を擧ぐることに下の如し。

出寺盼西岑。暮光烟靄沒。人愁住翠微。情若望明越。百年帝者宮。今日龍蛇窟。幽懷恨不休。歸臥藤蘿月。和西山故人月字韻

聞道秋林好。來尋古寺閑。白雲深谷路。紅葉夕陽山。宿昔勝遊跡。今日往事閒。寂寥招隱意。惆悵共誰還。題神護寺

隔宿西山々又過。舊遊成夢遶藤蘿。風流次第年々少。離別尋常處々多。寒雨留人朝作雪。湖雲送客夜生波。采蓮不入長亭曲。記取仙家折柳歌。送人之信陽

高人住在白雲中。幽事關心趣不窮。茶竈澹烟初入夜。松門輕籟每緣風。詩吟五字題蒼壁。書閱千張對碧叢。只爲畫圖清絕甚。欲收行李問溪東。白雲山房圖

春來詩客意何爲。孤負佳辰掩竹扉。平宿梅花元有約。一庭新月待君歸。人日不遇人
日々吟詩空自過。村居無奈僻幽何。一庭樹色驚秋早。半夜江聲作雨多。和絶海和尚韻

隱逸新題隱逸情。淩芝服朮氣精明。壺中天地三千界。笛裏關山一兩聲。

偶作

槿碎咸陽黃鶴樓。謫仙死後沒人遊。似聞吞碧空遺跡。獨起白鷗滄海流。

吞碧樓

天地秋高木末風。空山獨夜思重々。夢回枕上人何在。月落一聲長樂鐘。

寄遠友二首

牛南馬北情何限。燕去鴻來信不傳。只道空山深夜夢。秋風吹入白雲邊。

同右

菊墅題詩傲一遊。再過無客竟雲留。賞心莫說今秋事。點眼恐成佗日愁。

菊墅卽興有懷其人

青嶂斜陽復白頭。鐘邊何處寫新愁。郭熙小雨風流後。惆悵無人倚晚樓。

青嶂斜陽

庭上茆花野興多。夕陽歸客欲如何。應須同被宿簷下。要是憑君夢薜蘿。

卒興一首奉留二友訪

別離三日合多情。露宿風凜客路行。只有別時猶記得。溪橋南畔獨分明。

和韻送人

白髮思詩誰似我。青雲失路獨憐君。殷勤陌上今霄月。尙爲中秋虧一分。

八月十四夜寄人

雇役經綸九鼎成。趙家王爵一絲輕。飢腸一夜鐘山雨。臍噓平生呂惠卿。

贊王荆公

江漢微雲五字吟。更無人解此間心。功名不到塞驢上。耆舊風標見至今。

贊孟浩然

世路風波灑滷堆。竄身今日喜歸來。何知見雪梅花下。相遇春簷一笑開。

次春雪韻因事

風攪寒林雪片飄。老松百尺偃岩腰。孤猿哀叫鳥相喚。似恨山人入市朝。

寒岩猿鳥圖

偶從松下携琴去。還向梅邊得句來。人家隔在垂楊岸。一簇炊烟映酒旗。

四氣屏風圖

籬中秋菊自交加。卽是柴桑處士家。夜吟故燒紅燭看。如何未睡海棠花。
天外秋風送雨聲。故人今夕易爲情。一枝丹桂有來意。立倚南樓到三更。
老去逢人懶說詩。春來事々不伸眉。到頭心似黃昏月。縱在梅花又暫時。
秋樹暮鐘烟靄間。斷橋流水自潺湲。高人意在幽居遠。罵看亮公會隱山。
山禽心似野僧心。自去自來人不禁。廣狹相忘籠亦好。乾坤一夢掩雲林。
人家都住盡江頭。僧宇獨依松桂幽。待我送書天錄後。一竿明月掃扁舟。
書籍使

同右

中秋謝人惠木犀

謝人送梅花

秋樹暮鐘圖

籠鳥

金澤古寺師受相公命爲

嵐際山花滿眼新。情懷渾廢雨中春。傷心休問曲江事。小苑碧桃空水濱。

乙亥上巳宿西山。情懷

蕭然矣。童子題小詩乞改正。因和其韻。

山下卜居金背山。窓含嵐靄夕暉殘。莫言道者殺風景。却似潘郎驢上看。

嵐光軒

露艾風蒲作意新。孤忠休說楚江臣。扁舟夕浪三年夢。白髮飽看報國身。

端午寄武州閣下和州陳

中作

鷓鴣雪消簷溜清。風池水與御溝平。恩波不隔山人抱。泛得詩瓢一把輕。

御溝春水

無數白鷗回碧潭。一叢黃菊倚松陰。世間未有真如此。只合高人到處心。

松菊齋

一叢々白一叢月。三徑々荒三徑秋。若使逋仙看此景。又言疎影暗香浮。

月下看菊

夕浪流澌飛白鷗。輕寒衣薄立芳洲。云々不盡朝宗意。莫是春愁客泪流。

春水

第九章 惟忠

第一節 傳記

義堂の後勁となり、太白・仲芳・觀中等と應酬し、一時室町上半期吟壇に主たる者を惟忠と爲す。釋通恕、惟忠は其字、別に雲緊道人と號す。建仁の無涯(仁造)の法嗣にして學内外に通じ、衆の稱する所と爲る。應永十年越中金剛に請せられ、明年安國に住し、十七年建仁に移り、尋いで天龍を経て南禪に據り、後常在光院に隱居す。叢下の士庶歸向するもの多かりき。永享元年九月二十五日寂す。年八十一。

義堂嘗て惟忠が爲めに字説を作る。曰く、東山恕藏主。釋而通儒。故其文字章句。往々有可觀者。一日訪予。出故妙喜老人著惟忠字説。且求爲第二説。予既讀之。且謝曰。妙喜大手筆。以儒釋之道。忠恕兼説其義盡矣。復何説。惟忠索之弗已。乃以忠字析爲二。而釋之曰。忠中也。心也。夫中心者。非世之所謂心也。佛祖所傳妙心也。中

也者。非世所謂中也。天下大本之中也。大本故無道不歸焉。妙心故無法不攝焉。推而廣之。在儒氏也。仁之義之。禮之樂之。而皆不出乎是大中矣。在佛氏也。戒焉定焉慧焉。是三者學。皆不離乎是妙心矣。統而一之。則惟中惟心。心猶中也。中猶心也。曰惟中而已矣。曰惟心而已矣。斷々乎儒于是。佛于是。則忠也恕也。亦皆在其中矣。於是惟忠笑曰。第書此。不亦爲惟忠說乎。姑書爲惟忠第二說。次于妙喜之後。(見空華集卷十五)

義堂の日工集應安五年十二月七日の記に云ふ、恕藏主出近作求改。餘因說曰。凡述作之妙。在自然不見斧鑿之痕耳。刻意巧妙則不可也。と。所謂恕藏主なるもの蓋し亦惟忠を指して言へるものなるか。義堂又惟忠の居室白雲丹壑に題して曰ふ、

白雲丹壑詩并叙

東山釋惟忠恕上人。扁所居室。曰白雲丹壑。蓋雲取其去住無心。壑取其虛而能應。道人苟內以無心。外以虛應。何往而不可哉。上人出紙。需予作歌。歌則非能。詩以代歌。填紙歸之。果得雲壑之趣。歌也詩也。詎有二致。其詩曰。

白雲丹壑道人居。未必山林與世疎。去住如雲元不繫。身心似壑自然虛。遠公蓮社秋風晚。常老松華夜雨餘。但得此懷成一種。人間何處不吾廬。(見空華集卷九)

惟忠義堂に寄するの詩あり。

和希白業藏主韻送安石歸梅洲兼呈錦屏義堂和尚

京華風月白頭吟。歸問梅洲在即今。我思千端收亂緒。君交百鍊試精金。雨聲一枕三更夢。燈影虛堂萬里心。想見錦屏相訪日。冰厓雪谷一冬深。

嘉慶元年惟忠南遊して一溪、淡路を経て讚の善通寺に至る。途中一と詩を以て之を紀す。

山邊秋雨弄晴陰。一錫南游萬里心。前路悠々重回首。天門咫尺五雲深。 丁卯秋自京往山崎途中值雨

赤旗何去雲迷浦。玉輦無歸日落西。野客不知興廢事。惟看沙上鳥双栖。 一溪懷古平氏敗績之地

空華集卷四に云ふ、東山惟忠恕公記史。禪文兼熟。而與余最善。以丁卯秋。暫別爲南海游。出紙求語。其興不可挽焉。拙偈奉贈。以資再會談柄云。上人去作海南游。明月珠應滿袖收。他日歸來呈似我。遶天索價卒難酬。

第二節 著述及詞藻

惟忠の著述は語錄繫臘概と題する者三卷一冊及外集雲壑猿吟と名くる者一卷あり。繫臘概原稿今尙藏して建仁寺塔頭大中院にあり。明治十九年修史局編修星野先生採集、謄寫して今史料編纂掛にあり。

雲壑猿吟は已に續羣書類從に收められ、近く又五山文學全集第三輯に出づ。詞藻は専ら此篇に就いて見るを得べし。

雲壑猿吟一卷悉く詩にして諸體皆備はる。措辭流麗暢通文を誦するが如く、毫も跼踖艱澁の痕なく、頗る禪偈の氣習に遠ざかり、純雅の詩什として唱すべきもの多し。體格略義堂に近くして力稍や及ばず、且其律詩中頗る佳句誦すべき者に乏しからざるも通體響亮なる者は少し。今編次に隨ひ其中最も合作と稱すべき者のみを列舉せん。

先づ古體にては賦春樹暮雲圖寄日峰朝首座の一篇を取る。

樹色蒼々雲漠々。乍見新圖多所思。旅食京城三十載。春風又動渭樹枝。試開青眼向宇宙。宇宙茫茫少相知。有美一人何處所。江雲飛盡江水涯。磊落之姿無塵慮。口吐天語多新奇。神交久矣忘形跡。不待盍簪罄幽期。菲堂雨聲燈華夜。柴門日色鶻噪時。但覺觀娛越少壯。望不見兮夢見之。朝と誦すべきなり。五言絶句にては、

會忍十年別。那堪兩地情。石城潮已滿。洛水月初明。

寄無白外史在關西

六言にては、

吾愛先生性癖。看山獨步斜暉。歸路雲粘双履。舊房風拵半扉。

青山獨徃圖

五律にては、

片々橋邊雨。陰々夕未收。漁簑迷斷岸。僧磬度中流。寂寞荻花晚。蒼茫菰米秋。可憐清淺水。間殺一沙鷗。

七律にては、

山中一臥十年強。別後偏知歲月長。李白春愁渾似雪。麻姑秋髮更成霜。吟詩隴上殘雲白。采藥溪邊暮雨涼。驚枕無端幽憤發。移文寫罷月蒼々。

寄山甫侍者

健叟幽廬萬竹青。春陰寂々鎖林扃。日斜野鳥啼還歇。泥濕蒼花落更馨。盡謂地中埋玉樹。那知天上

春日過健叟舊居乃玄憲法印也

有文星。淒涼三十餘年後。楚些臨風吊獨醒。春日過健叟舊居乃玄憲法印也

寄竹隱嚴藏主在海東

永宵獨坐漏聲遲。天末佳人不可期。憶著舊遊渾似夢。拈來新恨卻成詩。秋深江上魚龍水。月照林間鳥鵲枝。此地向來幽興熟。霜餘莫放鞠華衰。

送德岩藏主北歸次韻

七絶にては、

佳人別去在金華。悵望眼穿西日斜。布衲芒屨從此逝。山雲深處拾松花。

寄耕隱侍者

薔薇易地宜春雨。會見薰風花發時。濯手曉來枝上露。願言細讀故人詩。

移薔薇

扁舟只解汎滄浪。幾日歸來洛水陽。可想舊遊三徑靜。數竿新竹過人長。

寄至均侍者得長字

遊學年來無定蹤。一巢尋得舊青松。禁山風月三生夢。驚起長安半夜鐘。

(禁山可心
受業之地)

關々白鶴慣高飛。處士扁舟湖上歸。知是孤山訪梅客。晚來和雪叩幽扉。

孤山放鶴圖

江左佳人我所希。扁舟去欲叩幽扉。秋風吹送蒹葭雨。一幅蒲帆濕不飛。

秋江聽雨憶江東故人

金錫高飛何處去。布帆無恙幾時回。秋風獨倚東籬下。餘看黃花十日開。

送瑤藏主東游

鶴去緜山月色荒。吹笙幾醉紫霞觴。蒼姬八百年天下。不及僊家一日長。

贊王子喬

迴看一曲野塘中。柳色淒涼菡萏紅。最是關情塵外客。漁竿曩々倚秋風。

小塘秋景

遠遊齋志是耶非。雨雪千山更落暉。矯首天涯倦飛鳥。翻々認得舊巢歸。

倦遊

幽人小築在山陰。每擬扁舟雪下尋。夜雨不知愁似水。溪流添得幾竿深。

寄越山芳仲書記

林間散策步遲々。避暑歸來薄暮時。月在梧陰涼似水。無端拾得一篇詩。

晚涼散策

亂後江山思不禁。遲々猶戀舊園林。九峰鶴唳天風外。應有飛騰萬里心。

招山陰故人(因州
亂後)

山路尋花日々頻。緜衣爲避軟紅塵。從教化蝶今宵夢。飛遍長安萬里春。

尋花

關西戎馬暗風塵。割據皆稱社稷臣。吞碧樓邊回首看。山雲海月屬何人。

送僧之關西

野處天然宜種梅。瑤寒粉瘦數枝開。前村孤客有詩否。又是黃昏衝雪來。

梅華野處

經年群國未休兵。那處雲林寄此生。只恐白鷗眠不穩。春風江上鼓鼙聲。

寄江左故人(已卯冬在大
內泉南大塚
之後)

數片江雲濕不飛。夜來爲雨滴芳菲。明朝春水深多少。應有遊人一棹歸。

春雨有懷江東故人

客子懷歸天一涯。京塵粘履步遲々。江山無限別來意。吟斷暮雲春樹詩。

明窓聽侍者東歸

畫掩松門敲不開。出遊想在白雲隈。徘徊暗與心相約。他夜携琴月下來。

山中尋人不值

白賁如何揭小軒。冥搜袖手倚黃昏。眼中歷々先天易。繞屋梅華雪滿村。

梅雪白賁軒名

清曉梅花那處尋。一枝初綻倚岩陰。不堪折作江南信。聊寫歲寒冰雪心。

題梅圖寄遠友

江東有客倦淹留。送上關西萬里舟。一席清風吹得去。月明潮落石城秋。

送關西之行

家在孤山鶴未來。掀篷雪景最佳哉。年々一度春回後。吟落湖邊幾樹梅。

和靖掀篷梅圖

風攪虬枝松瑟瑟。天開蟾窟月娟娟。詩書幾帙明窓底。日夕游心太極先。

書齋松月

風吹礪水答長松。日夕山房興味濃。一句無端坐中得。秋蟾飛上最高峯。

松風礪水圖

試に集中の佳句を擧ぐれば五律中にては、次韵答金華仲方長老見寄の梅花吟處月。楊柳別時霜。題水竹佳處の竹光含夕靄。山影映春流。の如きあり。七律にては、和希白業藏主韻送安石歸梅洲兼呈錦

屏義堂和尚の雨聲一枕三更夢。燈影虛堂萬里心。和龍湫和尚異域間吟の秋深薜荔千巖底。月冷芙蓉一水涯。送汝霖佐外史の一江秋冷魚龍水。萬里天高鴻雁風。悼寶山上人次韻の宿草淒涼殘雨底。孤雲縹緲晚風前。與南隣仲方伊藏主夜話の松聲酒遍風千湖。竹影篩殘月半塔。和龍岩侍者病中述作之韻の窓間燭影秋風裏。城外鐘聲午夜初。寄心華首座寓城西次韻の庭花雨暗春心懶。欄竹風微午夜間。鈞文侍者遊城南不告而別寄此戲之の山中竹樹常多雨。江上蘆蕪半送春。亂流橋の千山雪送江頭浪。兩岸梅開水底花。寄關西俊侍者の北渚風聲連去雁。西山日影帶歸鴉。和韻賀遊叟侍者書室新成の散帙聲殘山雨濕。寒簾影入墟雲遲。の如きあり。帯びて晚唐の餘音あるを覺ふ。

繫驢概は全く法語偈句に屬して茲に收むべきものなきも、唯だ左の佳作一篇は採録せざるを得ず。
秋蟾半沒九霄雲。今夕陰晴未可分。禿髮寒山何處所。題詩巖上剝苔紋。
和義堂和尚中秋韻

第十章 古 劍

第一節 傳 記

釋妙快、字は古劍、其姓氏本貫を詳にせず。蚤く夢窓の記を受け江海に萍遊して諸知識に請益し、又支那に入り、恕中楚石穆庵に謁し器許を蒙る。貞治四年歸朝す。舟中結制日に値ひ偈を賦して曰く、

圓覺伽藍海中漚。安居禁足渡頭舟。蠟人解唱還鄉曲。欸乃一聲山水幽。と。既に洛に入りて龜山に寓居す。時に光明上皇伏見の大光明寺に在り、劍を召して法を詢ひ賜賚相續ぐ。劍奉謝の詩あり。風書飛入薜蘿門。五色凌雲意轉尊。始見千鈞全筆力。秋毫惟重敢忘恩。(題曰。山詩奉謝天。書并御筆之賜焉。)推出青天日一輪。五明輝映九華春。從今足障紅塵起。始信仁風克及人。(題曰。奉謝伏見太上。皇帝賜扇畫有日輪。)又一日官茶及御製の詩を賜はるや、劍御韻に欽和し奉謝して曰く、春風煮雪吐香奇。碧玉甌中水一枝。白髮野僧從睡起。薰爐日暖讀新詩。と。

已にして等持に遷る。法兄義堂鎌倉より賀詩を贈る。

賀古劍快首座遷住京等持

瞻彼長安北斗邊。劍光赫々夜衝天。便應變化爲龍去。雲氣油然雨大千。

又次韻贈諦觀中歸京三首の中に和等持古劍と注する者あり。曰く、伽陀滿幅寫溪藤。尙憶巖頭罵老曾。山店寒驚三尺雪。夜床夢斷十年燈。期君去作人天主。願我長爲粥飯僧。拭目他時看變化。龍門躍出浪三層。

應安六年明の天寧の仲猷瓦官の無逸、明使として來り、將軍義滿に謁するや、義滿明の高僧を招致せんとし、劍代りて書簡を作り、使者に托して恕中に寄す。其文左の如し。

上恕中和尙

某獲侍左右極久。多承開導之恩。豈敢忘焉。近因仲猷無逸二和尙枉臨弊國。宗教可勝輝耀。伏審暮年道力彌堅。尊候動止萬福。爲慰。某奉別渡海。雖周折多勞。賴庇幸無大患。自歸國以來。凡事仍舊隨緣自遣耳。不意近年忝主官寺。應酬日多。學道日曠。每念昔日師友講明見聞之益。不復可得。未嘗不引領嗟嘆。茲聞中國皇帝初定天下。內外一家。往來無間。雖老朽而南遊之心猶未息也。然二和尙奉旨來此。官府緇白。同心傾仰。本欲各請主大方。二和尙自謂。不曾有旨計留外國。苦辭以歸。官府豈敢違命強之。今茲官遣某人。奉使中國。仍請碩德宗匠一二人。來此傳道。因以和尙道德聲譽。達于上官。官瞻望極切。況知和尙舊有夢遊日本。此必宿有緣契。伏望不忘前緣。慨然而起。以廣度生之願。某當終身供給走使不憚也。椿庭回言。和尙曾付教帖。遂爲洪喬所洗。奈何。巽上主陪二和尙而去。必造函丈。代露細詳。意長紙短。伏冀尊察。不具。

永和四年臨川寺の陞されて五山の列と爲り、龍湫の入院せんとするや、古劍慨然起つて其舊制を破るの不可を論ず。義堂の日工集此年五月晦日の記に云ふ、圓覺使者回自京城。余得等持元章及諦觀中書。書曰。去十四日大光明古劍首唱恢復臨川爲十刹舊制。清溪執筆作狀告官。因山林辨道者應古劍唱而出。署花字於狀末者無數。已達官府。未有報者。且請關東門徒。急急連署。同心請復舊制云々。其訴

狀告文左の如し。

臨川寺訴狀

右靈龜山臨川禪寺。蓋開山夢窓國師。親自元弘年間。迺都督王宮之遺址也。初承後醍醐天皇敕旨。宏開招提。而萃五七百衆。能生物善。能振宗風。是朕之志矣。而捨王家之田園若干。以資寺費。國師辭謝云。巍巍寶刹。鼎鼎叢規。天下自有五禪之名蓋在。昔趙州不盈二十衆。汾陽惟六七人耳。其豈愧於五七百耶。今建斯寺。不營法堂。其無他矣。但棲枯木衆百員於一堂。以疎淡爲趣。而共醇味。未多讓於趙州汾陽保社。其於二利。不亦虛耳。既而限制一邑之田受領焉。量入爲出。而二時優贖。四序盛設。無一缺供。罔或自靳。尙慮後之來者。喪本而徇情。以積祖宗之弊。手書寺所當行之規制。目曰臨川家訓。藏在于三會塔。茲本寺衆不量議。反求列于五山之班。既新法堂。兼容介衆。遽忘先訓之責。終昧自己之心。門下縱令得有名位之長老。是所謂扶宗乘報佛恩者歟。未易知也。矧乎寺改舊觀。僧陷今時。道業日日廢。魔孽時時興。名是而實非。損益果何如。法運固季矣。少室正僉。若一縷之懸千斤。未卽斷者。時容坐視哉。投訴於大檀越之前。切冀鈞旨委下公憑。復還本寺於諸山之位。安百員禪侶於枯木堂中。以堅密道力。每自鞭策。光揚先蹤。激進後輩。則法燈得再續。祖風行可追矣。唯大檀越高明察鑒。遂此誠請。某懇訴所以伏乞哀念。謹言。永和戊午月日。

是に於て京中の門徒争分水火の如く、絶海觀中元章天錫等皆劍に應じ、更に書を相陽の義堂に寄せて援を求む。義堂は其黨を結ぶを惡み、避けて應ぜざりしも、遂に春屋の出でて調停するに至りて、臨川は十刹の舊制に復するを得たり。已にして義堂の京に入るや、劍之と往來唱和頗る相親善なり。康曆二年夏劍臨川に至り、先師夢窓設くる所の篩月軒を追懷し、其舊韻に追和して、

叢林千古傲霜竿。引得清風滿世間。留此陰涼明月夜。軒中人在定中閑。

の作あるや、堂之を方丈に訪ひ爲めに和して曰く、劫灰重掃建幢竿。談笑功成厦萬間。篩月却添階下竹。工夫那得暫時閑。と。劍尋いで東光に在り、日工集十月八日の記に云ふ、古劍自東光至。前月借余所假作艸葉。今自持來。又欲借一冊而觀之。余爭止之。劍遂戲奪取而去。と。又其永徳二年正月十一日の記に云ふ、赴東光古劍之招、時會者玉堂將作・土岐宮内少輔・山名民部。古劍出新年試筆七言八句詩。和者十九人。と。十二日の記に、和胡字八句。寄東光古劍。と。十四日の記に、兩歇而陰。午後晴。連和胡字三首。戲答古劍。と。十五日の記に、古劍復和胡字三首。余又和三首。是夜以無油故。戲及東壁隣光。云々。十七日の記に、巡賀。蘭洲及古劍至。不值。古劍復和胡字。留而去。余亦和者三首。と。十八日の記に、府僧。請南禪長老蘭洲。時古劍復至。戲話商榷胡字和章。古劍出送昌善省母八句者。予和之。予與古劍以詩戰。且云足成十偈而止可也。古劍舉舊作曰。塔前班竹今朝泪。

壁上毒苔舊日詩。龍湫所欲伏也。と。廿九日の記に、古劍至。以胡字諸作與余講明。余改數十字。と。廿九日の記に、預設尊氏諱。請龍湫。話及胡字和韻。と。兩人詩戰の盛想見すべきなり。惜むらくは劍が作今傳はらず。唯堂が空華集に於て其戰況の一端を看取するに足るのみ。

古劍新年試筆偈和第二十韻十首有敘

余少時耽詩。嘗在關左。用城雷峯三韻爲八句詩。和荅友人者。殆乎百篇。好事者雅爲詩戰。逮年稍長。銳氣銷磨。乃痛悔前非。慎防口業。不復從於戰事矣。會庚申春。來釐下。後三年。壬戌歲首一夕。忽被東光右劍老禪將以胡字韻爲突騎。襲我不備。其鋒不可當。而避之無計。窘不奈。揭竿爲旗。剡蒿爲矢。三戰三北。而乃降矣。遂收其遺矢墮鏃。束爲一包。奉納。呵呵。

甲子推窮到大初。笑他水牯老於吾。相逢且問年多少。特地休論法有無。畫餅充饑圓似月。燃燈授記驗同符。伽陀寫出虛空紙。字字看來說不胡。

逍遙直到物之初。天外出頭誰是吾。色裡膠青元自有。水中月影本來無。孽開俱抵三行咒。焚却王公十道符。每憶古人好言語。子房兩眼似愁胡。

諸佛衆生同一初。此中何物是真吾。新年老去送迎少。舊話拈來賓主無。東土釋迦看出世。南柯太守夢分符。早知天地爲過客。留滯休將歎賈胡。

萬里南詢憶最初。輸君一步早先吾。不知童子再參日。還有文殊伸臂無。祖祖傳來何妙訣。人人肘後即真符。春風昨夜吹殘雪。白髮相看兩矮胡。

上元座向暝鐘初。東壁隣光喜及吾。祖室千鎧從此續。油餅一滴弗愛無。詞章麗似宜春帖。號令嚴於玉帳符。莫放神鋒輕出匣。邇來識劍少風胡。

天龍垂示記當初。密意憑君說向吾。一指頭禪應不盡。先師此語敢言無。痛嗟達磨單傳印。變作蚩冷小篆符。今日相逢只仍舊。免教魯婦怨秋胡。

機鋒肯讓洞山初。椰子身材大似吾。粒米向來元不畜。人烟何處到頭無。三年竊食城中寺。再命叨膺幕下符。唱和心降先罷戰。修關不用更防胡。

老我鈍根機尙初。箭鋒豈復擬支吾。只將妙唱供三歎。休把禪談問十無。似鷹過空那有跡。如蟲蝕木謾成符。傍人冷地看應笑。十字街頭舞麼胡。

憶昔少年村學初。讀書窓下試羊吾。老來活業成何事。空裏浮華畢竟無。敢負詩名齊越徹。自甘性拙類韓符。南能元不解文字。喚梵何妨便作胡。

永德二年正月初。空華了幻尙存吾。兩翁共學三分話。十偈相酬一字無。點檢床頭仍舊曆。笑看壁上又新符。等閑打破虛空縫。釘得還他釘鉸胡。

義堂劍に勸めて建仁に住せしむ。乃ち同年三月廿二日の記に云ふ、過古劍於東光。而說話次。因勸以應世。劍不肯。余引古尊宿汾陽大惠等。初不欲住院。後皆出應。因舉大惠贈趙超然一偈。劍撫掌絕倒。云々。又爲めに義滿に推薦す。五月七日の記に、君問古劍可出世否。曰古人如汾陽大惠等。皆初誓不出世。後來事不得已應世者衆矣。殿下當堅請。出也得。不出也得。とあり。八月劍遂に建仁に入る。汝霖の賀疏あり。

古劍和尙住建仁法眷疏

東山暗號。三佛各定其宗。西河夜參。六人齊成大器。蓋同出之所出者。其一模之所鑄乎。某行峻而周。言嚴而密。移禪榻於楚月。染吟髭於吳霜。麗爭烟雲。光照臨川之筆。勢駕風雨。忽飛陶壁之梭。有其祖而有其宗。無是父則無是子。黃梅夜半。尙念衣孟之傳。紫荆庭前。難忘兄弟之好。願作後俊之領。來伸先師之言。

劍遂に建仁に入る。義滿、播州林田莊を與へて寺領となさしむ。是より義堂龍湫等と府第の間に周旋す。日工集翌三年三月二日の記に云ふ、建仁方丈(即古)西軒落成。同諸老袖茶相賀。余戲作一偈。臨飯和者忙忙地。月心飯中和。就余耳吟曰。義翁唱偈令人和。飯裏無端咬着沙。余不覺噴飯滿案。飯罷。和者殆三十人。長考古劍最後和。及途出門。舉似余曰。空生着得眼中花。遠逐春風不在家。今日

東山留得住。又談般若數恒沙。と。此笑話引かれて臥雲日件錄文安三年十二月の記にも見ゆ。又日工集同年八月廿七日の記に、講清規。古劍來自建仁。潜在屏處而聽。余戲以盜法之罪。とあり。此類皆以て兩人交際の狀況を審にするを得べきなり。又絶海曾て劍に贈るの書あり。

答常光古劍和尚書

正月梁藏主之往。奉書致敬。不知已達几格否。茲者選侍者到。出示正月廿六日書。就審高居清閑。無諸外擾。喜慰。小弟退藏不密。再履危機。敗在寅夕而不寤。汚辱法門而不識羞。是宜在識者謹絶而不赦。而和尚坐誨懇示。尙納之可教之地。對使發封。不覺汗流之浹背。慚甚慚甚。向在田里。竊謂幸不爲時容。巖穴余樂也。春秋二時。乘閑拉一二衲子。一舸北渡。拜謁林下。參學之暇。登山臨水。陶冶乎雲鳥之趣。以極宜月之歡焉。今不幸而爲時羈絆。池魚籠禽之思。不足爲喻也。蓋業緣使然也。惟老兄垂察焉。專伴去急。忽忽奉復。尙遠參侍。臨者不勝瞻戀之至。

此れ恐くは絶海の義滿の忌に觸れて攝州に隠れし時の事ならんか。又臥雲日件錄寶徳四年四月七日の記に云ふ、早赴攝州湯山。と。同十六日の記に云ふ、與三四輩赴鎌倉谷。此谷名鎌谷何也。梵誕曰實則纒羊谷也。訛曰鎌倉。蓋以倭語相似也。此庵本名掛角。亦取諸纒羊。又名佛谷也。正覺國師眞子雪江興庵主所創。爾後古劍亦住焉。山中有六境。劍所名也。と。了幻集に六境の偈あり。

佛谷六境

三間茅屋兩重關。一道神光也是閑。賓主機先相見了。白雲遮莫覆青山。	龍山
兩箇泥牛入海眠。遼天鼻孔不加鞭。難從百草頭邊覓。抹過春風浩劫前。	牛隱
一葉溪清百念冰。月隨流水下岩層。今誰直入山無路。折脚鑪邊訪箇僧。	一葉溪
千仞壁立與雲齊。到頂方識天之低。清清寥寥白的的。寒松霜夜孤猿啼。	千仞壁
鷲岩作佛嘆奇哉。踏着還知滑似苔。硬出頭來重撒土。嘉州大象咲盈腮。	鷲佛巖
白鷺振振照水飛。陰崖風定浪花吹。道人心地清如雪。正是虛空粉碎時。	振鷺瀑

古劍和尚住建長同門疏

前建仁古劍禪師。欽奉准三宮征夷大將軍鈞旨。住持相州府巨福山建長禪寺。凡我同門之輩。不勝抃踏之至。聊作草疏胥賀云。

海上鉅禪叢。惟五福山稱寂。有海東法窟之名。擅天下禪林之美。烈々我祖。明々在上。厥后嗣主。峻德弗彰。近古以來。雖有一二。猶若長庚之繼太陽。吾輩視之未奈之何。共惟建長堂上和尙古劍禪師。德彰諸方。譽馳百越。允入先師室。用傳先師宗。克嗣我祖者。匪禪師而誰。昔常照開山鹿峯而

遷福山。其後廣濟不由鹿峯而爲福山。迄我先師。就鹿峯而拒福山。今又禪師拒鹿峯而爲福山。考之僧史。大惠果禪師由育王遷徑山。其子佛照爲育王。照之子澗翁遷徑山。照之孫物初爲育王。初之子晦機亦爲徑山。機之子有廣智。其派沿々。視之古則如彼。視之今則如此。天之攸命。僉曰弗替。往欽哉。用率視考攸行。

晚年天龍の壽光庵に退居す。其生死年月共に詳ならず。但義堂絶海等よりは稍や後輩に屬し、太白仲芳等よりは稍や前輩に居るが如し。蓋し觀中等と共に當時群衲中にありて特に奇骨を具し氣概ありしものなり。義堂嘗て之に寄するの詩あり。

次韻寄古劍快禪師

秀氣衝天古劍翁。誰能具眼辨雌雄。三千里外分携後。二十年來一信通。大樹陰成思濟北。暮雲句好憶江東。遙知落筆高堂上。鬼哭啾々白日風。(空華集)

是れ蓋し善く古劍を知る者の言なり。

第二節 著述及び詞藻

古劍著す所語録の外了幻集あり。其偈頌題跋書簡を編したる者にして、寫本を以て建仁寺兩足院に藏せられ、修史局傳寫して今史料編纂掛にあり。二冊なり。近く又收めて五山文學全集第三輯に入れ

らる。別に入元の諸作を蒐めたるものに扶桑一葉と題するものありしといふも傳はらず。又彼の義堂と詩戦の篇什の如きも今索むるに由なし。之を總ぶるに、古劍の純粹の詩稿は全く散逸せしに似たり。

古劍の才藻は高僧傳も之を稱せり。日工集永徳二年廿九日の記に、古劍又話曰。嘗回自江南。海中值結制日。作偈曰。圓覺伽藍云々。已或至康穆庵處。誤舉此偈。以解唱作喚作。穆庵曰。必誤矣。非

古劍語。喚作字不好。云々。と。其賞識を得しこと此の如し。今僅かに了幻一集に就きて若干篇を選録し、以て其詞華の一端を窺はんとす。

卷頭先づ二偈頌を看る。

薔薇含露曉初開。惹得薰風匝地來。莫是時人見如夢。青山雨後碧崔嵬。

佛誕生

月落瑤臺曉半開。木鷄啼斷有餘哀。殷勤寄語梅花樹。一曲春風歸去來。

和韻佛涅槃

乃ち偈語たりと雖も句句瑰麗非凡なり。

十里湖山錦作堆。花紅柳綠步瑤臺。六橋春水天開鏡。不着人間半點埃。

淨慈

洞門春鎖日沈沈。公道誰論白髮心。獨立時窮千里眼。亂山高下五雲深。

寄伏見黃門相公

每向西山憶亮公。禪餘立盡夕陽紅。忽然得箇眞消息。一鴈秋聲落木風。

和韻答傑藏主

白髮重逢一喚新。秋風吹轉却壺春。庭前殘菊分寒色。滴滴清香也醉人。

和韻答宗遠見寄

雨外清光何處圓。令人翻憶老南泉。玉階夜色秋如水。白雁新聲渡海天。
故人一別各天涯。月落烏啼感物華。第五橋頭山欲雪。歸來舊隱看梅花。
萬松山下雨冥冥。花落春陰畫鎖扃。百鳥不來僧自懶。東風卷盡讀殘經。
獨坐茅齋待月來。山空一雁只飛回。先春且得江南信。雪阻梅花咲未開。

中秋值雨
招故人

次韻春雨

折簡招伯英而不來賦此

送之(寄傳江南故舊書)

凌波仙子下蓬萊。一吹春風夜訪梅。物外相逢無半語。水精宮殿月徘徊。

謝人惠水仙花

雪霽海天圖畫開。臘前春自洞中回。佳人睡起花如雪。淡掃蛾眉破玉腮。

臘八次韻

萬里無雲水似天。知心獨計老南泉。越江深夜秋光淨。誰在蘆花一色邊。

秋月

近江春水綠依依。淺蘸青天白鳥飛。曾記登臨山欲暮。憑欄空翠濕禪衣。

題近江依綠軒(尚上主求)

此類其最も誦するに足るものなり。百人一首には招故人の一首を取れり。若し其自在に偈句を使用せしものには更に妙趣あるものあり。

盡日無人作對談。莫云春樹望江南。夜深細細茅簷雨。滴碎須彌一二三。

次韻春雨

一毫端上逞神通。妙用全歸掌握中。吸盡西江秋似水。等閑點破太虛空。

示筆工之江南

嶺上白雲圍我床。門前流水爲誰忙。跣趺燕坐那伽定。百鳥不啼春晝長。

和韻無得首座山中十題

(坐禪)

浩浩乾坤日月圓。推窮太極未分先。連山紅樹秋風老。詎識四時元不遷。

大易道號

山齊擁雪忍寒時。竺國佳人入夢思。和氣纔生從地底。先春獨計老梅知。

雪山齋

憑欄翫月話同參。不覺袈裟濕曉嵐。莫怪清寥無一味。虛空開口作玄談。

和韻西泉西堂

雲間犬吠月明時。六戶玲瓏眼似眉。二十年來江海夢。幾隨宿鷺下雙池。

懷江南(三首之一。天童)

又偈歌の諸長篇筆力矯矯頗る見るべきも、偈語甚だ多きを以て今唯左の一篇を録するのみ。

月澗歌爲瑣侍者

銀蟾冷浸碧潭秋。上下交徹金波浮。萬里無雲河漢近。道人漱玉臨清流。眞照不流光烜赫。眞流不動亦
照廓。大圓鏡裡萬象空。落落靈機洞靈覺。君不見獨超物外老南泉。信脚踏斷玄中玄。到底誰分泥水路。
千江東注還依然。昨夜邂逅寒山子。話別靈山已久矣。把手浩歌歸去來。白鳥蒼煙盡知己。月兮澗兮
涉風騷。八萬四千毛竅無塵勞。明歷々兮孤廻廻。好在流傳曹溪正脉之滔滔。
古劍の文章は上已に引用したる所によりて略ぼ其筆力を窺ふべし。今其稍や體裁を異にしたる一篇
を擧げん。

移竹詩序

古之愛竹者。未有若子猷之勤者。字之曰君。謂此君一日不可無。想其所以愛者。莫非剛然而直其外。洞然而虛其中。君子可比德者也耶。予居東山之明年夏五。植竹於方丈西軒。正色蒼然。風雨常說。盡是真如。雅有野趣。徜徉其間。自謂言。我所以愛者。異手晉人之所愛也。昔番陽淨惠師侍予於湯藥。起而問其所以異者。予不答。既而惠師告於羣玉林文雅者。同賦移竹詩若干篇。以爲軸。求書所以前之不答。以爲序。予曰。序則非吾所能者。姑釋其義也。昔香巖侍馮山。有問其疑。而山不答。嚴乃退入南陽。掃數椽間。拾礫一擊。頓忘所知。當是時。固不知我之爲竹。竹之爲我。是謂之物我一如之玄理也。若乃墜晚節於歲寒。但以孜孜於道爲念。則又安知不期然而然。子可不勉諸。臥雲日伴錄享德三年十二月廿六日の記に云ふ、喜隱瑞雲來訪。話次曰。古劍弟子梵隱西堂。述作略有師法。劍爲之作惟玉歌。惟玉其號也。歌末有斷絃無續之語。伯英亦作惟玉說。因曰。古劍入唐名宿。能知述作之法。今於惟玉歌。宜有規祝意。然此語似不佳。不知預知隱不可有後乎。隱果一命而止乎。无一人相承者也。と。所謂惟玉歌今尙了幻集中に存せり。

第十一章 太白

第一節 傳記

古劍仲芳等と略ぼ同時に太白あり。名は眞玄、太白は其字、別に暮山老人と號す。(燕京軒日録に曰く、徐翁編其寮曰暮山蓋暮者慕也。慕一山之義云々) 姓氏本貫を詳にせず。太清の鍾下に於て大事を究む。博涉廣見、辭華挺秀、屢々諸刹に遷る。惟肖其法雲に住するを賀するの疏あり。

太白玄首座住法雲三疏江湖(三疏、山門、諸山、及江湖是也)

傳曰。不用賢能。有國者恥也。方今良共治。而吾教興榮。千載一時矣。播金華山。偶闕住持。乃命南禪前板太白玄公主之。山川之勝。輪奐之美。固足以延賢而展用。矧出名父門。登乃祖席。非幸之又幸也耶。公篤行雄文。稱于江湖也久。望陶冶者。頗以柄宗後時爲懣。於是知其有待爲。王臣鑒裁之精若此。於乎盛哉。凡士之中選也。吾黨儼詞以侑駕。飾德以褒能。日出公筆亡慮數百。於其行也。可默止乎。緝詞致賀。

曹源道得玉山物興。于今仰斗。寶覺門繇雲頂大振。與昔同符。於焉有託。所以無虞。某碧梧紫鸞。華岳秋隼。清畏知有此郎。罷白受采。生它寧馨。流播區區文章。人皆錄其細。而不志其大槩。舉卓卓節操。我將求於古耶。何得於今。雖素公不負慈明微妙喜其奈濟北。金華幾千仞。足稱雅致高標。錦水尺五流。不阻從遊夢想。效燕雀之喜躍。憑鷗鷺之知聞。名呼謫仙。世間有賀秘監之誠。義動君子。江海豈無謝客咒其人。

仲芳其實林に住するを賀するの疏あり。

太白和尚住寶林諸山疏

卿雲之出。甘露之降。異則異矣。不能濟於生民。神雀舞庭。鷓鴣食園。靈則靈矣。而未稗於教化。然而古之人。大篇文章。妍詞雅論。以頌時君之休聲。以國政之美蹟。矧在密贊陰翊之功。表裏王度者乎。歲之戊子。一位大相公。丕承鴻烈。手秉化鈞。神人洽和。怨氣銷鏢。天地中間。熙熙皆有生意。百揆之暇。留心真乘。住持之撰。最出至公。故代佛宣化者。角然挺出。以頌以歌。豈此一物之異。一禽之靈乎。惟我太白禪師。吾道元氣。斯文夏盟。身將不勝衣。雙臂任九鼎之寄。辯若無出口。一語破千言之牢。親入上相選佛棘園。雄據乃祖創業叢利。天下刮目。稱道揚揚。吾儕雖惜其逃遠。而目送還雲。聊助學者之(一)笑焉耳。

太白常に義堂を仰いで師友とす。義堂の没するや文を作りて之を祭る。其中に云ふ。楞散之材。驚登之技。幸逢師之斧斤。且蒙師之鞭筆。雖得宜於構榭侏儒。而僭譽於驕驍駉駉。今則不然。師其逝矣。雖騏驥何以展長途之雄。雖杞梓何以任天厦之寄。而況楞櫟驚駉。且騫且散。而不美焉者乎。此れ蓋し其實情、専ら視て謙辭とすべからず。

義堂に書太白藏主幽蘭小隱圖詩後の文あり。曰く、

蘭本生於深林邃谷間。則稱隱固宜矣。然厥聲終不可掩焉。則欲隱可得乎。矧令畫史幻於紙墨。而形容之。羣公播乎歌詞。而鏗鏘之。是深掩彌彰。所謂小隱云者。烏乎在。吁。

惟忠に桂樹小隱爲太白藏主作の詩あり。曰く、

一叢丹桂露初勻。天使秋香屬道人。松隱風流今已遠。恐遭樵子伐爲薪。

惟肖に寄玄太白的の詩あり。曰く、

鑽羽投林樾。何曾恨不平。平生唯飽叔。未敢愧虞卿。舊雨三年夢。新秋萬古情。亂山當落日。北望

是神京。

後東山の建仁に視篆し、應永二十二年龍山(南)の大周軒に寂す。

仲芳の懶室漫稿中の光祿卿紀公(長谷納言紀公之爲。世職國懸神。庶大祝。名宗傑。號大賢居士。)書堂詩序に云へるあり。甲第之傍。別築一字。環植梅竹教畝。四面爲之蔭翳。室內畜三教書數千卷。朝琴一張。酒器數事。陳列左右。而安一床于其間。終日危坐讀書。其倦也則命家僮。引壺觴。微酣稍發。自把琵琶。一鼓再再鼓。高歌古辭數闕。以樂其適乎。雖夫江州司馬放曠於香山之社。汝陰大守偃蹇於醴泉之亭。未必多讓其達矣。最愛釋氏。締交方外。東山太白師。稔其爲人也久矣。故命工圖其燕處。將募詩以寄焉。然則公必佛光之滿。圓通之訥。以待我太白師者乎。云々。仲芳別に南雲之什序あり。其傳中に載するが如し。亦所謂紀公

の爲人を稱道せる者併せ觀て以て太白世交の一端を察知すべきなり。

第二節 著述及び詞藻

太白の著述に語録及鴉臭集あり。鴉臭集は五山文學全集第三輯に在り。祭文送序及諸疏稿を收む。太白四六駢體を以て時輩に特絶するのみならず、汝霖絶海以後復た其比を求むべからず。蓋し太白の四六の仲芳の散文に於ける猶ほ絶海の義堂に於けるが如きか。一は高調雲霄を摩し、一は逸氣河海に横はる共に一代の大觀と謂ふべきなり。今試に鴉臭集中の疏稿數篇を取りて玩誦すべし。

在月岩住如意輪江湖疏(有序。今省。寺在濠州。)

越檜燕松。隆大厦之梁棟。殷湖周簋。肅宗廟之几筵。故掄人材其難哉。而任國器亦重矣。某價高白璧。音絕黃鐘。胸次卷海藏波瀾。眉間耀龍泉銜鏗。濟北一株大樹。蔭天下人。圖南萬里扶搖。非池中物。名覆金甌也久。力提鋤斧而行。轉如意輪從聞思修入三摩地。坐普光室。融等妙覺開十法門。振佛語之心宗。儼禪儀於禮典。滄海珠雪山草。人傑地靈。秋樹色暮鐘聲。山長水遠。

惟肖住栖賢江湖疏(有序。今省。)

王孝先之賦梅花。人皆知調鼎手。養由基之穿楊葉。世以伏良弓材。雖一吟一詠之間。得百發百中之選。某執交有道。疾惡如讎。滿肚竺貝乳章。揮毫隋珠和璧。無孔笛金春玉應。聽者耳聾。吹毛劍色

正芒寒。凜然眉宇。諸師謬讀雌霓。學者質疑元龜。辛勤三十年。辱予予之咎也。文字五千卷。於我蔑以加焉。匡廬地足以栖賢。傳野人矧夫惟肖。蕙帳夜鶴。遣別怨於此山。畫棟朝雲。想新題於南浦。

筠節叟住承天諸山疏(天授孫。雲興子。龍吟亦塔名。)

秦嶽雲興於觸石。沛龍有餘。泯江水始於濫觴。浩乎無屈。蓋澤優則潤溥。而源濟者流長。某眼隘九州。胸涵千古。工夫確實。解鐵胎銀之嘲。履踐精明。馳金背鏡之譽。天之授也。道有至焉。說法立三關。掃蕩影蟲小技。行道居一位。施呈陷虎雄機。宜盛瑞世他像。以膺承天嘉命。處則遠志出則小草。母判二名。東而啓明西而長庚。足分餘照。徃報牛耳。願聞龍吟。

絶海和尚住相國疏

日月出而螢燭息。人皆仰之。風雲從而龍虎騰。物相感也。蓋周邦雖多士。而晉陽爲一門。某濁水摩尼。頽波砥柱。五竺雲煙舊隱。虎斑難窺。三山風月新題。龍顏改觀。說法前宣室之席。回鄉錫昭陵之袍。正續的流。暗中亦知曹劉沈謝。心宗諸子。籃外孰不冲本秀夫。定惠等持。行藏從義。惟茲莊嚴之域。足致傑特之師。天寶而物華。宛然毘盧樓閣。門市而心水。從者賈父岐邠。克徇衆心。益慰舊好。

臥雲日件錄寬正三年十二月五日の記に云ふ、雲華院主來。因話。太白每製疏語。必就勝定國師(海總)

求證明。或時以使僧呈之。國師書褒贊語於來疏封紙而還之。今太白弟子西堂。表椅以珍之。予曾於雙桂亦然。と。之れある哉、良工の苦心固より徒爾ならざるなり。

太白の祭文亦長く後世に雄視するに足るものあり。

祭義堂和尚文(代建仁玉崗師)

維嘉慶二年。歲次戊辰。孟夏初四日。前往東山。後住南禪。義堂和尚大禪師。示滅於慈氏正寢。越三日。建仁住持比丘某。謹率清衆。肅設靈筵。備香茗時饌之奠。敢昭告以文。曰。嗚呼。師之存也。吾道所繫。學者有規。叢林有制。嗚呼。師之亡也。厥緒誰繼。文教爰喪。禮經爰弊。緇衣濫眞。誰正詭製。黃卷質疑。誰垂誨勸。平日風化。雷(闕一)一世。龍文悅推。王臣擁衛。其所董焉。威儀棣々。其所敷焉。英才濟々。或依於仁。或游於藝。沛然厥惠。薰然厥惠。羣衲嚮風。咸知造詣。禪樂更張。冠三代際。利我匪久。遂從此逝。咫尺龍門。徒望雲霓。歲次龍馳。疾將委脫。屏藥不御。身甚危脆。塵談如恒。遺訓後裔。淋漓墨痕。銘龜代偈。訃音聿來。竺履云瘳。實戢化權。輒歸眞誦。不見慈容。帳然雪涕。嗚乎。謂師蓋存。明月江霽。謂師蓋亡。白日雲散。存耶亡耶。日月無翳。叨承師後。豈無世禮。設位于茲。菲尊以祭。伏惟尚享。

祭絕海和尚文

維應永十有二年。歲次乙酉。四月丙寅朔。五日庚午。前南禪絕海和尚大禪師。唱泥洹於勝定精舍正寢。越壬申。南禪住持比丘某。茲率一衆。肅詣靈幃。謹備香茗時饌之奠。敢昭吾以不腆之文。曰。嗚乎。我師法道。唯世獨尊。明齊日月。大配乾坤。王臣所敬。舉動天關。四海龍鳳。皆出其門。相國之席。瞻如祇園。我山輕重。得師輕軒。能事既畢。戢化歸元。芭蕉堅脆。豈待佛論。所嗟濁世。其溺誰援。砥柱欵仆。狂瀾渾々。師之所蒞。規焉具存。師之所去。思焉不諼。於其機辯。白日雷奔。於其譚笑。青春氣溫。語言文字。其豈必繁。拾珠於海。採玉於岷。至其眞踐。誰能窺藩。茫茫天地。司南折轅。嗚乎。師之出也。長夜初暎。師之滅也。當晝俄昏。出也滅也。於師何煩。予此于彼。千江月痕。嗚乎。願師垂蔭于靈松根。願師流澤于玉泉源。靈幃爰殞。玄徒雲屯。一爐香沉水。以効采藥。伏惟尚享。

祭巽順中文

聞顏子之風者。雖千歲而人慕焉。蓋善之所以必有休祥。聞盜跖之風者。雖一世而人疾焉。惡之所以必有凶殃。一世而人疾焉。則壽也吾胡爲喜。千歲而人慕焉。則天也吾胡爲傷。然則惡而壽者。孰謂之存。善而天者。孰謂之亡。惟吾順中。風也可慕。德也可藏。希顏之徒。好學守常。於公無憾其死。於吾有悼其喪。吾甫十二。始游大方。禪林多士。爭執聲光。公時猶糴。吾敬而望。荊州一識。

吾願以賞。葭玉難倚。而於道而相忘。蘭金可比。而於義而相當。其室匪遠。每忝迎將。花晨月夕。尋詩盟於草堂。松風竹雨。同夜夢於藤床。讎書折讀。論文分章。謬則必正。疑則必詳。以磨以琢。草絃柔剛。謂曰莫逆。偕至老蒼。遽爾如許。疾嬰膏肓。白駒崇夢。黃鳥哀良。惟命不永。廿九炎涼。嗚乎。公齒同吾。相與顏行。吾弱而疾。公彊而康。恐吾先歿。使公惶々。不謂公歿。我回吾腸。彊者猶爾。弱者何長。水沫芭蕉。益增慷慨。自今已往。誰與交相。郢斧無斲。牙琴無張。已而已而。吾將退藏。嗚乎哀哉。黃河可防。而吾憂不可得而防。蒼海可量。而吾淚不可得而量。一碗之茗。一爐之香。明信以薦。靈其來饗。

普通の散文に至りては上諸體に比して稍や劣るが如きも、語句の間自から其精巧の步趨を見はす。

悼英玉淵詩敘

乙丑冬十月戊戌。玉淵英公盡于勢之旅館。越若干日。訃至。其友大峯上人。聞而慟甚。乃作詩吊焉。而同社昆季。慨然率和。皆公之久要也。有嘲于此者。曰。詩泗水徒鳴不平於一世也。誠非談三世者之所宜爲焉。彫蟲小伎。烏足以濟彼冥々之魂。況復倚語律之所製也。其不幾於擠之乎哉。余噓而解之曰。吁。惑哉子之言也。不可與言詩矣。夫吟咏情性。感動天地者詩矣。而性之與天。泗水之徒。不可得而聞焉。既不可得而聞。則有焉云者不也。唯靈山徒。見性明白。而目擊三世者。始可與言詩

而已矣。示清淨身於山色。演廣長舌於溪聲。黃花之鬱々也。翠竹之青々也。眞如理解矣。般若旨明矣。至矣哉其言之也。吾無間然矣。所謂見性明白者歟。所以在者視焉而證。沒者得而濟。豈其謂之擠之幾也耶。然則雖曰玉句金章。日載牛腰。而未可嘗製焉。至若不二交情於死生。而相期於世々。亦斯爲美。昔靈山徒圓澤者。善李原於三世。乃有詩云。三生石上舊精魂。賞日吟風不要論。此亦非鳴于一世者也。今上人言詩。蓋庶幾乎。因和而敘之。

遊鎌倉溪牛隱寺序

凡天之設名山大川於下土。不知其幾多。而隱顯系其居者之賢否耳。若惠遠之結社於匡廬。支遁之買山於沃洲。是乃居者賢而顯之者也。豈山之自顯乎。庚午春。余治脚疾於攝之溫泉。居無何。疾有間。偶携二三女生。游山西鎌倉之溪。路徑村居。行無十里之遠。而至其境。乃崇山複嶺。仙岩斗起。青松夾徑。白石圍流。漸過獨木橋。而闢牛隱之門。珍木名花。繡于面背。繪于左右。宛如遊神仙佳境。風骨冷然。不覺疾之在脚。不亦一奇哉。野衲三五枚。兀々隱蒲于枯木之堂。余徐々仍問其創業之早晚。與勝榮之隱顯焉。一衲之言曰。茲山未成之前。豺狼有宅。鴉樵無跡。某年雲居之徒名輪者。誅茅于此。爾來遠近嚮風。裹足靡至。山之美。於是乎顯矣。余聞而嘆曰。輪也。其賢老也歟。不然。豈天之設。無于古。而今有之哉。蓋人之賢否、山之隱顯。系焉也明矣。輒賦詩一章。聊紀風致云爾。浩

蕩春晴遊興催。吟筇破綠野橋苔。桃花夾岸尋仙隱。菜葉隨流引客來。水抱閑門青帶繞。山圍矮屋翠屏開。松間坐石逢僧語。日暮依依猶未回。

翠屏圍處敘

洛東之山。蔚而秀者。曰清水。其下泉甘而肥。以容千室之聚。寔尺五繁華之地也。吾弟諸無漏退而居之。而以翠屏圍處顏其軒。癖於山者也。客有過之者。曰貧哉居之名矣。抑山則近矣。而苟非我所。何得其所謂屏焉哉。門外也。則玉堂貴卿。五橋遊客。車塵馬跡紛如也。左也右也。則閭閻樸地。無一樓一閣。翠飛翼々然。不知其幾多也。亦不宜取山人之居焉。今之所視。不幾於盜隱之名者耶。無漏之言曰。子之所視。跡焉而已矣。今之所名。心焉而已矣。由捷徑於南山。濫幅巾於北岳者。跡也。門市而心水。鄭子遊之隱也。居郭而名山。沉賓王之隱也。子惡舍心。而唯跡之取耶。余產於信。長于中華。而遊關之西。而學焉。其青鞋藤杖之跋涉。殆二千里。青嶂丹壑。烟樹霧林。于今隱在吾目。皆我有矣。蓋得之於心。而外之於跡也。而況一清水之小乎哉。何盜之有。彼雲母月石。翡翠孔雀。珍則珍矣。止于圍華筵張高宴。而非分之宜也。又何羨乎。惟心之所得。取之造物者之無盡藏。而無禁者。翠屏焉耳。禪榻之暇。倚軒默坐。夕陽半嶺。濃翠列屏。信之山也。關之雲也。爲屏中畫。而圍几案間。不覺身在玉堂五橋之近焉。車馬之紛也。樓閣之多也。一皆塵焉。而不爲耳目之煩。若有物而問之。乃我翠屏之爲焉也歟。河東玄子。聞其言。而嘉心學之有在。敘而貽之。

贈明中藏主歸信敘

吾嘗讀韓文公贈廖道士飯衡序。云。水土之所生。神氣之所感。必有忠信才德之民。生其間。而吾疑斯言也久矣。夫人之爲生也。豈水土神氣之所能系乎哉。在性之所習焉已耳。故周邦多士。而傳子魯矣。雖山河百二之高壯。而秦無人矣。蓋周孔遺風。而嬴氏苛政之使然也歟。戊寅秋。明中上人將飯信陽。吾素敬其爲人之質乎中。而文乎外。且有忠信才德之美焉。追而送之門之外。仍問信之故。曰。信之爲州也。其地高於佗州。得三之二焉。連山四圍。雲雨其下。絕頂太始之雪。凜乎畏日朱炎之際。天窄峽束。萬壑悍流。至其平處。則融爲大湖。而吞雲夢八九之不啻也。而春冬之交。堅冰厚積。人馬憧々。徑其中流。天下高寒之氣。於是焉窮。乃百仞名材。千里逸駕。皆稟而產焉。其宗廟神而明之靈也。豈凡庸齒牙所能說焉者哉。噫。噫矣哉。吾子說信之故也。韓氏之言。於是乎得矣。誠夫名材逸駕。不能獨當。而鍾乎人矣。宜哉。國朝欽明之初。佛法東漸。銅像止于此州矣。亦蓋以水土之性。神氣之感。鍾乎其人。而必有能任其法也歟。吾子也。非其人耶。益充才德。而擴忠信。能堪佛氏之任。而不愧韓氏之言。則信之山川。有光耀乎吾子者歟。

寄東濃宣猷仲碧雲之什後敘

惟肖開士。冠于卷首。曰。麗澤兌。君子以朋友講習。美乎哉。其言之也。開士其可與言易而已矣。能溫古之言。以顯今之行。蔑開士言。則孰能知其美乎。何則彖易者曰。兌說也。剛中而柔外。說以利貞。是以兩澤相麗。交相浸潤。互有滋益之象。故君子觀其象。以朋友講習焉。天下之可說。莫朋友講習若也。惟欲仲上人也。中有剛性。而不廢四時。修焉藏焉。肺生塵。汗翻漿。而莫吾之熱以滅油也。膚起粟。手欲龜。而莫吾之寒以釋卷也。覃研之學。積密而栗也。是謂剛中而說焉者也。且外有柔德。而有紫芝眉宇。以說目也。有明道和氣。以接人也。愛惠之情。溫潤而澤也。是謂柔外而說焉者也。孔子曰。積密而栗智也。溫潤而澤仁也。而上人也。剛智以爲絃。柔仁以爲章。而佩之左右。以爲朋友滋益之戒警。則不亦利講習之貞乎。剛智也。柔仁也。偏佩之尙爲可也。而矧兼二者乎。雖董氏西門氏。而風斯在下也。吁。惜乎離羣索居。二載于此也。絃章之警。講習之言。今也則不然也。而猶耳濡目染。久見秋陽吃雨之功。聲應氣求。常依霽月光風之表。故三尋之夢。九逝之魂。不能抑止焉。同心之友。惟肖岩公及僕。託思于日莫碧雲之句。或倡或和。前而角之。後而犄之。遂成近牀二十篇。而惟肖既敘而詳焉。且命僕題卷尾。雖有愧子產之言。而義不可默。故美錦以學製焉。

詩は鴉臭集に見えず、花上集に七絶十首を收む。就中、
短艇遠從天外來。蒲帆滿腹得風開。篷窓今夜梅花落。欲倚黃昏月下推。
春湖孤舟

櫻雪可看松可聽。兩株雜色映窓樞。明朝若有洗花雨。瘦鶴飛邊一樣青。松間櫻雪
春水纒高數尺強。烟波渺々接天光。落花漲盡江南雨。一夜閑鷗夢亦香。春漲
腐儒絃誦幾勞形。世外幽人骨獨醒。書在床頭琴在壁。一簾殘雨暮山青。琴書自樂
惱亂風光奈老何。強將白髮惜春過。尋常只道芭蕉雨。那識花時一滴多。雨中惜花
玉露無聲下井檐。客衣偏覺曉寒添。茂陵寂寞秋風老。不有金莖一滴澗。露
の如きは皆得難きの佳作と謂ふべし。本朝高僧詩選には別に左の一首を載す。
萬般春色看成空。多少飛花暮雨中。黃鳥數聲人寂々。柳絲無力繫東風。借春

第十二章 仲芳

第一節 傳記

釋圓伊、字は仲芳又仲方と書す。姓氏詳ならず。長州の人なり。年甫めて八歳にして南嶺子越禪師を筑前の聖福に拜して鬢髮隨侍す。長じて南都に往き、西大寺の高湛律師に従ひて戒律を聽き、更に洛に入りて禪林の諸老に參し、尋いで錫を慧日(東福)に掛く。應永九年法を播の法雲(山號)に開く。惟肖疏あり。

伊仲芳住法雲寺山門疏

居油幃作謝宣明面。如外論何。射金甌中盧後從愿名。察群情耳。不翅鳥集木。木亦揮鳥。信哉龍嘘雲。雲能靈龍。某爽槩凌秋。雄文倡古。三千精騎。用處過南嶺師翁。五字長城。虛空罵西來祖意。躍冶金。众(同衆)咻何鑠。制鐘劍。寸折不撓。歐陽觀永安箸書。騏有此郎之嘆。靈樹知韶石行脚。發吾首座之言。蓋行藏皆付於天。非左右專爲之地。鼓破沙盆以九奏。享生苕蔕於千金。深雪滿村。枝南枝北行探春信。法雲垂澤。根大根小舉被海涵。遵先佛規。祝聖人壽。

岐陽亦同じく疏ありて之を賀す(見不三)。一居五載移りて廣覺に住し、同十六年建仁に遷る。後旨を奉じて南禪に陞り、暮年に建仁の長慶院に退居す。同二十年季夏微疾に染む。門人寫照して贊を請ふ。芳皆儒に應ず八月十五日偈を書して坐逝す。年六十。臥雲日件錄に芳の傳記を補ひ、兼ねて當時諸公唱酬の狀を窺ふに足るものあり。共享徳元年二月十七日の記に云ふ、寶渚雲章來話。予問少年從何人學。曰。少年親炙于仲芳。爾後侍岐陽。因話。仲芳許鹿苑相公鈞旨。隱居今熊楚永安。永安爲仲芳所構小院也。一日絶海就慈恩寺拈香。觀中太岳從焉。仲芳知之。相招。座有東福楞嚴頭。聯句破題曰。涼雨城南寺。絶海續曰。清標天上仙。次慶雲莊有句。觀中對之。偶忘之。次某曰。滴露薔薇架。太岳對曰。來風菡萏漣。時鄂隱執筆書之。又仲芳分座東福之日。太白惟肖叔英等同來。將作詩。立題以春

齋留客。時雨下。恐其歸路日暮。罷詩作句。某曰。留客春齋雨。太岳續曰。梅邊分半雲。凡聯句五字中。除韵外不許用同句中字。然絶海仙句外用天字。太白雲句外用分字。從此而我山中不必禁之云々。如此話少壯事。不啻一二。所謂東福楞嚴頭。諱普慶。字迪元。始號蒙岩。絶海改之。見在伊勢小寺。數年前領十刹公帖耳。又慶雲莊今在建仁長慶院。仲芳眞子也。

仲芳特に惟忠と親交あり。雲壑猿吟中載する所の詩三篇以て之を證すべし。
隣人暮訪宿苜齋。話到中宵興更佳。會面悠然疑夢寐。傾心忍忘形骸。松聲洒遍風千澗。竹影篩殘月半塔。未肯家風同北阮。一杯春露洗情懷。與南隣仲方伊藏主夜話

楚騷寧可續。秦鏡照無心。此道終何託。幽居更深入。春過花似夢。雨歇綠成陰。獨鷓歸猶未。空林日影沉。次韻寄仲方外史
風流君尙在。雲路意逾長。一住金華後。重遊洛水陽。梅花吟處月。楊柳別時霜。驚喜投詩至。驪珠照我傍。次韵答金華仲方長老見寄

第二節 著述及び詞藻

仲芳著す所語錄及懶室漫稿あり。懶室漫稿完本今傳はらず。天龍寺藏して零本あり。五山文學全集第三輯に收めらる。卷の五六七のみにて序記説の諸篇より成り、附するに疏稿拈香の類を以てす。其

筆路暢達措辭俊逸巧妙能く宋文の致趣を盡し、優に一方の作家として特立するに足る。蓋し義堂以後の散文翹之瑞溪等を除くの外、殆んど皆跋及すべからざるなり。是を以て左に録する所亦其篇數の稍や多きを辭せざるべし。

白雲之什序

西蕃之州。莫播大乎播焉。連山雄跨數州。而其南際于海。城邑壯麗。士民智勇。當所治之乾隅。翮翔圖越。河流環繞者。曰赤松之鄉。蓋刺史之本貫也。兩利相望。共爲關右之勝藍也。其林泉明媚。而勢爽增者。乃含華之法雲也。其檜杉蔭森。地位宏深者。乃赤松之寶林也。殿閣隱然而起。廊廡翼如而進。鐘魚互答。梵放酬酢。叢叢犀顛。千指肅如也。其禮樂規度之盛。甚有足觀者。宜矣。霽々雄々。氣吞大方焉。其餘佛屋神祠。間見層出于竹樹杳冥之際。緋紅叢碧。如開畫牒。所謂山水之國也。余嘗在京師。聞人說此方觀游之美。褰裳西望。寄逸想于寥廓之外也久矣。歲壬午。余承乏視篆法雲。乃獲飽償夙志也。然而每憾不能與叢寺諸公散步吟傲。以樂適于其間矣。一日寶林月海上人携詩軸來示。且請題辭於其首。披而見之。乃所以雜友不勝離索而督其歸意之佳篇也。凡列芳銜者卅五人。皆一時之選也。掛之高堂素壁。仰而讀。俯而誦。奇藻秀發。清風在席。桐雲蕙瑞之氣。與千岩秋色。爭其高寒。心目洗然。不知殘暑之毒人也。於是乎。向之所憾者。如有泮渙也。何其快哉。輒釋此意。

寫以爲彼。摘其末章字。扁以白雲之什。月海也。羣玉英標。濟謹俊造。蓋君子之素也。自強不息。必亢厥宗者乎。

野橋梅雪圖詩序

凡朋友之相投贈也。以文以詩。稱揚導諭。託物借譬。其可觀者。相望於冊。浩汗不可槩論焉。然而審夫意之所寓。大率不出規祝之間焉耳。蓋責善於其始。而頌美於其終之義也。景易謙岩翁。三味遊戲之餘。好吐驚人之句。雖古之三高僧。亦不可多讓也。自作野橋梅雪詩。使工圖焉。同題者若干。皆文雅之雄也。裝潢精調。贈之東山續甫上人。寄聲於金華山人圓伊。命以首序。把圖披之。野水小橋。冰枯雪老。槎林一樹。嬋娟婬約。吐孤芳乎羣植彫摧之後。回生意乎萬象慘冽之時。其清標高韻。恰如見端人正士之卓立乎羣邪之間焉。使人精爽飛越。便起荒畦窮谷喚策尋春之思也。於是。向之規祝之論也。尤較然矣。夫續甫也。將門華族。而當世貴家也。自齟齬歲。棄家業而入空門。臺閣之氣。綺紈之習。洗然無復于懷者。其庶幾乎。益野其居。益卉其服。霜之雪之。而玉女於丘願也。是其所以爲規焉者邪。昔碧岩老人。持佛祖左券。發揮正宗。支分派別。如四瀆之水也。時紫陽朱元晦。爲天下儒宗。以綱常爲己責。心究造化之原。身體天地之運。雖韓歐之徒。恐當歛衽而縮退矣。舐排異端。甚斥釋氏。及見圓悟梅花詩。唱酬不已。稍稍遊其門。雖未能至我奧。而潛知有聖賢之道妙。以

足討論焉乎。蓋是自其所好而入者也。謙岩意想。必有所欲詭焉。是其所以為祝焉者邪。舜何人也。積雨勉哉。因謝謙岩曰。余之持斯論也。亦竊為翁而祝焉。

盆山畫軸序

東山首座公見外上人。携山畫軸為示。且需題辭。余曰。築山於階除者。以蒼翠之不狀者也。開沼於庭際者。以漣漪之常可濯也。惟雖戲玩之叢爾。亦足以養我胸中丘壑矣。較之夫家山水之圖。而不知何物為其佳趣者。乃天壤之不啻也。夫移山水於階庭者。已假也。況形塔庭於盆盎乎。況寫盆盎於畫圖乎。益不堪其假。而所以養我胸中者自若也。蓋自其假者而觀之。則峯乎嵩華。汪然湖江。未嘗不為飛塵為綫流。自其真者而觀之。則拔蘇迷慮乎寸毫之末。涵曠王利乎老瓦之底。其不動之象。無根之量。自然不相加損焉。逮于融物我。泯真假。則吾亦忘吾言焉。見外抵掌曰。辯矣。翁乎。請系之為序。

孤松獨鶴詩序

一元之氣。昆崙旁礴。充塞於覆載之間。其散而降物也。未始不以其類相感也。粲然形於上者。森乎位於下者。叢々林々。並生於其兩間者。雖有萬不齊。而各依其類以推之。無可容疑乎其間者。然而不類而相感者。物有之矣。類而不相感者。物有之矣。蓋是萬殊而一理。一理而萬殊。洪纖精物。全

體混殺。其旁類互類。有不知其所以然而然者。咸自然之象也。松植物也。鶴羽族也。非厥類也較然。乃不類而相感者乎。龍幹虬枝。蒼髯虬甲。不厄歲寒。能貫四時。沈瀟之華注於內。霜雪之精薄於外。亭々可以憂雲霄。鬱々可以蔽天日。稱之靈植。信為不誣矣。惟台仙之留宿。尤得其宜。夜半露降。揚清唳乎寥廓。寒梢月白。弄孤影乎流光。蓬丘之夢。瑤臺之思。自非集千年蒼翠。而栖五鬣仙枝。其規翔矩步。將何以憩焉。亦乃類而相感者乎。龍峰仁安仲。造孤松獨鶴圖。寄其友別洲上人。其所相感之情可觀矣。曰孤曰獨。不二其守之謂乎。題詩于其上者若干。才調之暢達也。望鉅植乎深林。與寄之高遠也。聆遺音於華表。所謂天機之自發者也。不卑余蹇澁。微以序文。夫安仲也。皇家仙種。祇林英標。庶幾乎榜樣於後人者也。余最敬之。別州也。窈窕態度。瀟灑精神。庶幾乎羽儀於繡林者也。余酷愛之。其不讓而序之。不亦宜乎。因作而歌曰。
長松在磻兮。落々其幹。鶴之來栖兮。颺々其翰。長松倚丘兮。天風颯々。鶴之來舞兮。烟霏雲浮。上有菟蘇兮。下有漣漪。邈彼仙馭兮。願言相隨。

寄明白上之詩序

衝騰之起也。其力可以簸盪天地。而掀舞江海。及既衰也。不能舉一羽。漂流之激也。其勢可以崩潰山嶽。而吞吐日星。至既縮也。不能蕩纖芥。竊觀世之急乎始。而緩乎終者。其蔽皆是也。而吾徒為

尤甚矣。凡爲宗門之士也。誰不欲一蹴而到聖賢之域矣。然而時方叔季。人心媮薄。徑契真造冥詣之妙者。幾乎鮮矣。其宜深歷源委乎三藏。羅絡異同乎百氏。以治我心術之純駁也。是故。吾徒東書尋師。挾策攻業。紛々役々。動成阡陌。其壯志銳氣。凜然不可觸干。雖大千不同之書。將研究之不足也。顧聘之際。其壯者蕭然而衰。其銳者索然而盡。扞格昏塞。未中道而自畫者。十常居八九。其異於是者。未讀數卷之書。好欲爲人之師。未成一藝之名。謾誇詞翰之工。曰。我克抱閎肆之術。曰。我克得製作之體。其言未終于口。而傍已有捧腹者。澗然不省察。強自爲有餘。華好其服飾。夸大其言語。輕慆淺膚。巧嚇童稚。甚可媿矣。苟有學涉內外。道包今昔。獨立特行。不敢同波者。羣而咲之。黨而忌之。喚爲狂惑。指爲怪僻。吁。欲學之立。而道之行也。亦難矣。東山明白山人。龜廟之聖孫。而洞上之的裔也。黃閣之簾。紫羅之帳。舉世稱宗姓之俱高也。清雅粹溫。光霽照人。勇于講學。精于脩業。丁亥之夏。南隨子瑜師。讀書於福原舊都。日章之美。將易觀而待。於是。雜社之士。慕風采而惜分離者。皆作詩以贈。編軸既成。屬余序引。余雖老矣。以益者見遇也有日矣。故論列學者之利病。以進焉。上人也。學也欲其博。問也欲其審。謹思理之精。辨道之正偏。而篤行其遠且大者。其庶幾乎。慎勿踐夫昏塞淺膚之蹟也。

香月小廬詩序

傳曰。造次必於是。顛沛必於是。此卽所以聖人教學者。用力於仁之語也。若能體之。則當急遽苟且之時。而省察之思愈精。在傾覆流離之際。而存養之功益密。既逮于其醉乎醇。無入而不自得也。揚寶謨曰。造次必於梅。顛沛必於梅。此卽所以序陳晞顏梅詩之語也。若能詳之。則品格之奇古。襟韻之清高。雖百世亦可見其人也。然而晞顏儒者也。不知有一日克用於此心於仁乎。瑞鹿典藏玄仲上人。性甚愛梅。扁其燕處曰。香月小廬。蓋摘君復之語也。比年以來。從師入京。而香月之興。往來其懷。而不已。故欲畫焉詩焉。常相接心目。以養其志也。所謂晞顏之愛。恐當爲上人避三舍也。編軸既成。借命於竹隱師。求余題其辭。因諗曰。佳矣上人之所愛也。冰枯雪老之晨。月淡風微之夕。瘦影繞簷。輕香襲衣。凜然冷艷。生意先春。寔天下之尤者也。然而上人浮圖也。未可爲外物蔽翳靈臺。其庶幾乎。把知見真薰。以爲浮動之香也。指虛靈心光。以爲黃昏之月也。栖息乎重玄之虛。逍遙乎眞際之域。而省察存養。克用力於造次顛沛之間。若徒搖動吟習。以焦熬心肺耳。余不敢受命。上人揖曰。唯。系爲之敘。

南雲之什序

朝廷衣冠之族。爵位祿秩。有品有階。立制度。明紀綱。其畫略也。可以羸縮廟算焉。其談論也。可以潤色皇猷焉。非有聞望才調。不敢浪與人交。煇乎勢焰。炙乎欲熱矣。山林包笠之徒。恬淡稿枯。

杜聲鏗彩。磅礴乎物異之表。逍遙乎重玄之域。有威武不得而屈。貴權不得而動者。凜然風稜。橫眉可退矣。二者之爲。自然若相杵擊焉。然而古今之下。相得忘形者。未易歷指而枚舉矣。蓋雖趨尙之不齊。而有所景想而然焉乎。前先祿卿紀公。廼國朝儒宗長谷納言之華胄也。閱閱之光。寔有自來矣。國初以來。南紀有神。其祭式祝冊。朝廷所重。是故祠部歲下一郎。以行事祠下。非正直方嚴。克足感格鬼神者。則不可也。長谷之裔。世當其選。遂遷南紀。相傳爲專門之職矣。惟公軒冕至道。佩服大雅。晨夜祇愼。事神以誠。明宮齋廡之制。纓幣籩俎之設。深稱國家崇極之旨。其餘假也。圖書滿室。絃管在堂。一觴一咏。傲睨萬物。曠懷雅度。取功名富貴。付之戲具。一時公卿稱之。最好從吾輩而遊焉。特虛部內楞嚴精舍。延前鷲峰芳翁。朝扣暮謁。造詣雅密。所謂忘形而景想者乎。丁亥夏在京師。以旅懷一章呈翁。翁募繙流能詩者。屬而和之。凡若干首。皆當世之擇也。摘公詩發語。扁曰南雲之什。命伊論贊焉。夫先王之格言。古聖之大訓。以助時救世者。布在方冊。光祿公既薰練而狀既之。寔不可瀆告焉。我將以浮屠之道羅列而進焉乎。楞嚴翁在舉動云爲之際。發見呈露者。莫非斯事。其亦違贅論焉。方迫于督責之甚急。不自知聲之發。撫案歌南雲之操。歌曰。雲之南征兮。日落之時。悵送我目兮。心愆所期。瑤琴在御兮。下指胡遲。寫此中情兮。將播聲詩。

三友堂詩序

凡事物之肖乎我性之固有者。或接耳目心思之間。必欣然好之。蓋天理之然者也。是故。苟察其所欲。則其人胸中之蘊。不俟訐而發見呈露。校之古籍。班々可觀矣。歲之庚寅。東關道元帥府將行冠儀。致禮問於大丞相樞府。而使命稍難其人。駿州刺史二階堂藤公。首選而來。相城之距京畿。幾乎八百里。公意猶跬步爾。自持符節。抵役迅馳。衣冠旗幟之精明也。輿馬僕徒之森嚴也。道途所歷。士民改觀矣。及既對敬王庭。問酬不失言。進退甚有度。朝端百辟。稱道揚々。雖吾曹之不與于時論者。亦竊知東府之有人也。一日龍阜大中知藏來余室。袖出一軸子。揖曰。僕嘗在相城。數沾二階堂藤駿州之恩渥。以故知其平生所愛也最熟矣。因命工造三友堂圖。題詩其上。以欲饒其東歸。願得翁之一言。以金玉我之贈焉。逾辭逾請。迫于不獲已。把圖展之。白雲青嶂。古殿側崖。松篁夾徑。老梅俯澗。凜然肅然。誠幽貞之所廬也。夫藤公達官也。狄公桃李門闈春。頗若不與此物相合也。而子已稱知其所愛矣。公胸中之蘊也。我乃得幽。其勁節孤操。卓立乎群小之表。而品彙最高。韻調甚古者乎。然則忠義奮發。不爲臧否榮辱二其守也。可知焉耳。三友之稱。寔爲不媿矣。於是乎。余益信東府之有人也。公行有日。系之辭以贈焉。

白雲之白。青嶂之青。沉々古殿。維岩維扇。我竹孔瘦。我松孔醒。淡焉相於維梅之馨。藤公所友。君子典刑。排陽貫陰。有毅其形。公之云來。光子闕廷。若々印綬。馬之馴々。公之將去。駟騎在庭。

作詩以贈。執譚郊垌。

送義山上人序

士之立志也。必欲求進修之益。登藝術之場。而致身於道德仁義之域。以有兼濟天下者也。其所期之者。遠且大矣哉。夫京師者。人物之海也。故天下四方之士。川赴而波馳。其勢沛然矣。於是乎。有司掌貢舉。而執文章之柄者。設以科策焉。詳察其業之精麁。而判其人之黜陟也。或一進而得焉。或數進而屈焉。其得焉者。苟預高官重祿之榮。則思益大其道。益明其德。大利於斯民也。非奉公命。以行四方。則未嘗一日欲私歸故土矣。其屈焉者。媿乎吾器之未利。吾業之未成。而居窮守約。孜孜焉益勤焉。亦未嘗拋棄。其業鬱々而歸矣。是以茂林偉器。相繼輩出于世。國朝二百年以來。斯道稍衰。名教殆壞。朝廷不以科取人。而士亦無世守之業。只存官員而已。不復問其人之才否。繇是學問之道。益大廢矣。大率談道德。言文字者。吾徒之緒餘。而不在薦紳者之專門也。夫叢林者。亦學佛之海也。緇流之趨此。猶士之京師也。其業雖不同。而所以求到於道者乃一也。自余隸此山。十有六年于今矣。竊窺人物之遷替。其亦有數矣。耆師宿衲之以道爲己任。化浴遠邇。而誓不入舊閭者有焉。比年以來。往々反之。後進之士。僅入叢林。席單未暖。有名位之求。而不得之。則其色戚々。喟然出怨言。拋業而歸焉。幸而得之。則意氣揚々。喜溢而頰。其職未滿。而欲速歸焉。問之其故。曰省師。

曰觀親。曰有桂玉之嘆也。凡吾徒之事師也。不在執巾帨。奉瓶盂。唯在授業傳道之際焉耳。其事親也。亦不在致定省時飲食。唯在尊以吾道之尊焉耳。惡衣惡食。而不羞者。儒亦有之。所謂省之觀之。與嘆桂玉也。非吾徒所宜言焉。較之彼世俗之所志。何啻有間焉乎。嗟乎甚可悲矣哉。長門義山上人。往者遊京五年。頗有進修之志。而冬夏一裘葛泊如也。永德癸亥之夏。欲東觀關外之勝。抱負利器而行。遂籍於相之龜山。居無何。位充典墳。丁踞猊揮塵之日。而衆服其敏焉。職滿而歸也。適過京之舊隱。訪余於病室。乃告以長門之歸。余喜其慰久間。且惜其遠別。力疾宵話。因書向所嗟之者。以爲贈焉。肯有所激云乎。

顯山字說奉鈞旨作

天地之間。亘萬世而無變。顯然不可得而揜者。莫山之如也。嶄絕揭宇宙之表。青冥蟠混元之中。吐吞日月。晦明爲之變化。開闔陰陽。氣象爲之慘舒。尊嚴高大。勢壓玄間。是其容之顯然也。其秩數也。配焉以公侯之品。其望標也。封焉以方偶之鎮。曰岡曰巒。或岑或嶠。丘陵者培塿者。奔趨而如朝之。環繞而如拱之。是其位之顯然也。一握之雲。滂沱降八荒之雷雨。綫流之水。激怒鼓萬里之波濤。其沛渥和暢之功。未易枚舉矣。仙佛窟宅。神靈都府。萬物生華。衆珍產奇。取焉不竭。藹藹也雉免也。天下歸焉。是其德之顯然也。吁大矣哉。顯名之稱也。非範圍天地之化。經綸性命之理。其

孰能與於此哉。其唯吾相乎。光烈鴻業。論贊而不媿其稱者。其唯吾相乎。然則所謂亘萬世。而不可
拚者。果在此而不在彼也。庚寅夏辱命吾徒有文辭者。品藻徽號之槩意。東山沙門圖伊。干瀆鈞嚴。
取藏于厥後云。

篇々皆潔清有益の文、後世浮華の辭と異なれり。且つ其野橋梅雪圖詩序中の朱子を擧げ、孤松獨鶴
詩中の一理萬殊を説けるが如き、適々以て仲芳の宋學に於ける造詣如何を窺知するに足るべし。其の
送義上人序中に於て二百年來科擧の廢絶を歎じ、薦紳者流の無爲を斥したるに至つては誰か此種の言
議を叢林緇徒の間に期せんや。眞に空谷の梵音たるを覺ゆるのみ。

仲芳の詩は花上集に七絶十首を見る。就中、

老屋蕭條傍嗣陰。滿庭積雪碧窓深。曉來倚月讀周易。一樹梅花天地心。

梅窓讀易

五湖烟水綠涵天。月白蘆花秋滿船。吳越興亡双鬢雪。功名不敢到鷗邊。

范蠡泛湖圖

萬柳春深鎖六橋。淡烟疎雨意蕭條。蘇公仙去無詩輩。滿目湖光魂欲消。

六橋烟雨圖

五雲宮闕隔仙標。咫尺情如千里遙。欲到洞房復無夢。檐花月白度春霄。

寄人

壯歲竊期天下奇。宗門九鼎欲扶危。朝來笑向鏡中問。白髮蒼顏汝是誰。

覽鏡

寶釵斜壓長雲垂。手折花枝欲寄誰。咫尺昭陽印未到。羅巾掩淚立多時。

美人折花圖

の如き各々具へて一種の佳趣あり。又便を以て左の二首を附録す。

宋去中原士氣衰。精神獨看建安詩。平生忠憤計君意。空入梅花一々枝。

贊陸放翁

胸涵皇極當經綸。陶鑄唐虞醉裡春。介甫熙嚴名宰相。莫嫌杜宇上天津。

邵康節像

本朝高僧詩選に別に左の二首あり。

蓑衣笠笠跨驢兒。遮莫吟邊得句遲。開闢以來無此作。湖山煙雨自然詩。

雨歸

半世功名一芥輕。振衣只要赴歸耕。青山不負舊時約。竹雨松風入夢清。

夢山居

百人一首には左の一篇を載す。

碧戸朱門紫陌春。蘇根未見襯香塵。徧憐蒼色愛幽僻。纔到貧家滿地新。

苔

崇傳の翰林五鳳集に如心が碧雲稿全篇を以て仲芳の作として編入せり。其誤謬如心の傳中に辨ぜし
が如し。

林羅山文集卷二十五に載する所の絶句辨に云ふ、詩之自然者在擊壤集。擊壤集者。邵康節自樂之詩
也。仲芳梅窓讀易云。老屋云々(見前)九鼎美人如春風云。吹則爲寒嘘則春。美人益々滿腔仁。那知顔子
和風后。又觀河南程伯淳。此二首似康節乎。它人道不得底言語。或曰。比邵翁。失於巧。と。蓋し其
巧に失すと謂へるは主として九淵の作に就いて言へるか。仲芳の什は九淵より優れるを覺ゆ。

仲芳四六の疏文偈語太多きも、左に二三篇を録して其體裁筆致を見るべし。

合三銓考其選。汝南品題猶有在焉。取一人拔其尤。關東豪傑無足問者。益利其器。以張吾軍。某人穆

若金蘭。凜然冰蘖。清涼縛束棗栢坦宕。一身具體而微。叔向遺直伯華多聞。二難齊名而出。用

翳晴術罵拍禪。舌翻波瀾。啖觸茶瓢得玄辯。身奉塵刹。嫌織蒲鞋任閑房。允也龍峰的傳。(一恐脫)宜

哉鰲山成道。花木逢春樓臺得月。久稔數家名藍。珠簾捲雨畫棟飛雲。好吊舊都勝踐。殷勤三請。贊

仰一人。芝大愚住福嚴山門疏

雲漢昭回。五龍夾虞淵之日。山河拱抱。九虎守清都之關。鬱乎桂殿蘭宮。肅然鯨鐘鼉鼓。登斯位者。

得其人哉。某人玄鑑無私。化機密運。郭汾陽單騎見虜。威嚴掩人。山巨源識量不群。端重鎮物。手

鞭三級霹靂。胸蟠萬丈虹蜺。非證非修。遊戲神通大光明藏。全寶全主。直入毘盧眞法界門。松風送

天上蕭韶。華雨飄岩前錦綉。文之韶之穆。互主宗盟。大者王小者侯。齊會列國。

月庭和尚住天龍諸山疏

行鄒魯觀周禮。安山猶存千光典刊。遊河洛思禹功。冷泉乃爲九州都會。在斯行也。得其所哉。某人

一味軟頑。十分峭措。鼓風靈於口角。敎造化於筆端。論道類先王法言。連三生得比丘體格。建事如

節度符信。虔九峰爲宗門爪牙。謗佛語而傳佛心。離實理以談實相。鼎命忽下。輿情攸趨。孰先焉孰

後焉。招諸君以齋苴。同業也同道也。隔千里而水懷。

在室和尚住聖福諸山疏(安山冷泉地名。佛心。禪師諸孫曾住實相)

第三節 四六文法論

當時叢林疏稿用ふる所の四六文體は専ら蒲室を宗として苦心經營せり。今金井保三氏所藏寫本の雪心(隱)所撰の文章源流(二卷二冊。原係山口大林寺所藏)を看るに、中に日本伊仲芳四六法なるものあり。仲芳の書今之を求むるに由莫し。乃ち此に源流引く所を録する事下の如し。

叢林入院開堂。用駢儷之語。勸請住持。濫觴于趙宋。蕃衍元明。其間諸師。覺範北磻以下。至懶庵全

室等。發揮正宗之餘。博識雄才。游戲翰墨。皆以化筆。緣飾斯道。凡以文章行于世者。咸有四六之

作。其爲體裁。隨時沿革。出入古今。馳騁內外。吁盛哉。國朝諸師。初無此作。中古以來盛行之。率

用宋朝文法。是故關翁(虎)禪儀外文。擇而載之。三四十年来。稍用大元法度。其端重曲雅。縱橫放

肆。與造物者爭變化者。龍翔(室)制作。超拔先古四六之體。立宗門百世之法。是故天下翕然步驟之。

而其文法。固非一例。學者其宜反復究之。而諸師所製。亦不可不熟讀之。唐宋以來。諸儒文集。皆有

四六之語。筆力清勁。造語可觀。而未必宜宗門疏語。深可弁之。禪四六之文。不飽才力優贖。從事于此

者。取三教文字。包括涉獵。以助筆力可也。造語之體。句欲活動。字欲謹嚴。有一篇之法。有一

句之法。有一字之法。常用五經之筆法。而和而可得楚辭之文體也。力吐驚人之句。慎勿用隱僻瑣碎之語

也。吾輩不以文章爲專門。而宗門禦侮之一端。亦不可廢之。苟秉其筆。宜知利病。密_と着力。不可輕易變亂焉。當代雄文博望者。皆可爲師法。勿倦講明。比年每見世之學語之輩。漫然秉筆。有使人皺鼻捧腹者。正欲馳文章之譽。而却得無知狂惑之名。何其不思之甚乎。自八字稱以下。不可過八對。自八字稱以下隔句對。不可過三對。長句不可過九字。短句不減緊句。疊短句。不可過二對。隔句對。不可疊二對。蓋是蒲室法也。隔句對有六體。所謂輕隔句。上四下六也。重隔句。上六下四也。踈隔句。上三下七。但下不限七字。四五六乃至八字九字十字十餘字亦不妨也。密隔句。上七下三。但上不限七字。四五六字八字九字十字十餘字亦不妨。平隔句。上下齊等。雜隔句。上四下五或上五字下四字。或上四字下七字八九十二字。或上五字下六字七八九十餘字。或上六字下五字七字八九十餘字。或上七字下五字六字八字九字十餘字。或上八字下四五六七八九十餘字。或上九字下四五六七八字十字十一字。或十字下四五六七八九十餘字。如是皆雜句也。凡四六法。隔句不連二對。短對不連三對。短句不減四字。長句不過十字。一篇不可減五對六對。不可過九對十對。(雪心附解云。上四字下六字句。謂之輕句。有對偶則謂之輕句。沈有正。濃有蘭。思君子。不敢言。注云。隔句用韻法。隔句。當謂輕隔句對。若無對偶。則先可謂隔句理。楚詞云。私云。芷與子同韻。蘭與言叶韻。故謂隔句用韻法。)月舟の蒲室疏も亦伊仲芳四六法を載するも唯だ何其不思之甚乎に至りて止む。

外紀

第一章 龍 湫

夢窓會下の偉器、龍湫の道表、春屋の經綸及義堂の文章是を鼎足と爲す。

第一節 傳記

龍湫名は周澤、姓は源、氏は武田、甲州の人、初めて誕れて齒髮已に具はる。父母以て不祥と爲して諸を野に捐つ。宿を経て黑白の二犬周旋衛護す。乃ち收め歸りて養育す。六歳にして夢窓に従ふ。入門春屋と日を同じうす。已にして南禪の竺仙之を延いて第二位に居らしむ。年四十九にして甲の慧林に出世す。尋いで洛の臨川に住し、又建仁を主る。應安の初大興寺を濃州に開く。何もなくて綸命降りて南禪に住す。年を経て東山の常在光院に隱る。永和二年に起つて天龍を領す。王臣緇白靡然として化に嚮ふ。復た遷りて臨川に入る。臨川陞して五山の列と爲る。一坐七寒暑百廢具に興る。已にして事を謝して三會院に居る。至徳三年七十九歳にして復た南禪を領す。汝霖之を賀するの疏に曰く、鳳闕聖詔。朝出九天之中。龍門禪宮。位陞五山之上。蓋惟新受命主。而爲舊有位人。某道貫古今。名揚朝野

金剛寶劍。截斷虛空肺肝。黑漆竹篋。敲出佛祖骨髓。提心宗單傳之印。續常照四世之灯。如佛智反于仰山。青山湧黃金之宅。若辯才飯於天竺。白雲開碧嶂之容。松偃舊房前。寺憶曾遊處。南鄉相北鄭相。風教同時。大馮君小馮君。兄弟繼踵。更重修好。母淦此盟。龍湫和尚再住(見汝霖佐)南禪語山疏(禪師語)湫凡そ名山を主るこ
と七會、應機說法、弊習を革めて規制を新にす。太清・性海・一庵皆法交甚だ篤く、絶海亦其法弟たり。海等特に開法し大に化風を施すに及んで湫法筵に臨み、感喜して覺えず涕下る。乃ち夢窓の法衣一頂を以て之に贈る。晩に西山に壽寧院を開きて退居す。嘉慶二年門人に授くるに遺誡數條を以てし、命じて塔を造るを容さず。但歸土の後竹數竿を種えしむ。其歲九月九日を以て終ふ。壽八十一、全身を院隅に窆し、榜して鏡像と曰ふ。後南禪の慈聖院に塔す。其南禪にあるの時朝廷其道價を開き、拜して國師となさんとせしも、湫謝して受けざりき。因つて玄猷の號を先師夢窓に加へらる。湫乃ち其夢窓の爲めに創建せる靈塔上生院に於て奎章を掲げたり。所度の弟子に無傳・在中・益叟・古芳・雲詔・春浦・玉庭等あり。天境(靈)に和龍湫和尚見寄の偈あり。曰く智者機鋒挫慧榮。竹巖聲價契余曠。學於行解空知見。舉出朋儕冠洛京。晩節彌堅霜後柏。高標獨露海中瀛。年來結伴同肝膽。不比葵丘萬古盟。と(見集短)、空谷(明)亦之を贊して曰く、一吟一詠。漏泄佛祖巴鼻。警喜警嘆。點開衲僧眼睛。四開海衆會。兩遭天使迎。直教木犀春半花發。又使瓜瓞日下叢生。休疑窠塔長安穩。使不動尊護法城。と(見常光國師語錄佛祖贊)

併せて以て湫の全面目を見るべきなり。

龍湫の春屋・義堂・太清・性海等の間に在りて儀表特立せること義堂之を記して甚だ詳なり。堂の相陽より來りて入京するや、湫と常在光院に於て相見る。日工集康曆二年三月十八日の記に云ふ、相見畢。及古今詩偈等事。仍惠余以菩提子念珠一臂。と。是より共に諸山及洛中相將の間に周旋す。又同書永徳二年二月廿三日の記に云ふ。赴常在光府君(義)花宴之招。府君未至。主人龍湫。引上後園觀花。花或盛或飛。主人説昨日二條相國來遊。發句曰。吹わたせ楓の橋の花あらし。獨在池中花尤可愛故云。余亦口占一偈奉呈龍湫師兄云。又同年四月十九日の記に僧録(春)并龍湫和尚。囑以大慈院之事云。又同年三年三月廿二日の記に、赴常在光院。衝泥雨。偕諸老上楓橋亭觀瀑。南禪太清和尚有詩。曰。吟行只覺春山好。不怕春泥汚客衣。主人龍湫和尚和曰。杜鵑花綻楓橋外。似學山僧着赤衣。古劍和尚曰。樹王亭主相迎笑。道韻如山一衲衣。余亦效顰曰。諸詎貪看千丈瀑。不知飛雪濕禪衣。同年四月十五日の記に、冒早赴南禪乘拂之筵。到方丈。與府君話。點心罷。燕于南廂而說話。龍湫説及同門關墻等事云。是れ蓋し龍湫の春屋と不和を致せるなり。五月九日の記に、早參府。府君怒形於色。云吾欲與嵯峨門徒絶。自今以後。不復爲法眷。但爲開山國師門人而已。余問其故。則以春屋龍湫不和。諸弟關墻。今欲令之和。春屋不肯。不如與之絶交。余千方萬計。救之解之。因勸召梵賀。以請龍湫事。與春

屋和會。且謂勿急。先甲三日。後甲三日。徐而思之。未晚也。同十二日の記に、府君特召梵賀。重以請龍湫充三會院主事。而報國師(普明即春盛)。其旨甚詳。誓言無私。云々。同十三日の記に、國師再以中浩梵賀二人白府君。以請龍湫充三會院主定矣。同十六日の記に、早赴慈聖院。賀龍湫領三會事。罷而參府。府君悅適。同廿四日の記に、赴南禪。方丈大清請府君。君涼涼南軒林樾。龍湫領三會。明日入院。因有此會也。上生院見缺主席。府君龍湫和會。命余兼管。余固辭。龍湫府君勸勉數次。余不肯聽。同廿七日の記に、早赴西山。與三會龍湫人事罷。因辭上生院。湫再三勸勉。余辭以昨日府君面前所說數件。湫驀然發怒形於顏貌。余徐詳說。湫意稍解。同廿八日の記に、龍湫入府。謝三會事。且和會上生主職。罷來訪。云府君既免子。而以月舟而代之。と。此の如くして此の問題は落着したり。又同年八月廿四日の記に、赴府齋。君設點心二味。菓子三品。飯菜六種。云是龍湫和尚所教儉約者也。自今以後。每會如此。則足矣。余因勸令爲天下叢林法式。以戒奢也。又同四年三月八日の記に、以府君命。赴常在院觀花之會。齋罷。君及諸老。皆上後山樹王亭觀花。是日花過半凋殘。府君密謂余曰。日則吉矣。花則落矣。蓋戲以龍湫和尚拘日過花時節也。余笑曰。觀花則以盛開爲吉日也。龍湫天性每々卜日時吉凶。所以有此戲也。同十月義堂南禪に住するの命を承けしも、年方に滿六十にして未だ七十の分限に入らざるを以て辭するや、義滿龍湫の齡最も高きを以て請ひて代らしめんとせしも龍湫堅持して

聽かず。同月三日の記に、府君曰。吾欲請前住長老一人。以令補一年之闕。龍湫・性海・太清・皆居東庵。就中龍湫最爲尊者。府君命之。湫辭。君重命之曰。伏請一年。湫亦固辭。君曉然曰。爲龍湫弟子者。於天下叢林。停止出世。其次性海承命。住院將過一朞歲。と。然るに至德三年九月に至り、湫再び南禪に住したり。嘉慶二年義堂の疾あるや、湫之を訪ひ親しく堂の手を執り、脈を候ひて道話して去るに臨み、侍者に告げて曰く、汝師必逝矣。昨夜夢汝師掛衣孟二袋着草鞋。曳杖而去。吾問曰。汝其變作這去。就曰行脚遊方。吾曰。遊方は變處。曰大圓鏡裏。豈涉方所乎。平生吾總無夢。夢則必有驗。汝師乃再生人也。既曰行脚方。此土化緣盡。而歸彼本土也。急須辨末後之事。(同年三月十一日記)。義堂已に寂するや、湫至り龜を指して説きて云ふ。師弟棄老兄。先着一鞭。と。香を炷し大悲咒を誦し潛焉として還る(同年四月二日)。湫平生堂に寄するの詩偈若干首あり。亦以て兩人の關係を見るべし。今只其二を左に録す。

好句清吟久不聞。離襟何以滌塵氛。光微合欄橋西月。影遠拈花嶺北雲。鏡裏蒼顏空自愧。琴中真趣

向誰云。問君近賦木犀否。昨夜天香入夢薰。寄義堂侍者

大雅希聲誰解聞。絕交論就謝輕氛。鳴琴絃斷有流水。古調曲終無過雲。世態偏由離合見。交情宜保

始終云。千林秋暮馬山頂。花綻蟾枝巖桂薰。再次前韻寄義堂七首(時寓馬山)

(錄)

隨得集中又用石室西堂韻。賀別源西堂首業。次韻奉呈南禪東陵和尚。和春屋首座謝寄夏菊之韻。康水甲申秋南禪東堂東軒(竺仙所居)之下產紫芝乃作十二韻歌以獻賀云。和默庵記室韻。次竺仙和尚謝獻盆紅白梅韻。呈天龍放牛和尚。和中岩悼晦谷奉悼龍山和尚。寄渭(大)書記。和訪明極和尚。等の諸偈あり。以て交友の及ぶ所を見るべし。

第二節 著述及び詞藻

龍湫喜んで不動尊を畫き筆妙神に入る。世に稱して妙澤老人の不動と爲し、後人秘して珍とす。平生譜及語録を編むことを許さず。竊に書する者あるを見れば之を火にす。滅後其首座中項編集して二卷となし、稱して七會語録と曰ひ、船に附して明に寄す。正統元年阿育王山廣利寺の願庵(體宗)序跋の文を作る。又外集は即ち隨得集是なり。二書俱に寶永四年に至り天龍相國の遠孫に由りて始めて活字を以て印行せらる。共に四冊とし題して龍湫和尚語録と曰ふ。東京帝國大學別置本あり、近く五山文學全集第二輯亦隨得集を收む。

龍湫遺誡の中に云ふ、我有三等弟子。所謂猛烈放下諸緣。專一究明已事。是爲上等。修行不純。駁雜好學。謂之中等。自味己靈光輝。只嗜佛祖涎唾。此名下等。如其醉心於外書。立業於文筆者。此是剃頭俗人也。不是作下等。矧乎飽食安眠。放逸過時者。謂之縮流耶。古人喚作衣架飯囊。既是非僧。

不許稱我弟子。出入寺中及塔頭。暫時出入。尙以不容。何況來求掛塔乎。云々。(見語録末所附)。龍湫既に道儀を以て立つこと此の如し。則ち其重きを詞章に注がざるも亦宜なり。是を以て其隨得集も亦偈句其多數を占めて純詩殊に罕なり。今唯其誦すべき者數篇を選取るのみ。

夜泛蘭舟弄碧波。水天空豁見嫦娥。扣舷一曲無人會。唯有秋風入棹歌。 夜泛湖見月

靜視春雲生太空。青山白髮座簾櫳。乾坤萬里百花雨。都落沙門隻眼中。 春雨閑情

乾坤清氣越精神。故入梅花枝上新。三嗅幽香三省己。幡々華髮又逢春。 對梅自歎

鐘聲夜々落誰邊。客夢黃梁四十年。起座松樞我忘我。雲生嶺上月行天。 客夜

關忽々裡且偷閑。獨座春風窓戶間。身世兩忘心亦息。始知城市有青山。 城中偶作

別に古體若干あり。和勵志詩は本集卷首にあり。和夜讀廬山高詩は之に次ぎ共に長篇なり。特に後者は歐陽修を誹りたるものなり。然るに其作皆語意露骨にして雅ならず。今唯左の二篇を鈔録して其風概を示すのみ。

細思量也細思量。是非固不當。蕩世波揚復抑。昭天意顯而穢。堪悲有德龍鳳匿。豈羨縱心

燕雀翔。萬事唯憂難羽化。長安此去路途長。 和山中口號(二首 錄一)

止矣哉。世既澆漓兮。地老天荒。風雨不以時兮。日月亦失光。蘭之倚兮。盡變成蓬艾。嗅而無馨

香。松之麤々兮。終曲爲荆棘。偃而在道傍。止矣哉。鳴鷺不鳴兮。翔鳳不翔。海燕于飛兮。栖巢於畫堂。野雀啾嘈兮。啄穀於大倉。豺狼長威兮。麟龍斂祥。止矣哉。聖人不作兮。誰整類綱。使我歌兮。使我傷。心不盡兮。歌聲以長。聖人不作。河之水不清。前浪後波。滾々湯々。止矣哉歌

第二章 春 屋

夢窓の會下より出でて最も行政の才幹あり、大いに禪林の規模を擴充し、兼ねて文學の發達に與りて力ある者を春屋となす。

第一節 傳 記

春屋名は妙葩、春屋は其字、別に不輕子と號し、居を芥室と稱す。甲州の人、父は平姓、母は源姓。夢窓の族姪なり。其母親音に祈り雷を妊むと夢みて妊む。年甫めて三歳にして母抱きて夢窓に謁して曰く「此兒凡器に非ず、宜しく師に投じて出家せしむべし」と。窓、口づから心經を授けしに、屋口に就いて誦す。窓曰く「今已に是の如し。往向量るべからず。汝能く保養せよ」と。七歳にして窓に濃の古溪に投ず。教ふるに法華を以てするに七日にして軸を終ふ。人僉神童と曰ふ。十二にして甲に歸りて道滿翁に慧林に依る。嘉暦元年屋年十七、默翁(誠妙)と偕に上京して窓を南禪に拜して下髮進具す。

此秋夢窓龍山を退き元翁來りて席を補す。屋湯藥に侍して宗教を研究す。明年相に如きて窓に瑞鹿(覺)に侍し、竺仙に淨智に參す。建武元年、清拙、南禪に住するや、屋を招いて悅衆となす。竺仙の遷り來るに及んで擧げられて後版に居る。乘拂提唱江湖之を稱す。貞和元年天龍の落慶に命ぜられて紀綱となり、復た頼に窓に參叩し、一日圓覺經を看て居一切時不起妄念といふに至り、忽然として契悟す。窓乃ち付するに法衣を以てす。屋更に法兄無極に天龍に依りて第二座に居る。延文二年大將軍尊氏請じて等持に住せしむ。明年春天龍火あり。屋幹事を領し末だ期年ならずして盡く舊觀に復す。

康安元年臨川火あり。同門の善宿屋を請じて位を補せしむ。其落亦天龍の如し。貞治の初後光嚴帝屢々召して法要を聞き、虔禮甚だ篤く國師の號を賜ふ。屋辭して佛光(元子)佛國(崇高)の爲めに徽號を請ひて許さる。武州刺史細川頼之、阿の光勝院を翹め屋を延きて居らしむ。時に國中大に饑う。屋餽粥を作りて之を救ふ。太守吏隨喜して之に効ひ、蘇息するもの衆かりき。三年伏見の大光明寺に遷り皇太后の爲めに陸座說法す。上皇法筵に臨御す。尋いで天龍に升り、盛に叢規を行ひて玄風を揜揚す。中岩に春屋住天龍江湖疏あり。

材美者譽隨之。道腴者德附之。譬如影之於形也。響之於音也。夫形之立也。有昂頰而影亦頰昂。音之作也。有小大而響亦小大。人某名馳四遠。德重諸方。言行兼全。福智兩足。莅事也。咄嗟而辨。

談禪也。照用同時。明鑑來機。入門便知好惡。澤施群品。隨機乃分多寡。不忝國師之嗣。宜爲王者之師。(見東海二)

明の恕中・楚石・了庵・西白の諸老、遂に屋の名を聞き、寄するに偈文を以てす。六年高麗使臣金龍等二十五員來りて西山に館し、屋の道望に嚮ひて皆衣孟を受けて弟子の禮を執る。此年天龍復燬く。屋再び寺務を領して百廢俱に興る。應安二年南禪新に三門を建てしに、疆延曆の故封を犯す。山徒公府に訴へて將に南禪を毀たんとす。屋時の管領細川頼之に説きて山徒の嗾訴を禁ず。頼之諾して果さず。山徒日吉の神輿を奉じて將に内廷に入らんとし、南禪の一衆衣を拂つて分散す。屋退いて丹後の雲門庵に居る。江湖の飽參慕ひ來りて請益し、頌古醜醉頗る多し。門人編して雲門一曲と曰ふ。會々明の使臣趙秩(字可庸雪老子稱爲子昂後裔)朱本(字本中號四明山樵)來りて防の大内氏に館し、之が序跋を爲り、書問相續ぐ。趙秩が雲門一曲引序に曰く、扶桑之國。丹州之里。星分拆木。地接天台。襟長江而帶大川。鍾金崎而秀丹府。天清物異。神龍射北海之光。人傑地靈。徐福訪蓬萊之跡。梵王宮闕。佛祖道場。雲門通玄機之要關。芥室瑞禪林之高躅。惠遠匡廬之雅望。淨鉢生蓮。文殊五臺之模範。傳衣眞印。九夏結制。衲子如雲。千里迎逢。高禪滿座。儼騁駢於上路。訪風景於崇岡。觀漁父之垂竿。伴仙人而採藥。雲收雲霽而滄溟清。日落嵐凝而暮山紫。玉箱浦島窮洲嶼之迂迴。抽筆峰巒秀天津之壯觀。猿鶴長嘯於千年之松。

車馬馳驅於九世之渡。漁舟唱晚。鴈字驚寒。遙吟俯暢。逸興悠揚。爽籟發而清風生。長歌凝而白雲駐。禪談法語。參宇宙之無窮。了義知天。識盈虛之有數。玉塵一揮。諸徒唱和。帙成典冊。以雲門一曲之名。開卷披險。咸金玉鏗鏘之韻。辱春屋大善知識之命。爲序列前。愧區區樸樸朽腐之才。恭疏短引。時龍集癸丑十月己巳朔七日乙亥吉。大明天使朝列大夫同知萊州府事趙秩可庸。書于防州長春城玄峰之西館囑雪舍下。屋又特に秩に請ふて夢窓の塔銘を書せしむ。大内氏更に朱本をして之に篆額せしむ。又明州天寧寺の祖闍(仲)南京丸官寺の克勤(無逸)使を奉じて來りて博多に寓するや、屋の聲望を聞き、杭扇印石を贈りて信意を表す。屋丹丘に居ること十年一日の如く、康暦元年春旨ありて南禪に住す。未だ一周期ならざるに殿堂樓閣皆輪奐に復して鐘鼓響を改む。帝之を宮に入れて法を聞き、特に内道場に於て戒を受けて衣を傳ふ。明年正月知覺普明國師の徽號を賜ふ。左丞相義滿敕を奉じて僧錄司の事を總べしむ。本朝に於て此職實に屋に權輿するなり。是に於て賢を擧げ、廢を興し、諸方の叢社規制一新す。又東福寺の疆界を復舊し、通天橋を架し、普門院を十刹に列し、義滿のために城西に覺雄山寶幢寺を建て、鹿王院を創む。永徳元年鎌倉元帥足利氏滿請するに建長を以てす。屋將に聘に應ぜんとせしも義滿に扼められて行かず。明年復天龍に住す三年金剛院に退居す。享徳元年義滿地を城北に卜して大伽藍を建て、萬年山相國承天禪寺と號し、屋を請じて開山始祖となす。屋正覺(夢窓)を追請して第一世

と爲す。又洛の景德備後の天寧豫州の安國羽の崇禪の如き皆神創の祖と爲る。嘉慶元年秋微恙を示し、移りて鹿王院に居る。明年八月十二夜衆を集めて永訣し、且遺偈を書して曰く、幻生七十有餘年。了卻先師未了緣。一國黃金收拾去。古帆高掛合同船。と黎明蛻化す。壽七十八、太白之を祭るの文あり。

祭春屋和尚文

嗚呼佛之出也。聞之昔時。祇陀猷闔。世以尊之。師之出也。見之今茲。相國覆簣。國得之師。佛既前甫。師復後倚。如合契卷。實同化儀。法道之盛。疇媿于斯。惠忠惠斌。冥之與弟。國師之號。僧錄之司。兼之一己。千歲一奇。師之所莅。惟愛永遺。師之所去。惟德永思。所以吾黨。斗仰景隨。今則厭世。吾其依誰。慈航歎覆。苦海測瀾。彼迷溺者。通津奚知。嗚乎佛之滅也。鵲樹春衰。師之滅也。龜山秋悲。滅無所滅。雲散天涯。出無所出。月現晴池。既無出滅。吾胡嗟咨。所嗟咨者。獨在我私。吾老且疾。賴師支持。已矣斯世。龍華最期。力疾率衆。輿詣纒帷。爐香椀茗。敢告哀辭。嗚呼哀哉。伏惟尙享。

屋度量廣恢、心地明白、平居身行、口言意思、同時に之を辨じ、叢林の施設面目を一新す。度する所の弟子八千五百人、好んで多く内外著名の書籍を開雕出版し、學海に裨益すること尠からず。

第二節 著述及び詞藻

春屋著す所、雲門一曲の外語録あり。東京帝國大學圖書館蔵するもの四冊より成る。寫本なり。門人芳通其一部を携へて明に往き、永樂二年提調僧録司事姚廣孝の序文を請ひ、天童の希顔之に跋す。偶頌一篇は其作雲門一曲と相出入するもの少からず。屋の木原より行政に達し、詞章は其事とする所にあらず。然るに亦夢窓會下の逸足、文藻全く見るべきものなくんばあらず。雲門一曲(東大、寫本一冊、隱寫料編)に、先づ趙秩の序文あり。中に云ふ、日本海外之大國也古有文武名。近代有官守者。咸尙武備。而假文矣。而縹流事雅不混。惟前主天龍春屋善知識。得浮園之玄奧。目道德文辭詩章。獨冠於日本者也。云々。此言過獎の嫌あるも、當時の推重する所たりしや知るべきなり。趙秩序文に附するに詩一篇を以てす。曰く、

聞說天津紫氣濃。無因縮地與從容。雲門日暖花千樹。芥室春深草萬重。翠竹清風來宿鳳。靈泉明月伴潛龍。金藤若啓回天日。吟屐何妨覓舊蹤。

春屋之に酬ふるに左の二首を以てす。

闔闔雲開春意濃。人忘道術遠相容。清風拂動(語錄作)月團轉。淡墨橫斜花影重。塔下光明驚寂定。毫端勝會現天龍。雲門果是長生域。入海泥牛不露蹤。

詩篇寫就道情濃。玉轉珠回(語錄作一)見德容。客寄(語錄作舍)春城唯寂々。神遊華界(語錄作)幾重々。毫驅

萬象月中東。(語錄作五湖) 吟注百川。(語錄作) 泓下龍。朔漠雪寒南雁外。未(語錄) 知何日間行蹤。(又) 屋と共に次韻して名を列するもの、長城の周範、甲城の梵相、鳳城の周祐、京師の梵芳及中欵等あり。梵芳は即ち玉腕の諱名なり。朱本唱和して曰ふ。

扶桑春屋大和尚。禪之範模。世之儒宿。舉國咸重焉。及門弟子。安禪之餘。皆學詩學禮。文墨榮然。正所謂性相近習相近也。云々。

萬里扶桑積翠濃。西風木落滅山客。坐看月窟銀河近。遙望雲門紫閣重。錫杖飛騰輕侶鶴。玉驄歸去疾如龍。眼前怪底烟塵惡。一入丹丘不見蹤。

左の春屋趙秩二人贈答の書は善く當時の關係を悉すに足れるものあり。春屋の書に曰く、

與可庸別駕書并詩

某頓首惶恐。再拜上覆。趙君相公館下。癸丑十月下澣。昌霖子回。出所賜答教。披讀再三。感嘆不已。就辱改正詩篇五卷。并十牛圖頌。尊翰芥室銘。墨蘭贊等。陳列之几席。光輝溢目。觀者無不嗟異焉。乃吾邦叢社奇翫也。又雲門一曲。兩相公序冠于首。并獲詩文若干篇以錄之。此曲由北可以傳千載者也。忻抃之至。非言之所論焉。乃欲申致謝意萬一之刻。仲冬初。有關西僧來云。十月之季。天寧瓦官兩和尚。附南海下載舟飯。兩相公同次博多津待風。想發洋必矣。愚聞之悵然不已。今春正

月之季。愚徒梵起來。以南渡志告之。始知滯在博多。是天假其便也。不勝喜躍。乃遣愚徒周允。同問往候館下。相公來此方。誠千載之一遇也。川陸脩阻。不遂面談。切恨因緣不會遇耳。雖然。不二門中。未嘗不對談。台光必照及焉。又辱以松雪翁尊翰扇而一枚爲贖。物意兩重。何可勝言矣。又有一件事。霖子去時。修一絨將謀相公。使愚意達天寧瓦官兩和尚清聰。茲防州刺史爲駐相公回駕。以有固拒之。不敢披露也。急回擬於備州尾道津達之。爭奈彼船又過了。事意相違如此。紫氣渡關。不知旒首座定密稟否。故以舊冬所絨投之台座下。萬望指陳爲幸。相望益遠。臨風眷々。若有便翔。母惜寄德音。慰方外之思。小詩一首。謾依高韻。奉謝來意。伏祈台察。喜聞漢使既回旌。又想詩成奪錦袍。香墨未乾松雪澤。希聲古調碧雲高。分來吳水半江綠。不假并州快剪刀。道契初無胡越隔。蘇仙何必問參寥。歲次甲寅正月廿八日、丹丘隱子某頓首上覆、端肅百拜、董書奉復。

可庸の書に曰く、

天龍堂上春屋善知識尊禪宿和尚法座。去歲蒙惠愛寵渥。凡之再三。感戴雲天之庇。銘刊肺腑。此生不可忘也。冬間自大內歸九州。天風來便。每有眷々之想。特遣家奴保兒阿童。以橫山爲梯階。晉詣座下。代參問候之芹。奈道途窈窕。竟與愿違。謹修絨小詩。寸芹必達清聽。正斯仰問。忽辱使者允侍司踵門。捧出台簡詩章。又辱水銀連筒一斤。獮皮一枚。祇領。惶愧不勝感激戰汗之至。又蒙梯個。

達開仲猷勤無逸。俱傳盛意。念珠刀子。摠無浮沈。荅之詩章。另具別格。更有梵超渡中國之意。唯々是命。不敢後也。中應南游之志頓起。今擬同舟。但不得法旨。故稽稟告。諒學道意篤。和尚座下。必發喜觀之心也。但來使允公所傳尊命。一々塞白。隸愧乏才。母足過人齒頰者。惟高明亮知區々飯國。此感此德。只恨不觀尊顏。後會未知何日。如夏天風未遂。又在七月。再當問訊。如歸程帆便復來。則圖會面傾倒。如不來。祖阿歸時。專當通萬里信。以伸謝意。歸囊如洗。愧乏一物。侑棧小詩告別。伏乞台察。辰下清和之初。惟冀順序。以膺天爵。不具備。楊花飛盡柳條低。杜宇聲々不住啼。玄鶴自歸華岳去。白雲空向碧山棲。三年塵鏡人容老。幾夜吟窓月影西。只爲東君未相識。至今長憶武陵溪。洪武甲寅四月十一日。侍生趙秩端肅百拜申覆。

又紗字險韻唱和五律あり。屋作る所三十四首に及ぶ。偶語多きも亦以て其安排鋪陳の力を見るに足る。左に一二を録す。

倦翼投林暮。地偏山氣嘉。(語錄作佳 以下做此)紅霞鮮截錦。碧霧薄籠紗。沙渚(語錄作際)鷗相近。滄波夢不賒。與君終(語錄作何)夕話。花月影孤斜。(語錄作傾斜)

物外逍遙客。隨緣處々(語錄作步)嘉。苒敷先聖座。葉擁隱人紗。寂(語錄作鎮)寞松門小。通幽竹徑賒。梅花(語錄作寒)爲我主。擇月影橫斜。

蒲團猶有意(語錄作地)。伴我暮年嘉。鏡裏心藏月。(語錄作菱鑑水)霧中花翳紗。路迷桃洞遠。人去竹林賒。松下移時立。袈裟滴路斜。

卷末に祖開及朱本の作れる芥室歌克勤及趙秩の作れる芥室銘を載す。左の四首の詩は最も善く、春屋在丹の時の情懷を表し、兼ねて其文藻を示すものなるべし。

遺懷四首

悠々壬子秋。雙影倚丹丘。波湧珊瑚月。江分白鷺洲。松寒霜鶴老。鳥古玉鼈浮。得失知多少。凭闌見一瀛。

乾坤青眼老。瘦骨枝皮穿。萬事風過耳。一身雲伴眠。私高鳥鵲夜。月滿白鷗前。他日浮萍迹。是山埋骨緣。

忘身事亦休。轉處自隨流。皎々長天月。蕭々落木秋。小兒憐造化。大道固深幽。白髮殘生夢。青山一枕頭。

力弱患多風。忘前類瞽聵。洞深難避濕濕。苒古只生蟲。幻藥投烏有。醫方體本空。周年不出戶。自作嫩禪翁。

最後に語録中に收むる所の左の七絶七首を鈔記せざるを得ず。

雲門寺偶作

丹陽山下雲門寺。白髮倚窓江雪深。水鳥浮沈雲斷續。漁舟載得一閑心。
三山相接白雲橫。古殿院深鐘梵清。可想老禪と寂夜。寒潮月上海珠明。
此去洛陽三日程。瘦藤衝雪撥層雲。死柴也解吹和氣。海岸枯椿春幾分。
海島風輕釣艇橫。枯叢岸々月華明。十年京洛江塵夢。一夜寒潮拍と聲。
菖堂竹戶生柴火。兩雪山風滿室烟。茶煮溪水春味淡。蒲團推出一枯禪。
千山雪擁玉峻嶒。萬籟聲沉暈一燈。冷火枯柴長容夜。因嗟鰲店不眠僧。
隨身觀史把苧草。應念莊嚴萬玉叢。一道神光三際外。蓮從火裏放花紅。
法弟の愚中の卵餘集に春屋に寄する所の偶あり。

近體一首奉寄前天龍芥室禪師

金衣昔厭緇塵染。無乃如今慰此心。芥室寄營吞朔漠。雲門幽築樞山陰。參玄諸子風儀集。四海一翁龍蟄深。但願沛然甘露再。祖宗薄蝕在平沈。

次丹丘芥室和尚述韻

老禪方丈日如年。落得細論文字禪。刮膜須還金色佛。鍊丹豈若地行仙。夢中榮辱有何命。毫末功名

未必天。風月打開無盡藏。破沙盆內煮山川。

是れ又以て當時春屋の心事と境涯を寫出して之が證明を爲すものなり。

若し其れ屋と義堂と相呼應して夢窓の遺志を天下に弘布するに努力したるの蹟は、一たび日工集及空華集を繙く者の直に見るを得べき所、今此に贅説せず。

左に録する所一篇の文は趙秩の周允を送る序にして、中に稍や浮誇失當の辭なきにあらざるも、亦以て當時彼我交際の狀況を知るべく、又上已に載せたる秩の春屋に答へたる書と併せ觀て以て、當時學徒萬里求道の氣象の如何に旺盛なりしやを想見すべきなり。

日本東海之偏方。東西陸地而長。北迫海而狹。週迂滄海。絡繹於諸島之間。築州石城。取中國近。而通舟航。商賈所聚。故石城爲關西之要津。陸行越關。由長防石藝。取丹州。而抵洛邑。航南海。經備州尾道。取兵庫。亦會于洛陽城下。王子所居焉。入關東。有千萬里之程。曰蝦夷。毛人所穴。隸在日本所屬。源將軍守鎮是方。並屬洛京。控治於是都。于斯風俗。尙佛法。上至國王大臣。下及庶民。莫不興崇善事。於是釋氏愈尊。而五山十刹。宮殿高廣。勝槩佳麗。莫非佛地。其靈龜山。夢窓創業。此境日本極爲殊勝。春屋師繼其後。完美其事。守成之難。其功惟春屋最多也。而名師碩德。咸惟尊讓。四方禪學之徒。趨而至焉。以爲進德之階者矣。今天子知日本尙佛法。故命有德行。天寧禪師瓦官禪師。

奉使闢揚佛教。遣余輩。諭毛人。同其來。二師而王陳法。王謂日本毛人一體。使祖公復命天子。同使僧使官飯朝。有僧慕游中國者數百輩。皆俊雅之徒。亦有未及冠年者。咸忻然趨從而往。可謂知佛法之廣大也歟。是時天龍主席春屋公。退閑于丹州雲門。連北海近周防。每通好於余。交贊誼密。聞余歸國。爲問候于天寧瓦官二和尚。特遣侍史周允。詣石城。以餞其行。不遠千里而來。亦將有所圖益也。及見二和尚。以禪教二法門規模。言詞莫非化導之語矣。余遇之如骨肉。日相從於翰墨間。無非切磋琢磨之意也。允謂余曰。允洛邑人也。少年受業天龍。侍師座下。受授之益。拳服膺。每有南遊之志。而未得與君同舟航。是所爲恨。余謂允曰。汝乃五陵公子。汝父母兄弟愛之戀之。南遊志何得而遂之乎。允答曰。豈不聞釋迦文逃王城而入山。學道成佛。但人有志。而事竟成。君言何戲之有。余忻然而愈加羨之。愈加敬之。余更祝之。後約勿食言。是所願望也。將歸。袖出老師命行之偈。山中諸公話別之詩。瓦官講之。與之琢玉。請余序之。余念日本之地。相去數萬里之遙。雖異國之風不同。語言不曉。而人生會聚交情。豈偶然哉。隸恨不遇春屋師者天也。又惜周允之交言有四方志。正所謂青出於藍。玉產于崑山者矣。其佛法愈熾。祖燈愈焰。又可見也。余故序此意於卷前。回達於堂上。以全美其後志也必矣。龍集甲寅春三月廿九日。中國使朝列大夫某州府同知趙秩可庸序。

第三章 性海

傳記及び詞藻

龍湫より少き事五歳、太清より長ずる事六歳、義堂より長ずる事十歳にして、而も此等諸家の皆夢窓の門下より出でたると異にして、獨り虎關の高足として特色を示せる者は性海と爲す。

性海名は靈見、別に不還子と號す。性は橘、信州の横山縣に生る。七歳にして讀書敏悟同儕に邁く。十一建長に得度し、十九清拙に建仁に參す。更に華嚴を南都に探り、台教を北嶺(觀比)に聞きて能く大義に通ず。又去つて虎關に南禪に依り、晨昏參請す。一日圓覺經を看て本有を豁悟せり。康永二年(元順宗至正二年)元に入り、十月明州の漢江に達し、浙の東西湖の南北を歴遍し嘉興府天寧に空海に謁して目擊機契す。又月江・卽休・竺源等に參見し、至る所優賞せらる。既にして一日謂へらく、吾が師虎關に踰ゆる者なしと。遂に虎關の牌を徑山の正續庵に入る。至正十一年を以て舶に附して歸り五月博多に着く。時に我が觀應二年なり。是より先貞和二年虎關既に遷化し弟子龍泉に遺命し、伽黎一頂を以て海に付せしむ。海既に囑を受けて丹州藥山の深處に隱る。遐邇崇信し寺を建て、延請す。長壽・禪居・興勝等の如き各々一方に蔚然たり。貞治二年足利義詮招きて三聖に住せしむ。海、休休歌を作りて之を辭せ

しも、命三たび至りて遂に入寺開堂す。應安元年義滿海を移して東福を主らしむ。相尋いで天龍南禪に升る。汝霖に見性海住南禪江湖疏あり。曰く、九天風詔。側聞内使親傳。一代龍門。仰觀老師獨歩。非惟法道之得主。矧亦江湖之有光。寔承天休。用協人欲。某機過聖電。德重泰山。吳山高越水清。爽氣崩壘。靈隱前天竺後。詞華建瓴。透過虎豹九關。豎起天龍一指。眷茲寶刹。惟昔爲帝王之居。燦彼金欄。而今登乃父之座。會其有極飯其有極。彼亦無劣此亦無劣。前輕輦之後輕桀之。速命駕而至。年兄弟也位父子也。願忘形以交。晚に慧山(福東)に退耕庵を創開して閑居す。永德三年義滿聘するに常在光院を以てす。堅辭すれども許されず。住する事二年にして退耕に歸る。應永三年小疾を感ず。義滿親しく庵に入りて問候す。海屹然として坐接す。義滿示誨を請ふ。海廬居士の迪丞相に示すの語を擧げて之を告ぐ。二十一日遺誠して造塔を許さず。歸城の後青松一株を植ゑて塔様を表せしむ。乃ち遺偈を書して曰く、天上人間休覓我。大千沙界絕行踪。不須撈撈水裏月。誰設縛住空中風。と。奄然として化す。年八十二。長享の己酉に法孫永誠其行實を作る。高僧傳に語錄偈頌等極めて多く、題して不屏集と曰ふとあれど、湮没して傳はらず。今僅かに其遺稿小冊子疏贊の類を載するものを東福大機院に存し、五山文學全集第二輯之を收む。

性海の名龍湫・太清等と共に問々義堂の日工集に見ゆるも、其動靜の詳を知るに足らず。

性海の虎關和尚七周忌陸座の中に、

共惟。某人。僧中之龍。法中之王。德合一人。道鳴四海。所以五湖龍象。雲如臻座下。一代縉紳。星如列室中。學海波瀾。渺乎無限。覺範仲靈。須拱手退步。文章淵源。深而無底。橘洲北磻。當斫額望風。其辨才恰似建瓴。其筆力可以舉鼎。疏楞伽則點出大唐法師不到之處。編釋書則顯發本朝高僧將泯之名。著述甚多。不勝盡舉。其於宗教。豈云小補哉。然而前所云者。師之緒餘土苴耳。至於洞見佛祖肺肝。舉揚向上玄旨。則活捉生擒。與奪自在。以文武火。煅煉衲子。以左邊底。激礪學者。其鉗錘妙密。無媿爲臨濟的骨孫者也。夫究禪河教海之淵源。啓文林字苑之幽悶者。其於本朝。古今一人而已。誠是希世大宗匠者也。昔師在南禪蒙堂時。山野間受誨彌深。歡喜濟北及圓通三聖。負笈於席下。尋有年矣。爰孤錫飄然。遠入中華。周遊吳楚。一十餘載。常切歸動。如如調飢也。丁亥之秋。一棹歸來。師入三昧。已經兩載矣。不奉尊顏。彌增渴心之塵也。光陰倏然。俄值七周之忌。云々。

其尊崇の情至れりと謂ふべく、亦并せて海の文致を認識すべきなり。茲に自贊の偈四篇を録す。

抹過從前行路難。老來歸隱舊家山。扶桑六十六州内。獨有此僧眞箇閑。

似俗非俗。似僧非僧。畫也不就。描也不成。本來不識汝面目。尺二眉毛領下生。

十年行脚江南地。萬里歸來鯨海東。老矣欲休休不得。惠峰住了又龜峰。

亂髮垂頂。長鬚蓋胸。喚作俗也得。袈裟著體。威儀整肅。喚作僧也得。童稚讀孔夫子之書。漏卮如

盛水。壯歲學佛世尊之教。只染指而已。

集中水墨梅贊の詩あり。曰く、波心認得嫦娥面。霧裡行迷演若頭。若耶春水洗春衫。と。結一句を闕

ぐ。編者註して曰く、此れ性海在元の時の作、後年策彦和尚入明の時、彼の國人此詩を稱して、日本

今に此僧ありやと問ひたりと云ふ。

萬丈彩虹橫玉砌。千年神物臥蒼波。滿身風露青冥外。踏斷天關掉臂過。

通天橋和韻

亭々抽水清於碧。片片泛波輕似舟。十里西湖風景好。六橋烟雨憶曾遊。

蓮

一卷華嚴易。梅花先漏泄。如何是梅花。試搖枝上雪。

藏主秉拂索話

此類以て其詩偈の一端を窺ふべし。

第四章 太 清

第一節 傳 記

太清名は宗渭、姓は藤、相州鎌倉の人、父は左金吾、母某氏、長谷寺觀世音に祈りて男を求む。一夕梵僧の普門品を授けて汝之を誦せば必ず男を得んと曰ふと夢む。茲より娠むあり、産して六歳に及びて、母試に普門品を授くるに清復誦して輟まず。十三にして出家、上洛して雪村に西禪に依る。村、其の穎發を觀て容れて驅鳥と爲す。十六にして大僧となる。村に播の法雲に従ひ、復た京に歸りて瑞龍東山の間に歷遊す。夢窓古先等諸大老其偉器を愛し、授くるに要職を以てす。再び雪村に參するに至りて、遂に記荊を蒙り復南禪に歸る。已にして聘せられて濃州の龍門に住す。永和康曆の間相陽の東勝、淨智に歷遷す。中岩之を賀するの疏あり。

太清渭西堂住相之東勝江湖疏并序

叢林蕪廢。賈縉之黨。成羣充嘍。本色衲子。不欲與鷄鶩爭食。以故宗風不振。可嗟甚矣。我輩飲氣久矣。僧官六角公。亦咬牙痛心。爰適相州東勝住持見闕。特舉太清禪師。以俾補席。我輩方出氣。不勝欣抃。製疏爲慶。其詞曰。

臺鏡照處。形色寧匿妍媸。衡石懸時。物量咸分輕重。衲子所蘊。作者共知。某玉雲的孫。大龍眞子。本分舉揚宗要。則四關六通。自上施設玄機。則七縱八奪。住龍門嫌客少。旋鳳城首衆多。與其久守師席西禪。孰若新開法筵東勝。矜聽高倡。不許安眠。(見東海一)

應安五年播州の寶林に移る。尋いで印を解いて洛に入り、南禪の蒙堂に居る。相國義滿一見道契し、之を府第に延きて經を講じ、請ひて天龍に住せしむ。汝霖之が爲めに山門疏あり。曰く、圓照之住官寺。特錫神席繪旨。妙喜之起雲門。爰承魏公聘命。信道德既顯著。必君臣用崇欽。學者所求焉。吾師乃是也。某辯折百氏。才肅五兵。聖主賜詔書。不減圓照之於神席。權臣向法要。亦猶妙喜之於魏公。舊罷北道主人。今爲東軒長老。吾山有賴。法社可興。曾於山林往來。寶林之師寶山之主。堪與雲龍上下。大龍之子大雲之孫。理非得楚人弓。名被記京尹笏。久聞勝韻。龍門寺遊龍門而顯。願新弊絃。龜山操望龜山而作。茲伐鼉鼓。率迎衆輿。永德二年敕を奉じて南禪に陞る(汝霖又有疏。共。嘉慶二年相國見其高風。)の席に補せらる。晩に雲頂庵を相國の側に築きて居る。明德二年微疾を示す。六月十九日清旦香を燒き偈を書して曰く、夢幻空華、不生不滅、撥轉大機、虛空迸裂と。筆を置きて化す。年七十一。緇白計を聞き胸を擗つて歎じて曰く、法梁摧けぬと。此夕定身を昇いて龍山の雲門庵に塔す。太白之を祭るの文あり。曰く、維明德二季。歲在辛未。六月丁巳朔。十有九日乙亥。我師前南禪太清和尚大禪師。奄入無聲三昧於相國雲頂正寢。越翌日。窆墟於雲門精舍。小師比丘某等。衞哀致誠。謹具香茗時珍之奠。敢告以文。曰。於瘞痛哉。謂天蓋高。而吾不得而知夫所以覆也。謂地蓋厚。而吾不得而知夫所以載也。載故履而安焉。履故載而仰焉。若夫一旦所載或崩。所覆或裂。則將其仰之安之者。如之何哉。於是執

不知夫所以高而覆。且厚而載焉乎哉。而吾於師之道如斯矣。謂師蓋尊。而吾不得而知夫所以教也。敬故敬而依焉。於瘞痛哉。吾師今也則亡。蠢々諸孤。疇敬疇依。於是實知所以尊而教焉。其覆載之恩也有極。而師之恩也罔極。故號呼涕慕之痛。甚於天之崩地之裂。但庶大圓鏡中。不遺慈照。出示雙趺。以慰心表之憂焉。於瘞痛哉。伏惟尙享。(見集)

義堂の日工集永和二年五月廿一日の記に云ふ、淨智新命太清和尚。遺傳藏主。告以來意。余以東子謝之。同廿二日の記に云ふ、余就于東光。與太清相會。略叙久濶之情而已。同三年十二月十四日の記に云ふ、步履扶筇。過淨智。與太清及無二諸公觀雪。有詩呈太清。云々。義堂の鎌倉より入洛するや、清、時に天龍に在り。交際相親み共に卿相の間に周旋せしこと日工集中の記事に依りて之を知るべし。太清は特に講經に長じたりしが如く、義滿屢々請うて之を行はしめしことあり。詩文述作に於ては甚だ意を用ゐざりしが如し。然るに日工集康暦三年十一月十九日の記に云ふ、與太清同赴二條殿。而聯句。句殿下發題。同會者。萬里小路父子。侍從中納言房城父子。僧伴相山、雲溪。と。又永德二年九月十三日の記に、承府君命。赴西芳精舍紅葉之會。會者。官伴二條攝政殿。侍從中納言。萬里小路中納言。日野兄弟。管領兄弟。僧伴太清、物先、汝霖、本寺長老善明白也。坐列之式。國師(春)與太清對。二條殿與府君對。其餘僧俗隨次而坐。點心罷。就于富士間寮。與話。且和漢聯句。聯句將半。君

鑑翁・龍湫・默庵等諸師に親みて請益す。夢窓友雲庵の偈あり。中に命じて和せしむ。中聲に應じて曰く、
巖樹陰森日易暝。無心來往洞中雲。凝然一榻乾坤瀾。物外逍遙趣不羣。

十八にして錫を建仁に掛く。曆應十四年秋商舶に乗じて元に入り、月江(印)に曹源に謁す。月江其舉措兀痴の如きを視て愚庵の二字并に偈を書して之に贈る。曰く、拙而且古直而方。誦帚忘苕帚亦忘。紫氣無端出峯頂。勞佗賢者到巖房。と。乃ち以て號と爲し、後自ら庵を改めて中と爲す。已にして遊方するや、月江之を送りて曰く、

贈周及遊方

贈君一滴曹源水。漲起西江十八灘。八十四人艸窠裏。齒牙交下鬪體寒。

乃ち去つて即休(契)を金山に拜し悟を得、留まりて經藏を典る。月江楚石(楚)俱に詩を寄せて之を賀す。

賀愚中充東藏職

月江

金烏玉兔如梭急。八駿如何追得及。滔々楊子大江流。夜半穿靴水上立。龍宮海藏盡豁開。赤手擇得摩尼來。萬仞龍門一躍過。不假霹靂轟春雷。者回重入德雲室。不用參尋經七日。金鰲背上掉臂行。盡得真人好消息。(見鄭交徵書二篇卷之二)

寄愚中

楚石

信得及時明得破。無邊海藏盡掀翻。休翁古佛呵々笑。鎮海明珠只一丸。(同右)

古劍の了幻集に寄金山愚中禪師の偈あり。曰く、不問平安又十年。曉星殘月雨餘天。誰知只者同條句。擘破虛空作雨邊。又和韻答金山愚中禪師の偈二首あり。曰く、同參句子鐵相同。嚼碎百城烟水東。老矣歸來無一物。青山好在白雲中。毎憶金山夜話同。塔鈴燈外滴丁東。即今相見不相見。四十年來一夢中。と。愚中在學中石室(善)龍山(見)と時々往來して琢磨を加ふ。癸亥集あり。即休其首に序し、儒官虞伯生其尾に跋す。名聲廣く叢林に達す。即休嘗て中の爲めに頂相に題して曰く、妙高峯頂行船。楊子江心走馬。唐人不識這容儀。付與日本及侍者。と。愚中將に東歸せんとするや、即休送別の偈あり。

日東周及藏主。自持香典教至居間。皆得以代昏耄檢閱之勞。可嘉也。今其歸里。偈以勉進云。

裴寺相親閱幾秋。左探右索出時流。機輪三轉輪元淨。定慧雙詮慧匪脩。睡虎耽々拋故穴。遊龍矯々奮靈湫。好翻一滴長江水。漲起東方廣海州。

龍山も亦即休が韻に次して之を送る。曰く、
參扣金山已六秋。洋々韻度異常流。藏無大小都容攝。道絕功勳不用修。但得擊頭還戴角。自能倒岳

又傾湫。蒼生渴望多時也。霖雨何妨徧九州。(見高僧詩選)

會々即休疾を得、乃ち之に侍して期を緩む。至正十一年即休歿す。乃ち喪闋むを待ち、三月中旬明州を發し博多に着く。皇朝觀應二年の初夏なり。直に龍山と入洛、天龍に抵りて夢窓に拜觀す。是の秋夢窓遷化し衆僧分散せしに、中獨り塔下に留りて心喪三年す。尋いで南禪に入りて書記と爲る。職解けて遊方し、攝の棲賢、丹の天寧、紀の龍門、藝の佛通、播の雲門等に遷り、終に佛通の肯心庵に退居す。應永十五年相國義持、州守小早川氏に命じ、中に請じて入京せしめ、畠山細川二氏に命じ、迎へて伏見の藏光庵に館せしめ、義持自ら往きて欽謁し、鄂隱に命じ、城外の寺院五所を點して中をして擇びて居らしむ。中辭して就かず。自ら等證に寓し、後天寧に回る。翌明八月寂す。年八十七。勅して佛德大通禪師と諡す。西胤偈あり。

震且搏桑沒蹤跡。等閑抹過夢鄉中。人間留得高名在。不用丹山煙霧蒙。 敬奉釣旨追和愚中嶺二

禪師偈(案嶺三二)

一縷不輕信心力。何妨亂搭聳禪肩。人々空手把鐵鐮。印是自家良稻田。

愚中奉旨歸隱丹丘。不

幾示寂。賜伽梨十頂。賦偈致謝。(二首見眞愚稿)

第二節 著述及び詞藻

愚中の遺著を卯餘集と曰ふ。三卷あり。東京帝國大學所藏別置古寫本一冊慈照院の印章あり。五山文學全集第三輯に收めらる。(全集卯誤作卯)其解題に云ふ。此集應永三十二年南禪の惟肖刊行し板燬く。永享十三年德茂書記再刊す。今天龍寺藏本に依り校訂して編入すと。夫の支那にて成れる所謂癸亥集なるものは其稿蓋し卯餘集中に合收せられしか、未だ單行本を見ず。別に稟明鈔一卷あり。宗鏡錄一百卷中より抄録せしものなり。史料編纂掛にあり。

卯餘集は純然たる偈句法語(卷一偈頌卷二小佛事卷三法語)にして、篇什頗る富むと雖も、尋常詞章を以て視るべきものなし。今僅かに其偈若干首を取りて筆意を示すのみ。

次清拙和尚題赤間關額

到赤間關訪故蹤。城門直對海王宮。波沉寶劍蛟龍護。島鎮明珠舟楫通。樹色滿樓還細雨。鐘聲隔岸又回風。瞻望頗覺皇都近。五色雲浮日上東。

戊寅二月仲。赴光顯居士齋。軒名瑤碧。亭曰玉琤。因賦五八云。

洞中居士宅。溪上關林丘。疎影花獨白。暗香紅未收。五琤充客耳。遙碧豁雙眸。方外神遷窟。爭如此勝遊。

三月二日夜聽雨

佩玉珊珊鳴竹外。誰家公子入山來。今宵賺我一雙耳。明日桃花千樹開。

白鷗禪人參橫山和尚。借前金山老師送果書記韻。

蓬戶三年絕送迎。天津一日發南程。杖頭敲得驪珠落。忽々收來慰楚情。

覺禪人求警策語

百尺竿頭進步時。用心更莫計安危。單刀直入昏蒙去。金色花開鏡樹枝。

寄鐵山剛侍者居但州盧山虎谿(三首)

鏡山高臥虎溪雲。遮斷時人醉征還。只許峰頭霜夜月。更深獨下入禪關。

題丹之西岩屋壁(八首)

古來賢達貴中和。或絕交遊獨自過。莘莘耕夫千歲下。姓名不朽使人歌。我曾年少學柔和。老後工夫不此過。昨日山童固相約。常來與汝唱樵歌。

大 疑 二首

文章若是敵生死。泉下諸君誰在官。爲問孔丘堂上客。不知仁本作何顏。文章若是敵生死。那得天然罷選官。爲問祖師門下客。不知心印作何顏。

偶 作 (一首呈即休者。一首在本朝金山而作。)

不知禪者豈禪者。四十餘年只一疑。打破鼓山塗毒鼓。普天市地盡彌彌。少欲之人樂有餘。滿懷彷彿夜明珠。風流豈落大梅下。荷葉松花何處無。

送人之遠江

二月未晴正月雨。梅花落盡不開窓。更無一法爲君說。且喜尋師到遠江。

次韵奉謝臣昌老人惠櫻花

忽見金僊座上來。鐘聲載月鶴低回。拈花有旨却無旨。一笑令人心自閑。

夢遊光蓮寺

一路香風吹不斷。楚塘水色碧於苔。入門方識光蓮寺。直下令人心地開。

慈聖眞子端公侍者。別後再會。然未有雅號。敢以嚴仲字之。用代直呼其諱云耳。又綴拙詩一絕。更代煎點。區々之懷也。伏乞一笑。

顯然不及顏回遠。不幸命長今尙存。望八老年空白首。陰崖漏屋懶開門。

在中道號

萬物同源方寸寬。未嘗向外動毫端。羲皇上世北窓下。不覓安心々自安。

第六章 空谷

傳記及び詞藻

空谷の絶海に於ける猶ほ龍湫の義堂に於けるが如し。其の道望文采俱に好一對を爲すものなり。空谷名は明應、別に若虚と號す。姓は平、江州淺井郡の人、其母連りに女を生むに因り、叡嶽の神に禱りて男を求め遂に空谷を得。年甫めて九歳にして郡の廣濟寺の志徹に投じて驅鳥と爲る。天資聰敏經籍手に觸るれば即ち記す。徹其偉器を見て攜へて夢窓に附す。夢窓命じて業を其上足無極に受けしむ。谷服勤怠らず。一日臨川の長老堂中に禪坐し、屹として山の如くなるを觀、竊に念へらく、衲僧の風儀當に斯の如くなるべしと。茲より志を奮つて禪觀す。年二十七にして放牛に東山に依りて藏經を典司し、更に碧潭・默庵・中巖の三大老に従ひ、三藏の教卷五家の禪燈より九流百家の書に至るまで涉閱して遺すなし。蒙山及此山の南禪を主どる時、並に招かれて箋翰を掌り、又春屋清溪の會裏に在りて分座說法す。永和元年法を濃の天福に開く。四年州守土岐氏延くに管内の天寧を以てす。其寺僻して山間にあり。谷蔬を茹ひ葛を被りて將に身を終らんとするが若し。崇光上皇其風範を聞き、詔を下して大光明寺を管せしめ、屢々召して法を問ひ、崇週日に渥し。尋いで等持に移る。至徳三年、相國の春屋老

を告げて事を謝するや義滿敦く請ひて席を補せしむ。仲芳・圓伊・雲溪・友山等賀疏あり(各見其集)。三歲の中大に寺觀を整備す。嘉慶の初鹿苑に退休す。明德元年義滿請うて再任せしむ。後小松帝召して内殿に見え、法を問ひて大に悦び、衣盂を受けて弟子の禮を執る。翌日中使を遣して特に佛日常光國師の號を賜ふ。已にして鹿苑に回る。時に絶海、谷と道望並び高し。人之を二甘露門と謂ふ。應永五年北山の等持に住す。居る事三歲にして退いて雲居塔を守り、先師(無極)箋註の勞を憶ひ、衆の爲めに宗鏡錄を講ず。將軍義持山に入りて法を問ひ、法名を乞ふ。授くるに顯山の二字を以てす。十一年天龍を董し、明年復鹿苑に休す。義持一日問ふて曰く、某台輔に登りてより、金剛般若經を日課とす。其報如何と、谷曰く、能く諸物を推いて諸物の推く所とならざるもの之を金剛と謂ふ。以て般若の體用に譬ふ。檀越陰陽を熨和して君を堯舜に致すも亦般若熏用の力と謂ふべきなりと。義持悦服す。谷の爲人疎眉秀目音吐鐘の如く、機鋒峻峭にして觸れ犯すべからず。而るに居常仁慈、王侯の寵錫を受くるも、身を奉じて約を守り、衣服垢づき弊るれば躬自ら補浣して弟子を煩さず。然るに其塵尾一たび揮ふときは學海瀾翻るの狀あり。當時僉禪林の豪傑なりと曰へり。十四年正月十六日晚湯沐淨髮衣を更へて跏趺坐す。侍僧遺偈を請ふ。谷擲楡して曰く、「何の用をなすに堪へんや」と。衆請ふ事殷勤なり。乃ち筆を乗りて書して曰く、倒騎木馬。踏破虚空。要覓踪跡。結網繫風。と。刻を移して遷化す。齡八十。

慈濟院に送りて塔す。法を嗣ぐもの二十人。

義堂の等持の後任を義滿に擧ぐるや曰く、明應西堂空谷。道學兼備。天性會禪。眞叢林飽參。而近代本色衲子也。其嘗在天龍日。與余特厚。堂中並策。燈下共書。朝夕遊從。互至忘形。是以能知其為人。今在伏大光明寺。領衆辨道。是乃當寺之材也。宜登庸斯人。則可矣。君曰。其師爲誰哉。余曰。法嗣先國師上首無極和尚。國師喚作孫太郎者也。君曰。吾嘗聞之。乃笑而領焉。(見日工集永德四年八月七日記)蓋し空谷をして義堂に代りて等持に入らしめ、更に春屋に代りて相國に入らしめ、又た絶海をして空谷に代りて等持に入らしめしもの、皆義堂の力を藉れり。若し其れ義堂の臨終に至りては、彼等交情尤も掬すべきものあり。日工集嘉慶二年三月廿三日の記に云ふ(三月義堂病篤、此記他人代筆)、相國空谷和尚來問曰。病體如何。曰吾近日告別。但於大圓鏡裏。時々相見。谷泣而去矣。と。又同四月二日の記に云ふ、相國空谷和尚看候。親臨病牀而道話。及四十年前事。同四日の記に云ふ、師乃端坐。聞靜板未鳴。泊然而寂。移坐椅子。相國(空)等持(禪)兩和尚急與而至。視師顏貌。法然曰。師頰上生紅。是入定之相也。速可歎焉。諸子涕泣。と。是れ以て此諸人交遊の終始を見るべきなり。義堂の空華集卷七に空谷に寄するの詩四首あり。曰く、太白飄零子美窮。也知國亂血流紅。酒酣鯨背天非遠。詩罷鷗邊日過中。渭北年々春樹老。江東處處暮雲空。唐風廣矣無人繼。欲寫憂心擬草蟲。(讀李杜詩。戲)「夜座簾窓列漏終。扶桑乍曉海

噴紅。九天闊闊五雲下。萬里山河一氣中。虎豹戰酣塵滿塞。鴛鴦行斷夢飛空。相思不奈頓回首。水有潯鱗陸猛蟲。(從河舟中。寄天)「別日嵐山花半謝。樹頭今有幾分紅。竹樓夜雨呻吟裏。華洛春風夢寐中。病苦慚隨詩苦盡。下情還與上情空。知君待我陳蕃榻。壁上猶懸帶網蟲。(寄空谷)」一別空山幾憶君。離愁不盡雨紛紛。南津水濶思雙鯉。北關天高望五雲。忽見華篇還自喜。歌殘雪曲許誰聞。霜風昨夜生沙塞。斷鴻聲々急念群。(次約審答)空谷學德兼備すと雖も述作を事とせず。後小松帝の國師號を賜はんとするや、一休に問ふに空谷・性海二人の爲人を以てせしに、一休奏して性海は文學性未だ脱せず。空谷は名利兩ながら忘れたる本分の宗師なりと曰へり(見高僧傳)。以て其超脱せる人格を見るべきなり。然るに日工集至德三年二月三日の記に見ゆる倭漢聯句會には、空谷も亦列席すとあり。(其記云。奉迎府君。官伴坊城秀長御子左御劍。管領玉堂。僧伴性海。太清。)乃ち其全く文字と絶縁せしにあらざるを知るべし。門人編する所の常光國師語錄二冊相國寺藏本にして、今磨寫して史料編纂掛にあり。上冊は天福・等持・相國・天龍諸語錄及陸座拈香小佛事等より成り、下冊は佛祖贊及偈頌より成る、附するに空谷行實及前聞記(佛慈禪師無極志支行狀記)を以てす。今其偶二三を下に録す。

山園精舍萬松長。軒蓋來臨水一塘。玉局愛披無老衲。杜陵嘗訪贊公房。星辰位近天低座。律呂音清月照霜。題壁欲留時日記。二三纔過閭重陽。和准三后遊西芳寺韻

龜阜南溪古步頭。袈裟見許共方舟。龍門雪白千尋瀑。烏白霜紅兩岸秋。天樂翁張開月府。星槎輕泛
遡河流。離宮縱作梵王宇。尙有衣冠忝勝遊。 泛大井河

神咒宣來一道新。分明示點本生辰。青天倒蘸湘江水。千載沈魂上界人。 次韻相國絕海和尙端午

示衆(師時在鹿苑)

門外紅塵不得開。穿池植樹且開顏。水清已見遊魚樂。日暮仍期倦鳥還。廬岳岩泉雙屣底。朝川烟雨
一庭間。鄰翁惠我貫華偈。便覺高聲壓泰山。 鑿地貯水。累土爲山。自咲老夫兒戲。永泰中翁和

尙(觀中)以妙偈見寄。輒依嚴韻述鄙懷。兼謝來意。(師時在鹿苑)

觀中の原作及絶海玉崗の和を附記す。觀中の作、鹿苑庭下假山水と題す。曰く、勇退最知心事間。開池
累土學屏顔。能教意匠機前領。卽遣工夫鏤下還。櫟谷飛雲來客坐。苧溪流水落人間。好從無縫塔前過。
何必遙求沃上山。絶海の和に曰く、小開碧沼愛幽間。近對翠巒怡老顏。法施曾從時雨望。高懷却使古
風還。誰尋勝槩游方外。須信靈源在此間。俗子那知仁智樂。胸中塵土積如山。玉崗の和に曰く、詔許
歸休暫就閒。禪餘無事展慈顔。玄談未倦宣三要。丹術何須問九還。學字巴江橫檻外。開圖楚岫湧窓間。
南陽法道今猶古。台旆趨風頻入山。と。空谷又臨川の古劍と唱和の偈數首あり。今其一を左に録す。
十洲三島蓬壺外。入吳又問康僧會。歸來高臥了幻齋。靜看蠢蠢有情界。 敬依北山法華元章和尙

韻末。奉呈臨川古劍老師侍儿(五首之一)

第七章 雲 溪

第一節 傳 記

雲溪名は支山、濃州太守土岐頼清の子なり。故に岐を分ちて字とす。法を雪村梅に得てより播の長
良縣に如きて寶華山護聖寺を開きて第一世と作る。遠邇靡然として風に嚮ふ。久しうして京師安國の
請を受けて進んで萬年山に升る。上堂の語に曰く、相國只依本分住、初非有奇特商量、隨分飢餐、
困臥灼然、一切平常、無法令可施設、無宗乘可舉揚、盡日鶯啼、綠樹、殘春蝶戀、紅芳、聞無聞而聞盡、
見無見而見忘、聲色純真處、絲毫不可覆藏、妙德空生齋讚歎、狸奴白牯發毫光、と。溪機語圓轉として
才藻映發す。毳衣の土羨慕せざる莫し。晩に玉龍庵に退請す。明德二年十一月十四日疾を示して坐脱
す。壽六十二、庵に塔して明空と曰ふ。

第二節 著 述

高僧傳に云ふ、雲溪に語録并に贖隱西巖二集ありと。今史料編纂掛所藏雲溪支禪師語録一冊は建仁
寺塔頭兩足院藏本を謄寫せしもの。安國、相國の語、陞座及び拈香を收め、他の偈頌疏文の類無し。

表紙の裏に記録あり云ふ、雲溪方丈に西岩の額あり、故に其の律詩二冊を西岩集と曰ふ。室名を贗隱と名づけて、隱集五冊ありと。其の語録を閲するに文彩煥發眞に師蠻の言ふ所に違はず。惜しむらくは他の二集を得て其の純文章を賞する能はざるを。

第八章 大象

傳記

大象名は宗嘉、親しく徹翁の要訣を承け、又南遊して元に入り徧ねく諸山の名納に謁す。衣を捲いて東歸し龍寶山に住す。其の終を詳にせず。絶海津象の眞贊を作る。以て行狀の缺を補ふべし。曰く、松筠之節、冰雲之襟、探七閩勝、而飲蠶家水、聚九州鐵、鑄方寸心、徹叟室中、如麟如鳳、龍寶山頂、爲雨爲霖、激天源一派之流、滔天浴日、續大燈萬丈之焰、輝古騰今、嶽色橫雲青未了、故家喬木正蕭森。大象曾て紀の興徳に住するの日、東山十境の序あり。左に録す。

蓋聞山川形勝、乃聖賢往來之地也、在昔裴相國、叩禪於黃檗山、白居易題詩於天竺寺、蘇東坡留偈於東林、黃山谷轉機於山行、莫皆不緣地之靈人之傑焉、繇是、紀州太守光祿大夫大賢居士、往往遊于東山、而講道於春風座上、論詩於夜雨燈前、因分其境、賦十首詩、雪韻霜詞、玉轉珠回、泉石增輝、

僧徒拭目、一時之盛、無愧乎先賢、命余爲序、以期後賢繼作、學者覽之、莫作境會、皆從自己清淨性海中流出者也、

第九章 東漸

傳記

東漸名は健易、姓は藤、遠州の人、母源氏龍石を夢みて娠む。即ち龍石子と名づく。七歳にして華峰一公に投ず。素より讀書を好んで内外を漁獵す。列利に徧遊して賓を建長に典どり衆に相國に首たり。明德の間台劄を以て出でて遠の華藏、攝の廣嚴を主り、備中の瑞光に移り洛の安國、東福、南禪に歷遷す。應永三十年四月常在光寺に在りて疾を示す。大將軍義持源公寺に入りて疾を問ひ、又使を遣はして法語を求む。漸乃ち上堂衆を辭して下座、其の提唱の語を書して以て進む。翌十七日偈を書して曰く、威音一箭虛空兩片、脚頭脚尾日面月面、と。筆を擲ちて滅を示す。壽齡滿八十、東福の回輝庵に塔す。諸會の語録、龍石稿等若干卷あり。師蠻の贊に云ふ、東漸師年登八表、病中陞堂示衆、書以應源丞相之需、而翌日遂唱大寂滅、其遊戲三昧綽有餘裕、始知平日之言語文章悉皆爲實焉、今時和明之僧、依物觸途、漫弄筆墨、而及其死期、手脚忙亂、不得敢使一字、然則其平日之言語文章皆悉

僞也已云云。

第十章 大 岳

傳 記

大岳名は周崇、自ら全愚道人を呼ぶ。一宮氏。阿州の人也。蚤く俗了を嫌ひて州の寶陀寺に投じて默翁誠和尚に附す。性敏利、内外の經書手に觸るれば輒ち識て大義に通ず。翁甚だ器寵す。翁臨川に遷るに隨ひて圓頂稟具す。禪餘學を好み、冠歳に登らずして百家の篇涉獵せざるなし。又相州に往きて金澤の庫書を閲す。諸利の名匠に謁するに、みな單を掃つて之を待つ。丞相足利尊信禮接す。應永壬午の春相國に出世し、次で天龍に移る。是の日義滿奉ずるに金欄の伽梨を以てし、諸官員を率ゐて山に入り法を聴く。無績・功牧・菴忠の如き七十餘員の門人濟々班に列す。多士を得たるを稱す。特に寵命を賜ひ重んじて寺位を陞せ、五山第一と爲し、南禪寺を主る。後鹿苑院に遷りて僧録司を職る。萬年山の慧林、靈龜山の性智、皆岳の退休の地なり。暮年復た天龍に住す。應永三十年九月十四日寶積に化す。閱世七十九。

大岳著す所翰苑遺芳東坡抄あり。

第三編 室 町 期 (下半期)

山 内

第一章 玉 碗

第一節 傳 記

春屋義堂に親炙して其志操詞華を兼承し、特に隱逸詩人を以て目すべき者を玉碗と爲す。

玉碗名は梵芳、法を春屋に稟け、曾て從ひて丹の雲門に在り、性隱逸を好み沈退して志を守る。同袍開法を勸むれども謙辭して就かず。將軍義持其風格を抱して歸依特に渥く、強ひて起して南禪に住せしむ。列利高儀を欽す。晩に投老庵を構へて事を謝して休す。因つて作あり。曰く、

軒前脩竹綠婆娑。玉立三竿不用多。好是滿山風雨夜。虛心相對亦無他。

又金剛經を讀んで深く感ずる所あり。遂に一偈を作りて曰く、經過七十餘年事、寵辱悲憤夢一場、若得山中安樂地、看雲日日快移牀と丞相義滿父子并に同門の諸老に留呈して錫を杖つきて徑に江州に如き、

艸庵を盤結し、年を歴て寂す。江州の行は其實事に因りて義滿の旨に違ひたるに出づるが如し。臥雲日件録寶徳元年閏十月四日の記以て證すべきなり。惟肖玉腕に兄事す。肖の東海瓊華集に和玉腕老師勻題竹隱幽居圖の七律、次韵答玉腕外記以詩寄墨竹風雨二紙の七絶及芳玉腕住蔭山江湖疏等あり。今其疏を下に録す。

阡陌成群。炫耀如時花美女。叢林匿古。影殘似霜木長庚。偶逢若人。奧追吾輩。某禪與文熟。心兼跡清。毛羽南陽風兒。爪牙兩河師子。燕無函而粵無鍊。觀偉器之超倫。沅有芷兮澧有蘭。玩幽菲以自命。閱世雖付之一決。茲行亦出於众嘯。不惜子張山川。何資微公冰雪。中流擊楫。渺觀蒼海之濤瀾。木末憑軒。領略蔭山之風景。鎖口訣兩手分付。轉身句眨眼蹉過。千首詩輕萬戶侯。其奈紗籠人物。一宵話勝十年讀。幸毋金玉爾音。將眠沙鷗。慣賀厦燕。

玉腕好んで蘭を畫く。惟肖題して曰く、詩翁筆意吊湘纍。剩采春蘭不采芝。六里商山今古恨。君王容易信張儀。と。又曰く、戲墨縱橫掃楚蘭。劍池老衲讓楚壇。芝泥棒在龍門士。但作空山蕙帳香。(題玉翁畫蘭二首共見應龍門命)と。(瓊華集)絶海の蕉堅稿に題玉腕外史扇の辭一篇あり。末に齊執湘筠。物新製古。我友寄我。論我出處。載拜謝之。昔迷今悟の語あり。師蠻贊して云ふ、如何末法以來。自他宗乘。駭然馳名利場。割據寺院。蕩流華靡。澆弊百出。特以爲酷焉。荷哉玉腕師。此其志操蘭香雪白矣。

第二節 著述及び詞藻

玉腕の遺稿傳はらず。故に其著作を詳にする能はざるも、義堂の記する所によりて其詩篇の乏しからざりしを知るに足る。日工集應安三年八月十三日の條に云ふ、師姪梵芳上人來自東勝。出近作數首。一則飯田詠一百五十六韵。効古詩體。艱澁用奇字。往々不可讀也。と。其大作ありしを知るべし。又同六年十一月十七日の記に云ふ、爲梵侍者求。席上披詩彙。凡百六十首。就中八十首。點且改。芳本字玉桂。今改玉腕。と。是れ義堂の報恩に在りし時の事なり。又庚曆三年十二月廿三日の記に云ふ、芳玉腕袖茗而來。且出看山聯句詩一百韻者。而求點兼改。改且點。仍跋于其尾。又改者字作觀。と。是れ義堂の京師等持に居りし時の事なり。又空華集卷四に云ふ、

余適訪玉腕芳書記閑房有偈見謝次韻二首

禪起午窻香乍銷。我來分榻話寥寥。未容袖却文章手。潛子才名聳百寮。

玉腕蘭殘露半銷。詩成一笑似參寥。老吾才拙難爲和。只合長留置衆寮。

今雲門一曲花上集及高僧詩選諸書より玉腕の詩を拾收すること下の如し。

千里開眉喜色濃。唵中風月鑑清容。銀鈎鐵畫墨香動。鳳翥鸞翔文彩重。足下生雲朱府客。民間遺愛鼎湖龍。聖朝聞說推堯代。無復群妖露惡蹤。(雲門一曲)

高標傑出玉山齊。坐看雲衢日月低。方外交情尋惠遠。詩中逸格壓須溪。悠揚鳳曲時橫笛。縹緲天游不假梯。清絕鸞風枯澹子。春裊敢愧藿和藜。(同右)

前者は春屋等と共に趙秩の作に次韻せしもの、後者は朱本の作に次韻せしものなり。

江上青山多夕陽。芙蓉點破碧波光。鷗邊不待夜來月。何事扁舟歸意忙。江上夕陽(花上集收十首、今錄五首)

蓬萊烟客出琳宮。梅下橫吹倚晚風。只合暗香難落盡。孤根長托畫圖中。落梅曲圖

槿花初發拂晨粧。一日榮衰樂不長。世態於人每如此。可憐朝露借恩光。槿花

春江底事氣如秋。只爲送人多別愁。風攪岸花歸棹急。羨看沙背一双鷗。春江途別圖

世路紅塵十丈深。往來好客恨難禁。自巖岩下漣漪碧。濯足漸吾不洗心。清泉濯足

寓舍海東經十載。未遊花谷但聞名。今觀諸老詩中景。似遂昔年幽討情。慈恩寺(以下二首、高僧詩選)

落々長松鬱々柯。煩他斤斧略披過。風濤縱減舊時聽。贏得庭前月色多。洗松

第二章 心 華

傳 記

心華名は元棟、美濃の人、十三歳にして建仁の定惠院に頑石(曇生)に師事して句讀を受け、漸く長

じて四方に參請し還りて法を頑石に嗣ぐ。建仁の第一座に補せらる。康暦二年義堂の日用清規の講を受け後堂首座に充てらる。次で美濃興雲寺に住すること二年、永徳三年山陽の聖壽に住し備中の松山寺に遷る。頑石寂して其の席を襲ひ、文墨を以て諸寺の長老と交はり、義堂、惟忠、太白等と相親しむ。特に義堂に就ては疏稿の改修を乞へり。其名、日工集及臥雲日伴録の處々に見ゆ。應永中東山の定慧院に寂す。杜詩抄あり、心華臆斷と名づく、當時盛行せしも今傳らず、遺稿一卷、業鏡臺と曰ふ、疏語を専とす。

第三章 鄂 隱

第一節 傳 記

同じく絶海の門より出でて其本貫と詩名を同じうし、西海及南海の文運維持に力あるもの、鄂隱及西胤の二人是なり。

鄂隱名は慧藏、筑後の人なり。弱歳より絶海に依りて學ぶ。天生聰警にして楷書を善くし辭藻に富めり。至徳の末、明に入り、遊歴十年、歸るに及んで嘉興水西寺の詩僧仲銘(名は克新自ら江左外史と稱す詩集雪庵南詢集あり)蘇州萬壽寺の詩僧行中(名は至仁熙怡叟の別號あり仲銘と交り詩文を以て頗る宗門に名を得集を滄屋集といふ)共に詩を以て之を途る。仲銘が詩に曰く、

蕃航轉舵浙江濱。歸到扶桑二月春。海若朝迎霞似綺。天吳夜舞浪如銀。心傳列祖源流遠。身被中朝

雨露新。郷國君臣應共喜。郭門幢蓋擁朱輪。

行中が詩は送叡上人還日本并簡雙林明極和尚と題し願嗣立が元詩選にも載せらる(行中は元末より明初の間在世)曰く、

十年問法天王地。萬里郷山碧海東。雪室有禪傳鼻祖。蒲帆無恙轉秋風。潮連蓬島晴雲白。霞擁扶桑

曉日紅。爲問雙林老尊者。尺書還寄北來鴻。

鄂隱歸東するや絶海附するに法衣を以てし、又龍湫より贈る所の夢窓説法の衣を授けて師祖の家風を傳へしむ。隱又玖石室に謁す。室偈頌を贈りて曰く、

舞棹呈橈古渡舟。隨波逐浪老岩頭。無端辣手打婆子。驚追白沙灘上鷗。

絶海寂するの後、西胤等と土州吸江庵を守る。今傳ふる所の吸江庵法式なるもの以て之を證すべし。

吸江庵法式

- 一 諷經坐禪不報公界而懈怠者可有罰
- 一 號先師之門弟常々來集。費用常住公物。甚不可然。若有向晚來者勿過一宿一飯云々
- 一 庵中僧衆並行者人。力勿致鬭諍。若有小紛爭。則守職者勸令和合。及于相罵相打。不論理非而俱出院。
- 一 門内不許入酒

一 諸庄岡庄主職事以三年爲限云々

右件 本院末寺堅守之莫忽諸

應永十三年八月日評定

妙勤 花押

俊承(即西胤) 花押

惠(即鄂隱) 花押

亦以て其雲水湊泊の盛觀ありしを想見すべきなり。已にして將軍義持の命に接して上京して等持に補せられ、尋いで相國に住す。時に應永十七年三月、惟肖之を賀するの疏に曰く、

前等持鄂隱和上住相國寺諸山疏

天覺登朝。紋贈典於兜率。魏公護教。起同參於徑山。昔後先而儻逢。今父子而并得。某紫陽間氣。

香雪主人。萬金壁左右無容。識者收急。千頃波澄撓自若。望之吝消。自非莊嚴殊方。焉副際過異數。

湘角潭北。耽源注破白崖。承天永安。圓照坐斷相國。寔爲心宗下巨擘。如見勝定中點頭。池頭柳絮

院落梨花。再觀紫禁今日。裴李春蘭王劉美竹。叨陪青雲后塵。隣歡惟新。外衛益(時北山甲第再復于城中余時董眞如)寵

幾もなく印を解きて大幢院を創めて之に居る。防州大内義弘光明山瑞雲寺を建て、隱を延きて開山

始祖となす。武藏守細川頼之招請して阿州寶冠寺に住せしむ。尋いで鹿苑院に遷り左街僧録に任じ、禪規大いに振ひ萬衆雲萃す。將軍義持親しく弟子の禮を執る。稱光天皇其道望を欽し以て衣盂を受く。二十四年天龍寺に住し其歲九月退院し幡然海南に走せて復吸江庵に至り、間々或は寶冠寺に在り。吸江庵は乃ち夢窓の創め義堂絶海の住せし所、隱至るに及んで堂宇悉く備はり鐘鼓互に答ふ。十境の勝あり。隱其間に逍遙逸居し、翰墨風雅を以て歲月を途る。五山學徒の遠く來りて訪ふもの絶えざりき。隱曾て題吸江圖の作あり。曰く、

我居山麓識山麓。神妙何人細意圖。碧瓦朱臺雲際湧。蒼松翠竹雨餘蘇。盤回風磴緣岩險。縹緲江亭浮水孤。更見塔尖出如筆。也知絶頂有靈區。

三十二年二月年六十九にして吸江寢室に寂す。門人全身を庵後に窆す。隱居る所に蘆花深處と扁し、齋を景蕉と曰ふ。康正二年、後花園天皇賜諡して佛惠正續國師といふ。法嗣に惟明瑞智・古邦惠淳・以鈍等銳・棠陰等夷等あり。

臥雲日件録文安五年正月廿九日の記に云ふ、前刻信中勝剛話中。有一二可記者。信仲曰。曾住淡州栖賢之日。渡海訪鄂隱。々居於阿州寶觀寺。相共唱和。鄂隱詩曰。七年看盡嶺南梅。遺恨曾無帶雪開。今日階前鬪清白。座中況遇北人來。云々。又寶徳四年三月十八日の記に、忽憶應永甲申歲。鄂隱與曇

仲元璞。同入此山湯。(橋州湯山)。時惟肖自郡中長樂寺尋。有唱和什。蓋一時雅集也。云云。享徳二年二月十七日の記に、一日絶海就慈恩寺拈香。觀中太岳從焉。仲芳知之。相招聯句。時鄂隱執筆書之。と。蓋し鄂隱書に巧なりしを以てならん。又寛正四年十月二日の記に云ふ、雲居來曰。雲居庵在九州筑後國菊地領内。本庵不得知行者年久矣。鄂隱居鹿苑之時。爲數年而又失之。今菊地好學。苟從事於文字。無不知聞云々。鄂隱一身を以て防筑土阿の諸勝地と五山との聯絡を成せし所、後日西南地方文運の消長に照し看ば、頗る興趣ある事蹟たるを覺ふるなり。

又鄂隱の傳記を補ふべき一佳話の傳はるあり。林春齋の本朝一人一首卷十之を説きて詳なり。今煩を辭せず。其全文を轉載すること左の如し。

林子曰。明丘濬瓊臺類稿四十七。載萬里一歸人卷跋。曰。右五言律詩一首。七言絶句二十一首。乃日本國僧作。以送瓊之戎士蔡庸乘常者也。詩以唐體。字以晉書。書以繭紙。卷以萬里一歸人爲名。蓋摘其詩中之句。而是句則又剽唐王右丞送人下第之詩之句也。嗚呼觀於是卷。可以見孝之一念無間華夷矣。蘇子曰。天下豈有無父之人。信哉斯言也。乘常於永樂中。隨由海將軍。備倭。海上遇賊于萬全。我軍敗績。遂爲所俘。同時被執者。皆死双下。獨乘常以母老辭得脫。間關海東諸夷。達日本。投其國僧惠歲爲師。祝髮爲浮屠。乘間言及母在。彼僧惻然憐之。自其主。縱之得歸。乃率其徒。賦詩以送之如此

云。予於是不獨見乘常之克孝。而因以知夫孝之在於人心放諸四海而準也。夫倭虜至爲不道。日本東夷之人也。一聞乘常母老之言。卽惕然興夫惻隱之心。使乘常母子復得相見。孰謂孝親之心以華夷而間哉。後乘常果如其志。養繼母朱氏。以終天年。今乘常亦已七袞矣。嘗以是卷見示。予每展誦。未嘗不三復嘆息。故書此於其卷末。使博雅君子有取焉。未必不足以備太平御覽之一也。」廣東通志七十二曰。蔡庸衛倭戎士也。永樂中年二十餘。於萬全獨洲洋。爲賊所俘。後至日本。投其國僧。祝髮爲浮屠。久之乘間泣言母老在堂。僧惻然白其主得釋。遂率其徒賦詩。名萬里一歸人卷。以贈之。及歸母尙無恙。而庸年已七十餘矣。鄉里莫不嘆異。」按丘氏詳言之。然併廣東通志觀之。則其事益明。故並載之。通志唯言日本國僧。丘氏記其名曰惠藏。歲當作歲。卽是天龍寺僧慧藏。號鄂隱。爲津絕海弟子。而頗有詩才者也。其卷中詩。想夫可爲當時五岳文字禪之作也。今若考諸五岳詩稿。則或可得之。然不見於中華書。則非所以可載於此。故題下曰闕。而引丘氏跋。以著其始末。嗚呼此亦本朝一故事。而載於丘氏集者。與子美詩中黃四娘。可併按者乎。凡此集所關於五岳者不載之。然是見於中華書。故如此。所謂萬里一歸人之卷なる者、今之を見るに由なし。鄂隱和尚行錄(附南游稿見五山文學全集)にも此卷の事を記し、乘常既歸以師詩示友人。終流布上梓。又傳於皇朝云とあれど其の果して然るや否やを確知する能はず。又鄂隱等の集中に於ても、未だ此事に關したる記述を發見する能はざるを憾とするのみ。

第二節 著述及び詞藻

南游稿は鄂隱の詩集にして、主として其吸江庵に居りし時の作を收む。今五山文學全集第三輯に編入せらる。絶海の蕉堅稿は鄂隱の褒輯する所に係る。

鄂隱の詩品、絶海に譲らざるを得ざるも、其清遠なる者幽雅なる者は優に惟忠・西胤等の間に屹立して、五山の第二位以下に落ちず。試に下に録する所に看よ。七言絶句にては、

白華巖上坐巍然。如意輪光月在天。着眼諸人試聽取。潮音日夜寺門前。

因如意輪安座開光明述

一偈呈大衆(吸江庵潮音閣安置之)

豐城劍氣甚雄哉。化作黃龍擊角來。送以五臺雲一片。携回鄉國起風雷。

昇公外史訪予五臺寓所

述一偈以送歸云

納僧位大本來無。強擬安排豈不愚。遮莫秋風生鄂渚。孤舟自隱一叢蘆。

小皎皎書記按老拙名於

吸江庵祖位中聊述一偈見其意云

窮谷樵夫鬢已霜。中書堂事敢論量。安危賴有汾陽在。門掩烟蘿午夢長。

奉謝上杉中書公惠起燭

(二首)

正是桃花浪漲辰。禹門想見化龍新。青々江上藤蕪草。休說長安多麗人。

次上巳韻

研精儒典又講禪。恐是再生楊大年。試問少林真的旨。何如太極未分先。

張公子自天台來。改名

德廉。稱曰倨巖。述禪詩二首見意。次韵答之。(一錄)

龜山鎮侍者宇治之產

也。訪予吸江。有一絕。次韵酬之。自得鈍庵西堂見之一笑。(二首)

南陽曾隱白崖山。道韵無端動帝寰。今有世人尋塔樣。海潮日夜滿前灣。

次韵東山桂侍者題吸江

吞海二絕句

滄波倒蘸五臺岑。沙竭羅龍窟宅深。臨眺何時最清絕。私宵月上到天心。

同 右

上界何求無熱天。松風一榻看雲眠。山中宰相愛成癖。投宿論心知幾年。

吾道友煥章師。扁所居

曰松風。大先居士慕其風。而來往有年矣。一日辭歸。留以和歌。師作禪偈。

擊節焉。千里之外。想

見其高風逸韵。聊依嚴押寄題云。

兩岸蘆花月滿舟。詩中歷々說曾游。相知何恨不相見。萬里烟波雙白漚。

失題(五章可比連城壁。全而還焉。著以瓦礫。笑而幸。)

江草何知喚客愁。棹郎徒自唱伊州。離人心有不平事。到處深悲白露秋。

江頭亭子小於舟。細浪輕風放足浮。明月蘆花賴無主。片帆將問五湖秋。

次韵鍊喝食

明遠藏主有題吞海亭作

次韵

黃花迎節自鮮新。北客品題詩有神。江上白蘋秋已老。風吹故向未歸人。會江上祭神。有作。次韵

觀侍者自京至。重九日

此地自無塵夢勞。江風山月共清高。劉郎若不怕春色。何管玄都觀裡桃。

次韵梅侍者題吸江二絕

千里通書尤可喜。浮杯渡海疾於槎。乃翁若問有何報。江上芙蓉盛著花。

超海倫藏主。奉玉泉叔

芳老兄命。訪予海隅。語話之次。出示老兄送月礪偈。因次韵酬之。

山櫻露重未飄風。萬朵曉雲迎日紅。一片無端點衣袖。似欺老懶白頭翁。

用珂知客旅中看花韵

冒險何心兩度來。杖藜容易欲尋梅。不知南國春光過。靈澈無詩亦可哉。

悟侍者五載前南遊。作

此送行。癸卯春重來。求書舊偈。有餘地。賦一絕填之。

黃龍移窟到南溟。白浪滔天風雨腥。幸喜又昇九宵去。江心仍舊五臺青。

送季英外史禮五臺京師

秋水瀾茫秋霧濃。離亭情緒有何窮。明朝盡送歸舟去。隨意江楓岸々紅。

北來諸子相次而發。爽

侍者重賦一絕留別。次韵送之。

午圃薔薇露正乾。悠然定起好凭欄。看花須具看花眼。莫做遊蜂戲蝶看。

次宗子薔薇韵送別

十月山中俟早梅。巖松溪竹怪花開。普賢元助寶冠化。象駕崢嶸拂曉來。

先師南遊日。會舊相桂